

大津市歴史博物館調査報告書 2

膳所藩町奉行川那邊壯右衛門日記

令和四年（二〇二二）三月 大津市歴史博物館

はしがき

大津市は、明治時代末年の『大津市志』の発行以来、数十年に一度、時代の要請に応じて市史を編纂してきました。その度に多くの古文書・歴史資料が調査され、その歴史情報が蓄積されてきました。

現在、市史編纂事業を引き継ぐ大津市歴史博物館では、館蔵・個人蔵を問わず、貴重な文化財の調査を通じて情報を発信しています。その中で、以前より有志の市民の方々のご協力のもと、古文書・歴史資料の調査・解読を進めてきましたが、令和三年（二〇二一）度よりその成果報告書を順次発行する取り組みをはじめました。

この報告書では、琵琶湖の南端、瀬田川河口部の膳所の地を拠点とする膳所藩において、町政を統括した江戸時代後期の町奉行川那边壮右衛門の日記をまとめました。膳所藩に関する史料は、明治時代初年の廃藩時に散逸したといわれ、市中に残る膳所藩関係資料の調査・整理・保存は喫緊の課題の一つに位置付けられます。本史料は、江戸時代後半の限定的な期間の日記史料ですが、膳所藩や城下町、周辺地域の歴史文化に関する情報が多くみられます。地域史の重要な史料の一つとして活用いただければ幸いです。

なお、最後になりましたが、本書の発行にあたり、解読・校正において大津古文書研究会の皆様には多大なる御協力を賜りましたこと厚く御礼申し上げます。

令和四年三月

大津市歴史博物館

〔目次〕

はしがき	1
目次・凡例	2
膳所藩町奉行川那辺壮右衛門日記と膳所藩史料 (解題にかえて)	4
一、日記(一冊目) 嘉永二年六月～九月	9
二、日記(二冊目) 嘉永二年一〇月～十二月	40
三、日記(三冊目) 嘉永三年正月～七月(一九日)	61
四、日記(四冊目) 嘉永三年七月(二〇日)～十二月	94
膳所藩町奉行川那辺壮右衛門「日記」の解読を終えて	125

〔凡例〕

- 一、本史料集は、大津市歴史博物館が所蔵する膳所藩町奉行川那辺壮右衛門「日記」を翻刻したものである。
- 一、解読にあたっては、大津古文書研究会の各氏の協力を得て、大津市歴史博物館の五十嵐正也、高橋大樹と、樋爪修(元本館館長)が原本照合を含めた校正をおこなった。なお、編集は高橋が担当した。
- 一、翻刻にあたっては、原本の体裁を尊重しながら、組版上の事情により、追込み形式とした。また、平出や台頭、欠字については省略した。
- 一、翻刻した文字について、変体仮名は現行の仮名に改めたが、江、而、与、者、茂などはそのままとした。また、ㇿ(より)以外の合字は仮名に改めた。さらに、旧字体、異体字については、固有名詞を除き、常用漢字に改めた。
- 一、虫損・欠損等による判読不能の文字については、その字数分を□で示し、字数不明の場合は「 」として表記した。
- 一、翻刻にあたり、適宜、読点を付した。また、傍注について右側に()で括弧で示した。その際、誤字と思われるものは正字を付し、原本どおりの場合は(ママ)、(衍)などとした。さらに、墨消し(ミセケチ)の場合は、その文字に網掛けを施してある。
- 一、本書利用者の参照の便のため、月日についてゴチック体で示した。
- 一、膳所藩町奉行川那辺壮右衛門「日記」には、文書を写し込んだ箇所が多数ある。その中で、署名下の印(写し)について、原本においては丸印を「○」、角印を「□」として表現されているが、本史料集では判読不能の「□」と区別しがたいため、すべて「○」で統一した。
- 一、原本において記主の川那辺壮右衛門の追記(「聞届」など)と思われる部分については四段下げで示している。
- 一、原本上で図示されている図面については、トレース図を掲載した。トレース図は、大津市歴史博物館職員の大村紀子が作成した。
- 一、史料には、賤称・蔑称などの差別用語とされる言葉があるが、当時の社会情勢を正しく認識するためそのまま表示したものであり、差別を容認するものではない。読者においてはその点をよく理解され利用されたい。
- 〔謝辞〕本報告書の発行にあたり、次の関係機関・個人の協力を得た。
本土博成(京都大学文学研究科助教)、京都大学文学部古文書室、同大学文学部図書館、寺田智次(膳所歴史資料室)、東京大学法学部法制史資料室



膳所藩町奉行川那辺壯右衛門「日記」1冊目表紙



膳所藩町奉行川那辺壯右衛門「日記」3冊目 嘉永3年6月19日条

膳所藩町奉行川那辺壮右衛門日記と膳所藩史料(解題にかえて)

はじめに

ここに紹介する「膳所藩町奉行川那辺壮右衛門日記」(以下、「日記」と略)は、江戸時代後期に膳所藩町奉行を勤めた川那辺壮右衛門が記した役務日記である。「藩」は、明治新政府が明治元年から同四年に一時的に使用したものであるが、ここでは通用にしたがって「膳所藩」を用いる。記録期間は嘉永二年(同三年(一八四九)五〇)で、現在四分冊で伝わっている。この「日記」は、昭和五〇年代の新修大津市史編さん事業にかかり同室が収集(購入)した古記録で、その後、大津市歴史博物館に移管されたものである(収蔵番号〇六―〇五―〇〇二一)。

膳所藩は、琵琶湖の南端、瀬田川の河口部に位置する膳所に城を構え拠点とした譜代藩である。その藩史について詳しくは、大津市編『新修大津市史』(一九七八)八七)や郷土史家竹内将人著『膳所六万石史』(一九八三)あるいは当館企画展図録『膳所城と藩政』(二〇一八)で基礎的情報がまとめられているのでそちらを参照されたい。

ところで、そもそも膳所藩に関する史料はそれほど多く伝来しておらず、この「日記」は藩政や組織、さらには城下町の生活史を考える上で重要な情報を提供してくれるものである。そこで「日記」に関して、膳所藩町奉行や記主、膳所藩史料の概説を示し解題にかえたい。

一、膳所藩町奉行と川那辺壮右衛門

まず「日記」の内容をみていく前に、膳所藩町奉行の職掌と記主である川那辺壮右衛門について述べておきたい。

明治四一年(一九〇八)、旧膳所藩士であった積水居士(平田好)が膳所藩についてまとめた『懷郷坐談』所収の「膳所藩職制并兵制」によれば、町奉行について次のように説明している。

一、町奉行(一人)、城下の町民を管理し、且親族諸侯等城下通行の節、送迎の事に任ず(町同心組属之)

右四役の中より選抜して任之

つまり町奉行は、城下の町政を掌り、藩主の親族や諸大名などが城下を通行する際に送迎役を担う役とされる。また、町同心組はこの町奉行に所属する、ともしている。さらに町奉行は、四役(古組頭、持組頭、使番者頭)の内から選出されていたという。

ここに、膳所藩町奉行の職掌として参考になる史料が「膳所城下町諸役留」(一八世紀編纂、東京大学法学部法制史資料室蔵)である。これは、膳所城下町に関する諸役、藩主や家老をはじめとした家中との応対、寺社・年中行事など、全一二五項目で構成され、城下町治安・饗応対応マニュアルとして町奉行が作成したと思われるものである。その中の目次項目に①「町奉行役附道具」、②「町奉行古役之順之事」があり、対応する本文を見ると、①は町奉行引継ぎ道具類の覚書、②は延宝八年(明和四年)までの歴代町奉行名・任期の書き上げとなっている(表1)。歴代町奉行の中の「川那辺市左衛門」は、本「日記」の記主である壮右衛門の六代前の当主である(詳しくは後述)。したがって、本書で紹介する「日記」は、右の「膳所城下町諸役留」成立以降、町奉行に就任した川那辺壮右衛門が、職掌に対応して記した具体的な職務記録であるといえる。

では次に、記主である川那辺壮右衛門がどのような人物であったのか、知りうることを述べておきたい。

まず、明治時代に編纂された『膳所藩士列伝』(中村隼人編著)によれば、壮右衛門は名を「昌惇」といい、俸禄一二〇石、越後流兵学を戸田半太夫に学んで膳所藩の「軍事役」として活躍し、また「町奉行」を勤めたとある。そして、安政四年(一八五七)正月二日に六六歳で没したという。この『膳所藩士列伝』において壮右衛門昌惇の経歴は非常に簡便であり詳細は不明である。

しかし、ここで壮右衛門自身が天保六年(一八三五)五月にまとめた「由緒書扣」という表題を持つ川那辺家歴代の書き上げが残されている(京都大学文学部図書館所蔵)。後述するように、「日記」を含め、川那辺家伝来の文書・記録は、現在複数の機関に分散所蔵されているが、この「由緒書扣」もそのうちの一つであろう。同書に記された家譜を(表2)にまとめた。それを参考にすると、川那辺家初代を藤左衛門秀政とした場合、壮右衛門

は川那辺家九代目となる。

また「由緒書扣」の奥書には、署名を添えて「四十四歳」とあるので、逆算すれば壮右衛門は寛政四年（一七九二）の生まれであり、寛政十一年（一七九九）四月の父儀右衛門の病死により、翌月に家督を相続したことになる（六〇石）。この時、御目見小姓となっており、その後、享和二年（一八〇二）に御児小姓、文化元年（一八〇四）に元服御小姓組を命じられている。次いで、文化四年（一八〇七）御馬廻組、文政三年（一八二〇）に御者頭役（四〇石加増）に転任したらしい。したがって、先に示した町奉行が者頭を含む四役から選出されていたとの『懷郷坐談』の記述を参照すれば、壮右衛門は、「由緒書扣」成立の天保六年五月から嘉永二年の間に町奉行に転任したということになる。

ここで、もう少し就任期間を知る手がある。それが大津町に拠点を置き、江戸時代において琵琶湖水運の中心的な役割をになった大津百艘船仲間の記録「万留帳」である（重要文化財、当館所蔵）。すなわち、弘化二年（一八四五）「万留帳」の目次部分に「膳所舟奉行昨冬交代、当年初而之年始二付年酒被出候事」とあり、それに対応する本文に「舟奉行川那辺壮右衛門様」に年頭挨拶として羊羹を贈答するとある。この「舟奉行」とある点については、後年「万留帳」の目次部分のみをまとめた「抜書」が作成された際、該当箇所に「膳所町奉行昨冬交代、川那辺壮右衛門様当年初而年始二付御酒被出候事」とある。「舟奉行」は「町奉行」の誤記とも考えられなくもないが、当該期において両者は兼帯していたと考えられる。

遡る「万留帳」天保五年正月の記事によれば、膳所町奉行の山田善太夫の病気によって、跡役として就任した向坂重吾へ大津百艘より羊羹一包を贈っている。その肩書には「御町役舟方兼帯」とあり、膳所町奉行と舟奉行は兼帯であったことは間違いない。大津百艘船仲間は、琵琶湖水運に係することから、膳所舟奉行（＝町奉行）への交代情報や挨拶について書き留めていたと思われる。

また、壮右衛門「日記」には、舟奉行の職務と考えられる記述や、先に触れた「膳所城下町諸役留」にも水主組の管轄に関する記述がみえ、膳所町奉行は舟奉行も兼帯していたと考えて大過ないだろう。

なお壮右衛門の町奉行退任時期についても「抜書」の安政二年（一八五五）

の箇所に「膳所町奉行川那部壮左（右）衛門様退役」とあり、壮右衛門の町奉行の就任期間は、弘化元年（天保十五年）冬～安政二年ということになるだろう。そして、壮右衛門が町奉行として「日記」を記していた嘉永二～三年は、五八～九歳の時にあたり、晩年の記録ともいえる。

その後、隠居に関する史料が確認できないが、先述の『膳所藩士列士伝』によれば壮右衛門は安政四年正月に逝去している。家督は壮右衛門の息子へと継承されたと思われるが、このあたりについては、明治二年（一八六九）頃にまとめられた分限帳（竹内将人編『膳所藩名簿』一九七四年）があり、そこに川那辺姓が二人確認できる。その一人は、新組頭の中にみえる「川那辺弘記」（俸禄一〇〇石）という人物である。先に示した「由緒書扣」など歴代の経歴を参照するに、川那辺家は小姓・者頭・小納戸役を務めたようであり、弘記は壮右衛門の次代（子息か）と思われる。なお、もう一人「川那辺某」（俸禄切米一二石、二人扶持）なる人物が「中小姓組」の中に確認できる。彼は弘記の息子であろうか。

ひとまず江戸時代前期から明治二年にいたる川那辺家の来歴については以上のとおりである。

二、川那辺壮右衛門「日記」について

続いて、壮右衛門「日記」の内容についてみていこう。まずは書誌情報を次に示しておく。

（二冊目）嘉永二年八月～九月

一一二丁、縦二四・八cm、横一七・五cm、表紙に朱筆「式」

（二冊目）嘉永二年一〇月～二月

六八丁、縦二四・二cm、横一七・五cm、表紙に朱筆「三」

（三冊目）嘉永三年正月～七月（二九日）

一〇一丁、縦二四・三cm、横一七・三cm、表紙に朱筆「老」

（四冊目）嘉永三年七月（二〇日）～二月

一〇六丁、縦二四・三cm、横一七・二cm、表紙に朱筆「式」

右にも示したように、各冊表紙に朱筆で記された「式」「三」「三」などの書き込みは後筆と考えられ、後日、整理のために付されたものと思われる。つまり「日記」は一～三冊に分冊で記録されていたようである。ただし、

嘉永二年の一月～五月分の「壺」部分は現在伝来していない。また、筆跡は総じて同一であり、壮右衛門自身が筆録していたと判断してよいだろう。

その記述は日次形式で、月日の下に、天候・詰番の同心を記し、その日の案件を記録している。主には、①各町内から提出された願書や訴願の写し留め、あるいは②下達文書等の手控え、③それ以外の案件の覚書であり、町奉行（舟奉行）としての任務以外の記述は、ほぼ見出すことはできない。それにかかわり、①については、処理案件を「聞届」、「大目付へ案内」など、受理あるいは上役への稟議などの対応を追記している。審議が後日に及んだ場合は、日を遡って、該当する記録部分の余白に「聞届」などを追記したようである（本史料集では、凡例で示したように四段落して示している）。そして、記述内容としては、町人家屋敷の普請にはじまり、新鯨請負争論や金銭争論などの民事案件、寺社の法会・祭礼の届出など細かな対応が記される。また、要人の東海道（城下通過）や参勤交代から帰城する際の応対なども記されている。わずか二年弱の記録であるが、その内容は多岐にわたり、城下町の生活史を考える上で貴重な情報を提供してくれる。

三、膳所藩政史料と川那辺家文書

ここまでみてきたように、川那辺壮右衛門による「日記」は、いわば町奉行としての藩政史料に属するものと思われるが、現在は川那辺家の関係資料は散逸し、数点が研究機関等に分散所蔵されている。まずそのあたりの前提となる経緯を少し述べておきたい。

ここで再び平田好の『懐郷坐談』（明治四一年）をみると、その序文において明治初年に膳所藩政史料が破棄されたという説明がある。

並に特筆すべきは旧藩記録焼捨の挙なり、开（それ）は維新更始の際旧格を廃絶するの旨趣に抛り、乃（すなわち）明治元年十二月十三日午刻を期して、藩庁の諸記録焼捨の令を布き、之を断行せられたり。当時玉石同燬の厄に罹り烏有に委しもの居多とす、故に此書を編輯するに当り其資料を得る事容易に非ず、

明治元年、旧藩記録の廃棄通達にのっとり、「藩庁の諸記録」を「焼捨」たという。また、ある伝聞情報によれば、（藩主とともに関東に移動していた藩政史料が…筆者注）第二次世界大戦時中に東京空襲で焼失したともい

う（膳所藩史料を読む会編『膳所藩郡方日記（元禄三年・元禄四年）』膳所藩史料第2巻、滋賀県立図書館、一九九一年）。

いずれにせよ、現在、膳所藩政関係史料は、その一部を除きほとんどが滅失してしまっていることになる。となれば、わずかながら今に伝わる一部の藩政資料から丹念に藩史を復元していくしかないのが現状だろう。

このように、わずかな藩領統治に関する資料の一つとして、「焼捨」を逃れた史料として壮右衛門「日記」が位置づけられる。もともとこれは本来、川那辺家文書として伝来し、その後散逸したものと思われる。

ここで、当館所蔵の「日記」以外に、川那辺家文書と思われる史料について述べておきたい。川那辺家旧蔵と思われる資料は、現在二つの研究機関が分散所蔵している。

〔1〕東京大学法学部法制史資料室所蔵分

まず、東京大学法学部法制史資料室に二点の史料が所蔵されている。その一つは、先にも触れたように（1）「膳所城下町諸役留」（後補表紙題箋「江州大津町諸役留」、横半帳、八〇丁）である。そしてもう一つが（2）「膳所藩町奉行裁許帳」（後補表紙題箋「近江大津町奉行裁許帳」、竖帳、六八丁）である。いずれも後補表紙題箋にあるように大津町支配に関する史料として収蔵されているが、膳所藩町奉行川那辺壮右衛門関係史料であることは間違いない。

このうち後者の裁許帳には、原表紙左下に記主・所持者として「町奉行川那辺壮右衛門」と墨書されている。また、同じく表紙には嘉永二～七年（一八四九～五四）、安政三年（一八五四）の年記があり、その間の「裁許帳」であったことがわかる。ただし、同史料は、嘉永七年から表紙にない安政六年（一八五九）の内容分を収録している。また、先に述べたように、川那辺壮右衛門は安政二年に町奉行を退任し、同四年には没しているの、それ以降の町奉行や同心によって記録されたものであると思われる。

また、壮右衛門「日記」にみえる「裁許帳二記ス」あるいは「裁許帳二委シ」などと記されるものは、この東京大学法学部法制史資料室所蔵の裁許帳を指すと思われる。なお、本史料は裏打ちがなされているが、虫損が甚大で、文意が取りづらい箇所が多い。

〔2〕京都大学文学部図書館・同古文書室所蔵分

もう一つの所蔵機関は京都大学文学部図書館・同古文書室である。先に示した天保六年「由緒書扣」(壮右衛門筆)を含め、京都大学文学部図書館(1・2)と同古文書室(3・5)保管の川那辺家関係史料がある。いずれもが印記により、大正六年九月二〇日付で購入されたものであることがわかる。

①「由緒書扣」天保六年(二八三五)〔竪帳、九丁表紙共〕

先にも確認したように壮右衛門が自ら川那辺家の来歴を記したもので、内容としては、天正年間から天保六年までの記録である。

②「昌宣一生記」江戸時代中期(享保三年)天明元年)〔竪帳、九丁表紙共〕

昌宣の享保三年の誕生から天明元年の隠居まで、その来歴を詳細にまとめたもの。一七歳での藩主へのお目見え、翌年の元服、二四歳の江戸御供(参勤交代)など経歴を書き上げる(大津御蔵役御目付、大津膳所御払米方、土砂留奉行など)。また、「諸芸師覚」として読書や弓術、馬術などの師名を書き上げるなど情報は多岐にわたる。

③天保一〇年「御小性勤方諸扣」(川那辺昌富筆、横帳、二二丁)

〔内容〕文化元子歳当御代御初入之節仲真一統申合左之通定置度事御発駕御帰城之事、文政十三庚寅年重根矢柄取方達改御代香(替)之覚、遠近御供之覚并御先番之事、御給仕之次第并御客様被受候節々覚、御使并御法事之覚、月之御祝、諸雑之分、御上京御供之覚、途中装束之覚

④「川那辺氏手扣二」(後補表紙)①②③④⑤

①「御代替二付取扱覚帳」(川那辺壮右衛門筆、弘化四年七月、竪帳、一〇丁)、②「町奉行参事ノ節心得」〔竪帳、四丁〕、③「武闘講仕法帳」〔竪帳、三丁〕、④「(原題なし)町奉行心得書(宿関係)」〔竪帳、一三丁〕

⑤「川那辺氏手扣二」(後補表紙)①②③④⑤

①「御小性勤江戸御供并詰中扣」(弘化三年、川那辺昌富筆、横帳、一八丁)、②「康融公御初入之部御祝御規式」(弘化四年、横帳、二丁)、③「御所車」(嘉永四年三月、川那辺昌富筆、横帳、七丁、〔内容〕御供之節心得、御先番ノ節心得)、④「御召物数覚」(嘉永四年卯月、川那辺昌富筆、横帳、七丁、〔内容〕御用召物、御挨拶式、御用挨拶人)、⑤「御推任叙・御参内御式列」(元治元年三月、横帳、一〇丁、〔内容〕三月

七日従 系御城御式列二面御参内之御次第

(3) (5)は、壮右衛門および昌富の筆になる記録類で、いくつもの史料が綴じ込まれたものである。後補表紙は随分と新しいもので、大正時代の購入時期に付されたものかもしれない。また、筆者として表紙などにみえる昌富は、その経歴など不詳であるが、壮右衛門が町奉行を務めた時期に御小姓勤方であったことなどを考えると、子息弘記のことかもしれない。いずれにせよ江戸時代後期において川那辺家で保管されていた職務に関する手控え書であることは間違いない。

むずびにかえて

以上、川那辺壮右衛門「日記」とその内容、さらに関係する同家旧蔵資料についてみてきた。繰り返しになるが、本「日記」はわずか二年弱の記録ではあるが、内容は詳細であり、記主の職務遂行の姿勢が多く読み取れる。

膳所藩に関する藩政史料の現状は先に述べた通りである。ほとんどが「焼捨」られたと思われるなかで、壮右衛門「日記」をはじめとして、藩士文書を当館でもいくつか収蔵している。それらは、平成三〇年に開催した展覧会「膳所城と藩政」において展示したものの、詳細な紹介は後日の課題としたままであった。また、同展には、本多神社の傍らに設置された膳所藩資料館と本多文庫に伝来した文書・記録類を展覧したが、やはり詳細な調査・検討は後日を期したままである。

さらに、村方支配に関する史料としては、滋賀県立図書館に膳所藩関係史料として「膳所藩郡方日記」を中心に収蔵されている。特にこの郡方日記は、滋賀郡・栗太郎、飛び地の河内国(現・河内長野市)の藩領の村々統治の業務日誌であり、これまで「膳所藩史料を読む会」によって一部が解説・公開されている。また県立図書館では順次、デジタルデータの公開も進められている。

このように膳所藩に関する史料類の紹介は、着々と各所蔵機関で進められつつある。当館においても壮右衛門「日記」以外の膳所藩関係史料についても順次公開していく予定である。

高橋大樹(天津市歴史博物館)

(表1)「膳所城下町諸役留」のうち町奉行在職一覧(東京大学法学部法制史資料室蔵)

	在職期間	年数	名前
1	延宝8年(1680)8月6日～	8年	戸沢源右衛門
2	貞享4年(1687)12月1日～	24年	川那辺市左衛門
3	宝永7年(1710)9月21日～	8年	伊与田藤蔵
4	享保2年(1717)10月15日～	5年	伊与田藤蔵
5	享保6年(1721)3月25日～	16年	羽賀友右衛門
6	享保21年(1736)4月24日～	11年	伊藤左近右衛門
7	延享3年(1746)7月25日～	8年	永田与一右衛門
8	宝暦3年(1753)10月25日～	4年	菅谷宇右衛門
9	宝暦6年(1756)2月19日～	1年	菅井次郎太夫
10	宝暦6年(1756)3月25日～(宝暦10年)	5年	多米今右衛門
11	宝暦7年(1757)正月3日～(明和元年)	7年	高橋緘右衛門
12	明和元年(1764)～	1年	山崎三郎衛門
13	明和元年(1764)～(明和2年)	1年	坂元茂太夫
14	明和2年(1765)7月15日～明和4年6月	3年	多原次郎右衛門

※在職年数は史料原本表記による。

(表2)川那辺家歴代経歴

1	川那辺藤左衛門秀政	天正8年7月	石山合戦中、討死
2	川那辺治郎左衛門秀高	--	病死
3	川那辺市左衛門	元和9年 明暦2年3月	本多俊次召出 病死
4	川那辺又市	-- 貞享4年11月	御小姓(本多俊次召出・亀山時代) 病死
5	川那辺儀右衛門	貞享4年12月 享保13年11月 享保18年9月 元文2年11月	家督相続(100石) 御持弓頭助役(享保14年正月迄) 隠居 病死
6	川那辺孫十郎	元禄年中 享保2年 享保18年9月 元文5年 延享2年2月	御小姓 小納戸役 家督相続 御馬廻・大御金元役 病死
7	川那辺儀右衛門	元文2年8月 寛保元年2月 延享元年5月 延享4年2月 延享元年3月 宝暦4年5月 宝暦5年10月 宝暦6年6月 宝暦8年正月 明和元年正月 明和元年5月 明和元年6月 明和5年9月 明和8年 安永9年12月 寛政5年7月	御小姓(金2両2人扶持) 切米10石2人扶持、江戸御供 家督相続(80石) 御小納戸役 御徒士頭(同2年10月迄) 砂留奉行 御勝手方(転役) 河州・大坂御作用方出入濟口御用掛り 20石加増 朝鮮人来朝御用 50石加増、御元々役(7月迄) 御隠居御家督御用(江戸下向) 京都火御番 勢多橋掛替普請奉行(同9年5月) 隠居 病死
8	川那辺儀右衛門	安永7年 安永9年 寛政元年2月 寛政2年3月 寛政4年2月 寛政5年正月 寛政7年2月 寛政10年6月 寛政11年4月	金2両2人扶持、御小姓組 家督相続(120石)、御馬廻組 御勤番目付 御中小姓組(降格) 御馬廻組帰番 横御目付手先忍御目付 御者頭役 町奉行 病死
9	川那辺壮右衛門	寛政11年5月 享和2年5月 文化元年11月 文化4年正月 文政3年12月 文政13年正月	家督相続、小姓(60石) 御児小姓 元服、御小姓組 御馬廻組 加増(40石)、御者頭役鉄炮組御預 加増(30石)

※川那辺壮右衛門筆「由緒書扣」より抄出

一、日記（一冊目）嘉永二年六月～九月

（表紙）

嘉永二年己酉年（（マ））
年

日記 （朱筆） 式 （マ） 式 （追筆）

「川那辺壯右衛門」

六月ヨリ 川那辺壯右衛門

（本文）

六月中

朔日 晴 徳右衛門

一、伊勢屋町塩屋吉左衛門裏側屋根直し候付、足場掛候段届、大目付へ案内、

一、寿明姫君御下向二付、当町筋明後三日見分、六ツ半時西惣門揃之旨、御用掛り箕浦猪左衛門被申達候、夫々達ス、

一、新堀川浚之義催促申達ス、

二日 晴 藤助

一、伊勢屋町源右衛門居宅屋根葺替、明三日致候段届、町見分二付、其心得可有様申達ス、

一、宮町御普代様小使左兵衛先達而類焼二付、役所金拝借相願承届、当七月返納之处、当暮迄延引相願候得共、一旦上納為相済、其上新二借可申段申渡、則元金利足共上納、猶又同五両借遣ス、新証文二認替、御切紙手形一通入ル、

三日 晴 代右野右衛門

一、当秋寿明姫君御下向二付、当町筋今朝六ツ半時揃、西惣門を見分、四ツ時前相済、夫々取繕申達ス、委細右一件帳二記ス、

一、金三拾両 中庄村

右牛頭天皇社、昨秋大風雨之節破却いたし候处、此度御修覆願出候付、右之通三ヶ年二割合御寄附被成候、但し同年七月御達之趣、七月之部二委敷書載ル、

六月

一、新堀御鮎、当年八百屋半兵衛請負被仰付、此節右鮎抜片付之時節二付、晒屋長兵衛拝借之干借り度由、尤少々出金も可致旨ヲ以相願候得共、長兵衛承知致呉不申、此比二而八杭ヲ打縄引致、一向借呉不申候付、鮎抜候共揚場も無之、無^無抛鮎抜二三日休、右之引合二懸り、尚又鮎屋徳兵衛仲人ヲ以相願候处、年々一貫目ツ、差越候ハ、貸可申由申聞候、右地年貢銀老枚之場所老貫目も差出、当年ハ格別猶も宜老貫目位ハ差出候而も不苦候得共、半兵衛請負中ハ勿論、右跡何レ二相成候共、永々年々老貫目ツ、其究り二相成候様と之注文之趣、左候而ハ半兵衛義ハ兎も角も二候へとも、跡々請負二相成候者迷惑可致、其意味段々引合候得共、下対談ハ決而致間敷旨、長兵衛申張候、左候得ハ鮎簀干場も無之候付、御願申上段申聞、御賄手へ半兵衛願書差出候由、右意味ハ別段之趣小向之談ハ不致候、依之、御堀側芝原拝借致度段出願有之、右願書今日申上候積之由、御賄菊地隆藏^カ被申聞候付、今日被仰上候義御見合被下、一志長兵衛江理解可申聞候、今夕否哉御返答可申由談置、昼後長兵衛町代徳兵衛付添呼出し承糺候处、少々申口隆藏^カ申聞とハ相違之義も有之、段々御理解申聞セ、対談不致候得ハ、半兵衛出願御賄手二而取扱可有之、暫く申上候留置之、弥対談相成不申候哉、右御賄手二而取扱有之候得者、急度其方迷惑二可相成見込有之候、夫故右半兵衛願書取計見合被呉候様談

置候、猶予不相成否哉返答可申旨敵敷利害申渡、乍併押而対談附可申と申二而ハ無之、不成ハならぬ之返答御賄方へ此方可申入、左候ハ、前半兵衛願書之取計可有之候、其上如何様歎願候共、当役所二而取扱不致候旨申聞半兵衛義も呼二遣し対談ス、長兵衛江対談之次第承り候処、向地二魼小屋有之、新堀ト二ヶ所二小屋付諸道具共両小屋江入、尤向地小屋ニも米四俵計も入用有之、大分雜用も相懸り候付、新堀ハ右向地小屋引候得者、一方二而便利も宜敷、諸雜費も一方二而相済沢合、新堀地面借貸三百目余差出し候共、引合二付右之趣ヲ以長兵衛江談候得共、一向承知致呉不申、何分小向二而ハ相談不致候趣申聞候付、無是非出願致候趣、双方対談為致候処、段々仲人徳兵衛挨拶旁銀六百目年々差出、尤半兵衛請負替り候後も其通り申次、いつ迄も六百之極^(目脱カ)り二対談相附候段申出ル、然ル処、右二而ハ御魼永々之処半兵衛之究メ二相成、自此後請負之者迷惑ト申か、又ハ御上る御魼出来候か之節如何二候、半兵衛御魼退候節者役所之究り二相成候付、右ハ半兵衛請負中之対談、其跡請負之者ハ、又其節之談二可致^(目カ)□双方江理解申渡候処、双方奉畏候段御請申聞ル、依之、御賄菊地隆蔵江右之趣返答手紙遣ス、

四日 晴 代卯三郎

一、此間、新堀川弥三日^ハ浚取掛り候段町役届、尤昨三日者町見分二而相済、今日当番卯三郎見廻り差遣ス、

三日付落

一、別保村六右衛門、小間物屋久兵衛家^(屋敷)□株壳、残金貳拾六兩さゝ波^ハ請取預り居候処、八幡神主筑前、右之金子五兩貳歩暫之処無抛入用有之、久兵衛^ハ右金子入用之節ハ、何時二而も戻候付、当分借呉候様筑前頼申借遣候、尤証札取置申候、然ル処、久兵衛可請之残金之分仁右衛門江相渡、夫^ハ御勝手江相納可申旨二付引合候得共、出

金出来不申甚差当迷惑仕候付、筑前御呼出し御理解被下候様願書差出し候得共、右何レも六ヶ敷入沢、最初^ハ承知致しなから預り物かし候者、全六右衛門不念、御目付手二而吟味之節も右之等之儀可申処、何等之儀も不申候と相見へ、最早右一条ハ事済二相成候事、今更当手二而再興致し難く、下二而精々引合候様申諭し願書下ル、

同日付落

一、小間物屋久兵衛、此間呼出し候処、無抛用向有之、紀州辺迄罷越留守之由、然ル処、昨夕引取候趣、庄屋同道罷出、先達而^ハ目付手二而調二相成、最早事済相成候趣、就而ハ家屋敷約束通さゝ波江早々相渡御取計可致段申達、然ル処、さゝ波^ハ可請取殘金私手二入候哉否哉難相分、仁右衛門、喜兵衛、久兵衛親子、今日御勝手江可罷出候処、仁右衛門不快二付今日参り不申、御勝手へハ御断申上候、待居候共いつ快氣相成候哉難計、用事も御座候付、直様京都へ罷登り候段申聞、何レ近日二ハ又々罷歸り可申由、右上納相済候へハ、家明渡之儀者御沙汰可被下候共、承知致居候旨申聞、

五日 晴 元次

一、新堀川浚見廻り、

六日 晴 徳右衛門

一、古魼請負共銀談出入埒方付候様催促申達、

七日 夕白雨 藤助

八日 朝雨 卯三郎

九日 晴 代元次

一、五日、八百屋半兵衛、晒屋長兵衛、新堀浜干場之一条下対談之義、御賄^ハ御用人中へ和談相成候趣二者候得とも、元来御用魼之儀二付、右御魼^ハ地借り賃差出し候義相不当、且向地有之候小屋、勝手俣二新堀浜へ引候積りを以出金いたし候、対談二及び候段不束之至、右

訳合も長兵衛剛情申聞候二付、右之通之^談対し二相成候哉之趣、御用人江被申聞候哉二相聞へ候、

十日 晴 元次

十一日 晴 徳右衛門

一、新堀御魴干場之義二付、晒屋長兵衛過分之出金可致様申募り候趣相聞、剛情之申方不屈之事二候、且又半兵衛義も請負とは申ながら、御用魴之義おも不相弁、役頭へ何之沙汰も無之、自了了簡おいて対談二及ひ候段不行届之至、長兵衛義纔二銀壹枚之運上地二而、過分之地代取候談し致し候趣、右者御差支二相成候間、無用^可致、^{其上}且剛情申聞候ハ、地面御取上ケ可被成、此旨今一応利解申渡し候様御沙汰有之、

一、右御達し二付、御賄江打合セ候處、御賄申聞候者、当時八百(屋脱力)半兵衛御魴請負二候得共、元來御用魴向地小屋も新堀と両方二分ケ魴簀片付ケ、火之用心之ため右之通仕来り候事故、此表へ引候得者願濟之上ならてハ出来かたき義、右等之訳合も不相弁、自了了簡ヲ以て向地小屋ヲ引候算当ヲ以て対談いたし候段、甚不行届之趣二被申聞候二付、左候者半兵衛江右破談致し候段断可申出旨御達し有之候様申談、

十二日 晴 藤助

一、八百屋半兵衛当役所罷出、魴簀干場之儀、此間長兵衛卜下対談仕御届ケ申上候處、向地小屋此表へ引候算当ヲ以て、六百目出金致し候対談仕候得共、右者御用魴之儀二付、御差支二相成候趣御賄方御達し御坐候、右等之訳合不相弁、自了了簡ヲ以て対談仕候段不調法二御座候、右之趣ヲ以て破談之義長兵衛江申談候、

一、長兵衛呼出、前文御沙汰有之候趣申渡し候處、御上御差支二相成候儀、彼是申上候訳合も無御座、聊之御冥加二而地面拝借仕来候得共、

右地面 御上御入用相成候付、御取上ケ二相成候とも違背仕へく様二無御座、如何様にも御差図次第可仕旨、御請ケ申聞候、

一、右二付、猶又半兵衛呼出し長兵衛承知之趣申渡し、

但し銀一枚御運上之義、半兵衛差出スへく旨、長兵衛へ申聞候得共、長兵衛義、右御年貢^(之方)□聊之事故、右場所仕事之替り二も相成訳二も無之候二付、差出し呉候二付不及、夫方一日も魴簀早々片付ケ呉候様、勝手之よし申談し候、尤右者向ふ之談し二而、此方賄ひ者無之候得共、顔前事故記置、

十三日 晴 卯三郎

一、右半兵衛、長兵衛申口之趣、御賄江も打合セ御席江申上ル、

八百屋半兵衛

右之者、此度御魴簀干場之儀二付、不都合之引合いたし候段不行届之至二候、依之、追込可被申渡候、右之通御書付御渡し二付、御賄江も談し、右追込中魴簀取片付ケ之義、御賄へ伺出可申段申達し候間、其手二而御取はからひ被成候様談し置、

一、来ル十八日、例年之通田端宮神事執行仕度、乍恐此段以書付御届奉申上候、以上、

六月九日

堀池主馬〇

十五日御聞濟、申渡し、

十四日 晴 右野右衛門

十五日 晴 元次

一、壯右衛門不快二付引籠、助御持頭安見源左衛門、

一、新堀川浚、今日中二出来、明日見分いたし呉候様申出ル、引籠二付助役安見源左衛門、同心兩人差遣ス積り申達ス、

一、御勝手方二而承候得者、仁右衛門方相納候金子、久兵衛儀者承知之由二而、久兵衛、六右衛門、仁右衛門三人揃ひ候二不及、久兵衛儀

一、本圖当り不中人江者満講之節、壹枚分一金三兩ツ、相渡し申候事

初会

一、銀百貳拾匁

貳人へ渡候

掛銀三拾匁

貳会

一、同貳百匁

貳人渡候

掛銀三拾匁

一、入札 貳人

掛銀貳拾九匁

四会

一、銀三百目

貳人渡候

掛銀貳拾八匁

五会

一、入札 貳人

掛銀貳拾七匁

六会

一、銀三百五拾匁

貳人渡候

掛銀貳拾六匁

七会

一、入札 貳人

掛銀貳拾五匁

八会

一、銀五百目

貳人渡候

掛銀貳拾四匁

九会

一、入札 貳人

掛銀貳拾叁匁

十会

一、銀五百五拾匁

貳人渡候

掛銀拾八匁

右之通無相違相勤申候、以上、

世話方

庄屋

堀池又三郎○

町代

半兵衛○

全

喜助○

此外村町役人共

一、小間物屋久兵衛方仁右衛門江出銀御勝手へ相納之義、昨十九日先相済候付、家屋敷引渡之義二付、京都二罷居候久兵衛、町役共呼二

遣候処、久兵衛此間他行いたし引取候得共、足痛二而步行難相成間、

右ハ家屋敷さ、波へ渡之義二付、相談可致旨申候処、其儀ハ承知致し居候間、町役方親類共へ相談之上、さ、波へ渡し呉候様相頼候趣、右村方江頼書付取歸り候段届、右手紙左之通、

一筆令啓上候、大暑之砌御座候所、先以其御地御一統様御揃御勇健被成御座、珍重御義奉存候、次二下拙此間中暑之当り二而引籠罷在候故、大斗二御無沙汰仕候、然ル処、今朝御役人遠路之処御苦勞相成、早速罷越可申害之処、前文之次第二付失礼之段御用捨被成下候、右二付下拙存寄ハ家事一条二付、迎も力二不及故、親類中江何角万端相任せ候間、此上者親類者共御呼「立二預り御相談可被成」下候、尤下拙存念ハ是迄申上置「候通^{（貼紙）}事故、一切今更」悔申事も無之、則親類共江も申含置候故、乍御セ話様早々親類之者共御呼立二預り万事御相談被成下候、先者右之段御報旁如此御座候、

近江屋

久兵衛○

西六月廿日

宮町

御役人衆中様

廿一日 晴 徳右衛門

一、前文之次第二付、今日中野村仁右衛門方江宮町役人共呼二参り候処、田上不動へ杉皮取二参り留守之趣、右二付明廿二日可罷出段、仁右衛門家内之者申聞候趣庄屋与次兵衛申届ル、

廿二日 晴 藤助

一、宮町役人昼時分罷出、今朝方仁右衛門待居候へ共、今二参り不申候処、本屋彦兵衛方へ参り候者二事伝不快二付、今日不参候趣申越候、右二付只今より中の村^{（野）}へ町役人共示談参り候趣申届ル、

廿三日 小雨、半晴 卯三郎

一、右中野村へ町役共并六右衛門参り候処、仁右衛門瘡二而参り兼候間、親類共相談之上、明日何レ成共可参由申聞候趣二而引取、然ル処、今廿三日中野村の親類之又続之者之由、左之書付持参村方へ参り候趣届出、

一、御城下小間物屋太兵衛借財一条二付、段々御上様之奉預御苦勞筋、以御蔭ヲ最初約定通り、銀子私方へ相立候様二相成難有仕合奉存候、然ル処、小間物屋太兵衛居室敷敷売上候上、累年取乱し候跡二御座候故、万事差配旁々忤久兵衛儀在京二付為招呼候処、同人太兵衛跡式諸向差配等者田上親類引請二相成候様、以前約定仕置候様不分総而此已後私共へ出入万端相任せ有之様書面差遣し候付、早速罷出可申旨、以御使被為仰越奉承知候得共、久兵衛之申方甚無謂事と存候、元来拙者引請与申事ハ兼々御存知被為在候通り、太兵衛逼急難二金子入用二付、御勝手方ハ拝借之銀高引請、家屋敷為売上候のミ二而、外二聊二而も請合之筋毛頭無之、殊二家沽却仕候示談之席二而も、ケ様二居宅地面迄売上、親共之行衛いかゝ可仕哉と相尋候へハ、京都へ連行生涯見届可申段上候故、私も安堵仕候、右体迄申置、今更跡式私共へ振向候事甚相違仕候、殊更親子共堅固二存命仕居候へ者、是迄之諸出入共、太兵衛、久兵衛兩人共へ宜御尋合被為成下候得者、巨細相分可申と奉存候、血肉ヲ分ケ候忤無事二罷在候中、小間物屋跡式一条引請可申道理合、私方二曾而無之与奉存候二付、乍恐此段深ク御賢察之上、已後銀段其外纏合等之義前件之次第万事久兵衛へ被為仰達候様二奉願上候、私御招呼二御坐候へ共、中暑之上脚ヲ痛メ歩行難相成、乍恐以口上書奉言上候、何卒以御憐愍、右之次第御聞届置可被下候様奉願上候、以上、

中野村

六月

仁右衛門〇

御町御役所

御同心中様

一、中野村右之通口上書持参、少々宮町へ申付候趣迄とハ違候得共、一切存寄ハ無之趣二相見候付、久兵衛の家屋敷さゝ波へ明渡之義町内へ頼候付、太兵衛義者退候様可申積事参り候処、折節今朝より東筋へ参り留守中之由、然ル処、夜二入引取候付、右之趣申聞候処、委細承知仕候返答申聞候旨、廿四日朝町役申出ル、

廿四日 曇 右野右衛門

一、私儀難渋二付、当村大養寺二而当月廿日夜ハ五夜之間、軍書講釈興行仕度趣御願申上候処、御蔭ヲ以願之通御聞済被成下難有奉存候、然ル処、今少し説切難出来、右二付恐多御願二御座候へとも、当廿四日切二御座候得共、廿五日、廿六日兩夜日延之義御願奉申上候、何卒右願之通被為仰付被下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

西六月

願主下浜田町

四郎兵衛〇

肝煎

庄左衛門〇

庄屋

竹内新左衛門〇

御聞済申渡、大目付へ案内

一、八百屋半兵衛義、先日ハ魼賣干段々相片付、最早一兩日快晴二御座候得者、取片付仕舞候段届出、其段晒屋長兵衛へ申達候様町代へ達入、一、小間物屋久兵衛并親太兵衛、中野村親類申候之趣ヲ以、樽屋新九郎江右家屋敷早々受取可申様申渡ス、

廿五日 晴 元次

廿六日 晴 徳右衛門

一、小間物屋久兵衛儀者京都二罷在、右留守居二親太兵衛居候趣、家屋敷酒株道具共樽屋新九郎江相渡候儀者、久兵衛先達而役所江呼立候節も委細畏り居候、併御勝手手納方未埒片付不申、右相済候へハ家屋敷可相渡心得候趣申聞候、其後宮町より御勝手手納之義も埒方相済、家屋敷諸持方仕分として久兵衛江可参様申参り候処、不快二付不参、親類共江任置候間、右相談之上如何様共埒片付呉候様村方へ頼一札差越、夫故中野村仁右衛門并親類共江、久兵衛方右之通申越候趣ヲ以三日呼二参候処、是又不快之趣二而参り不申、翌日同村少々縁類之趣二而口上書親類連印ヲ以差越候、是以何之存寄も無之趣二相見、先ハ寄付す手迄候すにけ候様二相見候二付、久兵衛申越候ハ、家屋敷明渡之儀存寄無之趣、中野村親類共江も村役方談候処、参り不申候得共、是又存寄無之趣書付差越候、依之、約定之通家屋敷明渡可申、右二付而ハ借屋かり候積哉、又在所へ引候積哉、京都久兵衛方江参り候積哉、何レモ其手都合いたし、早々家屋敷相渡し候様村役并六右衛門同道二而罷越申聞候処、委細承知いたし旨申聞、則前二記ス、廿三日晩之義定、其後日々太兵衛義遠足之様子二而一向家明候様子も相見へ不申、廿六日宮町役人呼出し、太兵衛義承知いたし候趣返答申置、いつ迄も其俣二而日々他行いたし居候而ハ、いつ明渡スと申儀無之、明日明渡スト云か、明後日明渡スといふか、其押詰いたし候様申付候処、又々其日も留守二而在宿不致、然ル処、夜二入引取候由二而、直様村役并六右衛門罷越押合候処、一向承知不致、明渡し候様子も無之、強情申張候趣、夜四ツ半時過申出、直様同心共申付、長吏庄左衛門へも申遣、宮町庄屋宅へ太兵衛呼立、先達而方之次第此度久兵衛方申越候趣申聞、家明渡し候様申達候処、

何か彼是未御勝手手納口不相済、久兵衛留守ヲ預り致候義難相成坏申張候、^(貼紙)迎も右聞居候而ハ、いつ埒明候見通しも相付不申兼而申含置候通、^(貼紙)二元来太兵衛儀者当町」除帳之上、昨年南都出奔いたし候砌、当地罷在候義、差構申渡置候得者、久兵衛家主二而同人売払候家屋敷二付、同親之太兵衛存寄之可有謂なし、彼是強情申聞候へハ、^(貼紙)入牢申付候而可然旨同心共へ申含差遣候処、果して其場二至り連々御請可致処、強情申張候次第ヲ以、入牢申渡候段同心共届出、尤庄左衛門方溜入候事、右二付太兵衛家内之者并跡談埒方付候間、中野村親類参候様直様宮町方役人差遣候段申聞候、」

廿七日 晴 藤助

一、中野村仁右衛門、喜兵衛不快之由、嘉兵衛連歸り役場へ罷出候付、右太兵衛家内之者并諸道具夫々取片付、家屋敷明渡し候様申付候処、右ハ親類惣代二参り候得共、私二而ハ取計難出来、何レ引取仁右衛門江相談、明日迄御猶予被下候様申聞、左候ハ、何レニシテも家屋敷ハ金請取売払候事故明渡ス、其外無之、右家内之者ハ大道寺村へ引取候哉、仁右衛門方へ引取候哉、又京都久兵衛方参り候哉否哉、返答可致間、其段村役并中野親類同道二而家内へ申渡し候様申達ス、中野村江ハ猶又宮町方付添参り、弥仁右衛門不快二而不参候ハ、仁右衛門存念得と聞切歸り候様申達ス、

一、右太兵衛溜入之段、同心藤助ヲ以御徒目付月番山田彦太へ申遣ス
一、夜前之次第荒々当役助安見源左衛門江談、今朝御席へ申上置候、委細者近日壮右衛門へ出勤之上可申上旨、申上被呉候様談候事、大目付へも案内之義頼置候事、

一、以手紙得御意候、然者関津村九兵衛、藤九郎、右之者共枿屋磯五郎方へ宿留申付候間、此段御案内可得御意如斯御座候、以上、
右郡奉行中の方手紙来、

廿八日 少白雨 卯三郎

一、昨日中野村仁右衛門親類之者参り、宮町る段々掛合候得共、一向埒明不申、何レ引取仁右衛門江相談いたし候付、明日迄有^(猶予)余相願候付、宮町役人之内同道、中野村へ罷越、仁右衛門弥不参候ハ、存寄否哉聞切引取候様申付置候処、右中野村親類申聞候ハ、何レ明日ハ御返答罷出候付、付添イ参り呉候ニ不及候段申聞候付、不参候由、然ル処、今日中野村る使之者参り、仁右衛門口上書持参候処、前二差越候口上書と同意ニ而、村方へ申付候趣意とハ大ニ齟齬いたし、右ハ当村役不吞込故か、仁右衛門聞取悪敷か、何レニしても趣意違候事、中野村役へ其趣得ト申聞セ、別保村六右衛門、右趣意間違之趣、右ハ宮町申方悪敷哉、中野村之間取悪敷哉相分難ク、依之、六右衛門へ申付、久兵衛家も只今滅亡ニ相成候親類之子故参り万事立合セ可申積り、弥不参候得者、外ニ存寄も無之候付ハ、当村役人共へ任セ、頼之一札ニ而も差越候ハ、可然旨申付、明早朝参六右衛門聞切引取候様申達ス、

廿九日 晴 右野右衛門

一、六右衛門今朝る中野村へ参り候処、書付持帰り、仁右衛門ハ不参候得共、六右衛門聞歸り候口上者、太兵衛親子共兼々心得方不宜、只今参り候、か如何様と申儀難出来候付、六右衛門并村方御沙汰通御取計被下候様願候由、太兵衛家内之者も立退候後ハ、又候罷出御相談も可致哉ニ申聞候趣、六右衛門申聞ル、

一、右之通仁右衛門口上六右衛門申聞ル、口上書ハ代筆之由、今少難分し、御城下宮町小間物屋太兵衛一条二付、先達私義当御役所様江数度被為御召呼候得共、何分私義先達而る暑勞ニ而引込申候二付、乍恐御断奉申上候処、又候此度別保村六右衛門殿ヲ以御使被為成下候段、重々奉恐入候得共、右小間物屋太兵衛跡式私へ此度一条引受セ話仕

候而者、此上後難之程相掛り候哉等日々心配仕罷居候故御断奉申上候、右難儀之次第二而も後難等ハ申者之乍見越、目前之様ニも相見へ申候故、私親子共并親類共迄先々此度一条者差控へ候様ニ申候付、不顧恐、当御役所様江御断奉申上候、何卒右之通成行ニ而格別之御慈悲ヲ以御定法之通り被為成下候ハ、私方る少も残念之仕^(次)第毛頭無御座候、何卒御上様之御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、

嘉永貳年

西六月

中野村

親類

仁右衛門〇

同

喜兵衛〇

一、中野村仁右衛門并親類者耆人も参り不申、依之、宮町役人、別保村六右衛門立会、太兵衛家内之者江中野村親類之者呼ニ遣候処参り不申、家屋敷さ、波江壳払候事故明渡し可申、其方共何レ成共勝手立退可申段申渡候処、即日立退、今は^(般)ん向家八兵衛方二一宿いたし候趣、家屋敷ハ町役仲人六右衛門る新九郎へ相渡候旨届ル、

一、別保村平八る先達而願書差出、右ハ太兵衛家内へ談し、荒道具類預り道具ニ而も金子ニ而何レ成共調達候様談候処、女之義火急ニ金子調達も出来難ク、道具受取呉候様申聞候趣ニ付、道具預り候段申届ル、

七月中

朔日 晴 元次

一、小間物屋久兵衛親太兵衛義、兎角強情申張り家明不申、依之、此間助役ヲ以荒々申上候、右太兵衛格別是と申理も無之候得者、追払候而可然義之由候得共、当町除帳ニ而も当地二居、其後南都様此節当地滞留之義も差留、村方江も寄申間敷旨申達置候得共、矢張宮町へ

参り居候仁物、且又先年も毎々京都二条殿御殿江出入、御殿役人と馴合、太兵衛已前貸付候銀子取立ニ参り、或者京御留守へ右御殿と申役人引合ニ参候等之義有之、甚難物故追払候へハ、又々右様之事仕出可申二付、永牢と申銘々可申渡候得共、先者免し不被申、永牢之義可然奉存候、右之通取計候段御中老九郎三郎殿ヲ以申上、

一、太兵衛牢飯之義、忤久兵衛東宮町入帳之者、太兵衛義ハ差構之者ニ候得共、当町入帳者之親ニ付、全ク無宿と申二而も無之哉、且御領分ニ中野村仁右衛門兄、且太兵衛親里之義、是ハ為差出候而も可然哉二候へとも、是も過分之金子引受居、久兵衛も京都二借宅罷在候得者、牢飯申付候共、迎も出し申間敷、大目付中へ談之上、御中老ヲ以申込候処、御聞届ニ相成候事、

一、今日迄溜入置候得共、無宿御上ハ牢飯出来候付、本牢江棟上ケ申付、今夕七ツ時同心共入替差遣ス、尤山ノ者縄付させ候事、

一、右牢替之義、大目付中へ案内、御徒目付へも談、右ハ牢番江も達し被呉候筈、

一、右無別条暮六ツ時前相済、右野右衛門、徳右衛門、卯三郎、元次出役之事、

一、中庄牛頭天王社、昨年大風ニ付破却いたし取片付候処棟札有之、右者前ニ記ス神主方ニ留記も無之、承伝も無之候得共、棟札ニ認メ候処、御願主膳所城主本多氏俊次ト有之、爰ヲ以見候時者、御上ヨリ御建立ニ相成候様相見へ、其趣ヲ以願書差上候処、御上ニ而段々御取調ニ相成候得共、御上普請之義一向相見へ不申、当役所ニ留記も無之、御勝手御作事方等ニも、右留記無之由、右之棟札も御上普請ニ候得者御上ニ而認メ出来候筈、其儀も無之、定而右札ハ宮ニ而拵候事と被存候、勿論札ニ右之通認候事故、御寄附者被成候事と被存候得共、是も何程御寄進相成候哉分り不申、先建立之節者御時節も宜敷、百

両も御寄附有之候事故、何分相分不申候、然ル処、昨年来御領分中大荒ニ付而ハ莫太之御物入ニ而御融通も難被成、此度ハ金ニ拾兩^{貼紙}「御寄附、右ヲ三ヶ年ニ」割合、拾兩ツ、三度ニ御渡しニ相成候事、

一、右者建立之節之棟札ヲ以見時者、全御上普請之□相見候付、亦々後來之念ニ三拾兩御寄附ニ相成御上普請ニ而ハ無之旨、委敷當役留記ニ残し候様御中老小栗九郎三郎殿御達し、棟札写ハ最早御入用ニ無之、御戻しニ相成、

但御内評ニハ其時分御時節も宜敷、御上御信仰ニ而御寄附も百兩も有之候事故、亦セ間一統當時之様困窮ニも無之、且其時分ハ郷中も勝手ニ勸化相頼候事出来、氏子并所々寄附金も多分集り出来相成候と被存、其内御上之御寄附一番高寄附故、右之通御願^主御領主之御名ヲ記し候ものニ而もあらんか、

二日 晴 代藤助

一、昨夕久兵衛并中野村親類嘉兵衛、是ハ仁右衛門代之趣ニ而、太兵衛義入牢ニ相成候趣承知仕、何卒右太兵衛義久兵衛セ話仕候付、御憐愍ヲ以御渡し被下候様願出候得共、夫故前々久兵衛、仁右衛門共呼ニ遣候処、不快之趣申立参り不申、村方へ相頼候趣書付差越置、其跡ニ而右様申参り候共、取上ケ候筋合ニハ無之旨申渡ス、

三日 晴 代徳右衛門

一、宮町小間物屋久兵衛義困窮ニ付、家屋敷酒株酒道具共、樽屋新九郎へ売買約定仕、双方ハ売買願書差出、先達而承届置候、然処、其後^{貼紙}右買戻し致候と申立、彼是縫合混雜延引相成、其内御目付手御吟味^所ニ於て太兵衛御呼「出御調被下候様箱訴いたし候趣、夫ハ御目付手ニ而吟味相成事済候趣、大目付中ハ御沙汰有之、外ニ御勝手上納候、是も差計見合居候、十九日相済候趣中野村仁右衛門願出承知致候付、明渡之義久兵衛、仁右衛門之内へ可申渡積呼ニ遣候処、兩人共不快

之趣ニ而参り不申、「町役（貼紙）太兵衛江」明渡候様申達候処、一向承知

不仕候趣、廿六日夜四時半頃申出、同心共、庄屋宅へ罷越、太兵衛呼出

一応理解申渡候得共、彼是故障申立「御請も」不申聞候付、不得止

事入牢申付候、右ハ此間申上候通り、右二付跡家屋敷約定通り、仲

人別保村六右衛門并町役人共、樽屋新九郎江引渡申候、新九郎右請

取候得共、殊之外破損、土蔵とも大破損二相成、急々ニハ取繕も難

出来、何レ当秋閑東御下向も相済不申候半而ハ、大工手も無之候付、

当年之処酒造仕込之場ニも相成申間敷哉之段申出候、何レニ酒造稼

渡世之義ニ付、此段御聞ニ入置候段御中老九郎三郎殿ヲ以申上置

一、別保「村平八役所へ参」り久兵衛参り候付、約定道具之儀引合相済

候付、宮町ニ而明日市いたし候段届出、

一、中野村仁右衛門親類罷出、仁右衛門罷出候筈之処、未不快ニ付御断

罷出呉候様申聞候趣申出ル、

一、久兵衛役所へ参り御勝手上納之内五両（貼紙）三歩「不足ニ相」成済切不

申候段申聞候得共、先達而仁右衛門ハ相済候届有之、御勝手方ニ而

も相済候趣承り候、其迄右之不足ハ六右衛門廿六兩預り之内同人ハ

筑前へかし候事、久兵衛ニハ拘り不申訳合也、元来其出入之義ハ当

役ニ構無之事、家屋敷売払代金請取候ハ、家相渡候義ハ勿論之事、

今更御勝手上納済不済之義取上ルニ不及候段申渡ス、

四日 晴 卯三郎

五日 晴 右野右衛門

一、昨夕新堀浜磯辺ニ女死骸有之趣風聞相聞、可届出哉と存居候処、夜

前何之沙汰も無之、今朝聞合当番罷越候処、右ハ大津中ノ京町わた

屋平兵衛娘廿余之由、右者夫ニも放レ其後乱心いたし罷在候処、一

昨朝宿罷出相知レ不申、則尋ニ参り候、然ル処、右之次第向表変

死ニ相成候而ハ、京都（検）方俛使請困窮者甚迷惑いたし候付、何卒内者

病中之振ニ而引渡呉候様先方より相頼候付、任其意町内年寄加判証
札取之渡し遣候趣申聞ル、右死居候場所ハ模模川先（相）方東手ニ而木ノ
下村持場之由、

一、小間物屋久兵衛儀、家屋敷売払願済ニ付可相渡筈之処、親太兵衛義

彼是故障申張り、当時之次第第二相成候、然ル上者当所ニ借宅住居い

たし候了簡も無之、京都ニ而借宅いたし候付、村送り認メ呉候様申

聞候趣、左候へハ宮町除帳ニ相成候事、右之届書宮町ハ差出候、右

送り差出候ハ、已来御厄介相掛申間敷との一札取可申段申聞セ、

尤右送り并取一札下書相見セ候様申渡置、

一、右除帳之義者都而伺不申聞届候得共、此度ハ御勝手ニも掛り有之、

大目付手ニ而相掛り候事、一応承届候而御差支無之哉相尋候処、大

目付御存寄無之旨、御勝手ハ今一応相談いたし返答可申由、右者大

分之■故障、亦後日如何様之義出来之程も難計、御席江も御中老中

ヲ以、是迄右除帳之義御伺不申上候得共、此度ハ入組混雜いたし候

上之義ニ付、一応思召相伺候趣ヲ以申上候処、無程伺候処思召無之旨、

乍併右久兵衛儀も兼々心得方不宜者之趣相聞、後日他所掛り合等

申来り候得者面倒ニ可相成、已来故障相懸申間敷との一札ニ而も取

置候方可然との御沙汰之由小栗九郎三郎殿御達し有之、

一、六日 晴 元次

一、新堀升形浜へ出候御堀土手、昨年出水ニ而先ノ方崩レ候趣、右御

堀土手之義者町持ニ候哉、御上普請ニ候哉、御作事手ニ而難相分調

呉候様同所ハ被申聞、木下町呼出承り候処、右土手崩町内ニ築候と

申儀書留も無御座、聞伝も無御座候付、是ハ御上御普請と心得居候、

しかしなから三町持之場所ニ付、猶網町、西庄江も承合候由申聞引取

追而三町承合候処、右土手崩直し人足出候義一向相覚不申、西ノ庄

藤吉申候ハ、先年御山方手ニ而御修覆有之候哉ニ相覚居候由、乍併

是以書留も無御座、勿論所方人足出候義二無之候へハ、書留之有へき様も無之、只今証拠ハ無御座候由、然ル処、昨年出水二付橋涯切込候付、海老屋口之方水拒浜江水落し候、付而ハ御堀南北土手浜江出候之処逼ク候故、土手端崩レ、夫二而大分水もはけ候様子、段々右方崩レ掛候付、内実ハ御断も不申上、崩口切広ケ水落し申候、右二付是ハ水二而崩レ候ヲ切広ケ候事故、本之通まとい置候、全町持二ハ無之候得共、求而崩し候事故まとい置候由、御断不申上候段不念恐入候由返答申出ル、御普請奉行江右返答申ス、

七日 晴 徳右衛門

八日 晴 藤助

一、町内柴屋卯兵衛持借家木下二有之候分、此度梅木屋弥右衛門セ話を以、木下町中川借家二借宅仕居申候、瓦屋惣助与申者へ譲り申度義申出候付、町内一統披露仕候処、差支之義無御座候、乍恐此段奉願上候、何卒御憐愍を以、右願之通御聞濟之上被為仰付被下置候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

七月

願主

惣助○

譲り主

卯兵衛○

セわ人

弥右衛門○

町代

万左衛門○

一、町内中川茂□借家二借宅仕居申候惣助与申者、此度勝手二付、魚屋町柴屋卯兵衛借家、梅木屋弥右衛門セ話を以、代銀貳百目二而相譲り請度義申出候付此段奉願上候、乍恐御憐愍を以、右願之通被為仰付被下置候ハ、難有仕合ニ可奉存候、以上、

七月

願主

惣助○

町代

小兵衛○

一、町内柴屋卯兵衛借家、瓦屋惣助へ譲之義、御聞濟被為成下難有仕合ニ奉存候、然処、沽券状之義虫付二相成、文字之程も分り兼申候付、恐多御願ニ御坐候得共、右沽券状新調ニ相認メ奉差上候間、何卒御憐愍を以御割印被為成下候様奉願上候、乍恐右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有奉存候、以上、

七月

願主

惣助○

町代

万左衛門○

一、妙福寺住寺昨日役所江罷出、内々申聞有之候趣、右ハ近比妙福寺妙見も追々繁昌之様子も兼而相聞參詣も有之、右二付而ハ妙見堂前へ拜所建立いたし度段、先達而願も有之、伺之上承届置申候、右建物も出来、尤施主人講中ハ建立之趣、下地ハ妙見講一群有之、亦追々多人数ニ相成、跡入ハ妙力講とか申由、右二講ニ相成候ヲ一講二いたし候方可然由中人も入候趣、如何訳ニ候哉、終ニ二ツ二分、一講ハ妙福寺ニ残り、一講ハ法性寺江便り、右寺ニ而題目唱候由、此講ハ講中宅々ニ而廻り二宿いたし候様二も相見へ、且講中俗人計ニ而題目唱、右跡ニ而寄ラスルとか申病人杯祈祷いたし候事有之趣ニ相聞、且即功も相見へ候様子二付、此俣打捨置候ハ、追々連中も増、如何哉と存候趣、昨日内々妙福寺申出候趣徳右衛門ハ申聞、依之、猶又今日妙福寺住寺呼二遣し直々承り候処、荒々承り候処、前文之次第此一条長々敷事故、中々住僧も一々申難ク、聞取も廉々順々覺難ク候付、荒増始末順々書取ヲ以被申聞候様申置、其宗法二おい

て不審之義有之候哉相尋候処、右祈祷之法ハ有之候得共、是ハ別伝ニ而右請不申候ハ而ハ難行、又ハ俗人江本寺の相伝ふへき事ニ非ス、右等之処不審ニ存候段住寺申聞ル、何レニも書取差出し可申、得と一覽可申積り、

九日 晴 卯三郎

一、何レニセよ前文之様子ニ付、先年之御触面ニ相振候町家ニおいて題目唱人寄候事ニ付、右之御触面ヲ以町触差出ス、触左之通、

一、近比町家ニ而妙見講中共集り、題目等唱候義有之趣相聞候、右ハ先年御触も有之、町中ニ而念仏講、題目講と名付出家并同行共寄合仕間敷、并町中ニ而鐘太鼓ヲ叩き念仏、題目を唱、大勢人集致し候儀、弥可為停止事、

右之御触面通急度相守可申候事、

一、妙福寺江口上書取差出候様申達候、則持参口上書、

一、当春比、於在家講中打寄拜所普請ニ取掛候熟談相極候而願呉候様申出候間、御願申上、御聞濟ニ相成申候事、

一、六月上旬於茶碗屋与七方、無由緒企御題目ヲ、御中間鉄五郎相頼寄ニ立祈祷ヲ致、引取出来不申、無抛当寺江参り元之体ニ相成候様願出候得共、祈祷ハ達而断申候処、何分読経致呉候様申候付、任其意読経致し遣其座相済申候、然ル処、講中打寄寺僧不調法之段申出候得共、門外ニ而之事故、拙僧存不申趣ニ而断申候、夫ハ講中暫之間休講ニ相成申候、其後去月十六日ハ法性寺江名前之者共参り、只今之躰ニ御座候、

一、去冬妙見宮御像、講中ハ持参仕開眼致呉候様申候ニ付致し遣候而、妙福寺什物与裏書ニ致御座候、右像先月十六日ハ法性寺江持参、只今ニ安置仕候由ニ御座候、以上、

西七月九日

妙福寺

右書取差出候得共、此文言ニ而ハ難分候得共、先其俟預り置、

十日 雨 右野右衛門、代元次

一、来ル十五日、六日、去ル西年致餓死候無縁読経相勤申度候ニ付、此段奉御届申上候、以上、

七月

敬願寺〇

庄屋

中西又次郎〇

一、来ル十一日例年之通り当宿市ニ御座候、

但し御先触ニ書添来、

草津宿

役人〇

十一日 雨風 代右野右衛門

一、金百足 本屋 彦兵衛

一、鳥目三百文ツ、 山形屋 岩太郎

浅井や 長七

右大手勤之節待合宿相勤候付被下置候、

一、町方駈合道具修覆出来之由申来り、当番請取ニ出ル、

一、以手紙得御意候、然者左之者共上納方之儀ニ付、此間ハ呼出し候得共不罷出、尤其段町役共へも申遣候へ共、等閑ニ相成不埒之義ニ付、左之者共明後十三日四ツ時当役場へ罷出候様御達之義御座候、此段得御意度如斯御座候、以上、

網町

鮎屋徳兵衛

大津川口

浅井や清八

右手紙御勝手方来、申達ス、

十二日 晴 徳右衛門

十三日 晴 藤助

十四日 時雨 卯三郎

十五日 晴 右野右衛門

一、今「夕八ツ時過比、大津馬」場村傳次郎居宅手過いたし候得共、少々之事二而早速揉消申候、御他領之義二ハ候へとも、惣御門直続之家二付御届申上候段、夕七ツ半時過船町役人申出ル、

十六日 晴 元次

十七日 晴 徳右衛門

一、中野村仁右衛門并小間物屋久兵衛兩人、太兵衛入牢一条二付、口上歎願申出候得共不取敢申、只先之手続并久兵衛、仁右衛門方申越候口上書読聞セ候事、

十八日 晴 藤助

一、役場諸帳面虫干之事、

一、米屋嘉十郎家之義二付、柴屋庄兵衛江引合候処落合不申、荒々先達而談も調掛候得共、是も破談二相成候由、口上二而庄兵衛方へ御利害被下様磯五郎悴申出、柴利呼出し相尋候処、先庄兵衛存命中当役場二而申聞候趣二ハ、当時代も代り有之、勘弁替り候様子二相聞利兵衛申聞候ハ、右米屋家戻し候義ハ迷惑二付、出金相談二いたし度由、右二付中人播戸屋^磨与助新二三星屋次郎兵衛江申付、和談いたし候様申含ル、并米屋平五郎、米屋太七江も右中人入候付対談相叶候様申付ル、

一、大津町山田屋与助居宅表側取繕候付、暫囲付置候段届、大目付へ案内申置、

十九日 晴 卯三郎

一、私兄甚吉義、天保九戌年十一月身持不行跡二付、町内并諸親類方毎々異見仕候得共不相用候二付、義絶除帳奉御願申上候処、願之通御聞濟被成下難有仕合二奉存候、然ル処、追々及行年心底相改候付、何

卒帳外御免被成下候様願出候二付、親共初諸親類一統も御免之義奉願上候、格別之御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永二年

西七月

木下町願人

甚三郎○

父甚九郎○

中浜田町

親類惣代

喜助○

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○

町代

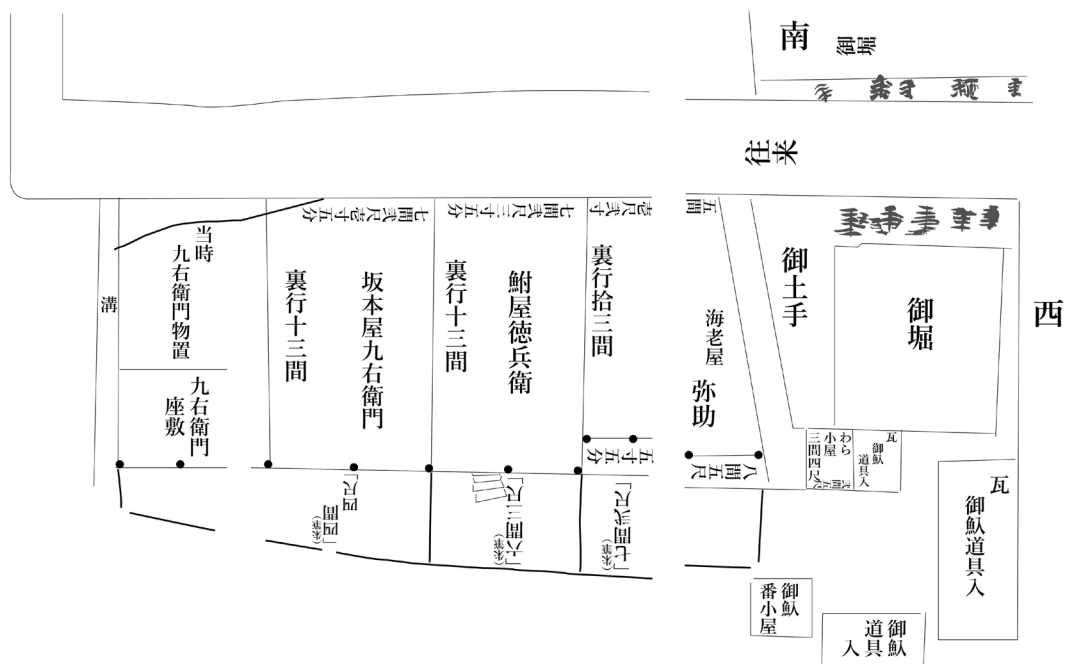
小兵衛○

聞届、申渡、

廿日 曇 右野右衛門

一、先達而御中老衆方網町海老屋鮒屋坂本屋辺、近比浜手へ石垣積候而、持地面之様二いたし候様相見候、右ハ沽券も可有之二付、一応調可申様御沙汰有之、其砌外御用多二付、一兩日立□調之義暫ク延引相成候趣御断申上候処、御差急キ之義二而ハ無之、其役前二而睨与地境分り有之候へハ、宜敷由平十郎殿御沙汰有之、同心共へ申達置候へ共、其後我等引籠未調二不参候処、昨日猶又平十郎殿先達而達し申置候前文裏手沽券外之処、石垣板壁等いたし候分急度取払候様御達申置候段御沙汰有之候得共、右之御達しハ未無之旨御断申上候、取調之義ハ委細奉畏候段御返答申置、

一、右二付今日同心共差遣、沽券ヲ以間入改、左之通、



右相改候処、北手墨引沽券一枚二建物有之、海老屋ハ建物外少々沽券地有之、鮎屋ハ大体沽券一枚二建物有之、坂元屋東ヨリ二而ハ沽券地外江少々建物有之、東隣當時坂本屋坐敷ハ猶沽券地外江余計出張建物有之、

一、海老屋弥助義、西手則絵図面二有之候三間四尺、式間五尺、わら葺小屋地面弥助方江拝領地之□申候得共、役場日記二相見へ不申、右証拠書差出候様申付候得共、町内帳面失相見へ不申候得共、先代方申伝、右地面ハ先年御鮎分持之時分小屋建、鮎用道具入置候而、只今二至り鮎實入有之節ハ、鮎方二而遣明候時分ハ弥助方焼木等入置、双方方遣来り候由申之、

一、例年之通町々地藏会届ル、

宮町	中庄村	伊七屋町
米屋万六	孫兵衛	喜右衛門
下浜田町	同町	中浜田
養蔵院内	広小路	広小路
中大手	大須賀町	大津町
御宮境内	豊善	井つゝや次兵衛
魚屋町	木下村	木下町
宇八	御宮境内	嘉七
網町	船町	
次郎兵衛	権四郎	右何レも盛物計

一、牛頭天王社檀破壊仕、再建之儀難及自力、依之、先達而御普請之義奉願上候処、格別之思召ヲ以、此度金三十拾兩三ヶ年二御寄附被成下、其余之処者自力二而如何様ともいたし建立可仕様被仰渡奉畏候、誠二以冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、専光院様御建立之通修理仕候得者、凡銀貳拾貫目余も相掛申候、左候而ハ迎も貧窮之氏子二而相働候而も十分一之事も出来兼候故、誠以当惑心痛仕候付、講中共

打寄評義仕候二ハ、右之次第二而ハ何迄差延置候而も取掛候時節も無御座候付、可相成丈鹿末材木二仕、杉檜松木等取交用候得者、五、六貫目も減少仕候付、先其通之處二而一決仕候得とも、是以矢張大金之事二候得者、確と致方も無御座、最早此上者猶又 御上様之御苦勞奉願候半而ハ迎も建立出来不申候、御上様二も御時節柄莫太之御物入之御中厚思召を以、結構二御取扱被成下候上、又候御願可申上候義理合二而ハ無御座、何共奉恐縮候得共、実二致方も無御座候付、不得止事、此上二当村地先字中庄谷松茸山中拾五ヶ年之間、御憐愍ヲ以被下置候ハ、御蔭を以如何様共建立可仕心得二御坐候、左候ハ、為御冥加壹ヶ年分金三兩宛御上納可仕候、此義御差支被為在候ハ、御山之御材木被下置候か、兩様之内何レ成共格別之御仁慈ヲ以御助成被成下候ハ、広太之御慈恵ト難有奉存、弥於神前御武運御長久、御領分安全之御祈祷抽丹精可奉祈候、此段宜御取扱被成下候様奉願上候、以上、

七月

中庄村

宮年寄惣代

庄左衛門○

肝煎

磯八○

同

孫左衛門○

神主

堀池主馬○

庄屋

堀池又三郎○

右書添木積又三郎口上書トモ廿一日申上置

〔追筆〕
「樽檜式間式本」

木積り書

割物板用

〔朱合点〕

一、檜式間半、末口六寸ろ壹尺迄

拾本

柱用

一、檜式間半、末口四寸ろ六寸迄

拾式本

屋根板床廻り共

一、松式間半、末口六寸ろ壹尺迄

式拾本

色々入用

一、杉式間半、末口三、四寸

右之通奉願上候、以上、

西六月

中庄村

右木財願通被下候得共、点有之候檜ハ御山二無之候付、不被下候段御達二付、八月十一日猶又右檜代り御山二枯松出来候節被下、三年、五年掛り候而不苦、何レ社入用柴庄へ相頼候積り、右代り二返弁仕候付御用不立、並木大小わり木二相成候所二而も不苦候旨御願申上置候、猶御評義可有、御中老九郎三郎殿御沙汰、八月十五日之所二御達し委敷記ス、

演舌書

一、当宮之義も先年拝殿及大破候付、柴屋庄兵衛相頼、銀九貫目借用引続キ又々神輿新調仕候付而も、拾式貫目借用仕、右借財濟方も無御座候付、氏子二而寄進講取結ひ、追々集メ銀差入申候得共、未皆濟不相成、只今二銀四貫目余引残り御坐候、元来貧窮之氏子共度々寄進仕候上之事故、最早此上者聊之事ろ出来不申候付、猶又柴庄へ段々相頼申候得共、下地之借財も相片付不申事故、思ハ敷引合も六ヶ敷、乍併庄兵衛も猶又可相成丈之勘弁も致呉候得共、何分大金之事二付中々引足り不申、依之、御時節柄不顧恐、別紙之通歎願仕候

儀二御座候、何分ニも格別之御慈悲ヲ以、別紙願之趣御助成之程御取成奉願上候、以上、

西六月

庄屋
堀池又三郎○

一、町内長兵衛宅へ昨十九日夜裏口メ忘置、然ル処、夫方盜賊入込候二付、右之段御届奉上候、尤紛失物左之通御座候、

一、河内木綿弁慶嶋女単物 壹ツ

一、木綿相立横嶋男袷半天裏花色 壹ツ

一、同花色織色二巾前かけ 壹ツ

メ三品相違無御座候、

本人

嘉永二年

長兵衛○

西七月

町代

半兵衛○

一、私儀養家前々々数代於 御城下材木商売仕来、御蔭ヲ以渡世相続仕候義、全 御仁光之余沢与難有奉存候、然ル処、近来追々不幸打続困窮仕候二付、下地方之商売而已二而ハ取続も難相成候二付、片商売として塩醬油小売、并少々之荒物類三五品宛とも時々有合二任セ店二差置申度奉存候、此段御聞済被成下置候ハ、彼是之助潤ヲ以相続可仕与難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永二酉年

勘六○

七月十九日

町代

喜助○

聞済、申渡

廿一日 晴 元次

一、中野村仁右衛門罷出、太兵衛牢舎御免之義、久兵衛願呉候様申聞候趣願出候付、此間も役場ニおいて理解申渡候、最初右之次第第二不

相成候様と存、久兵衛、仁右衛門呼二遣候処、兩人共参り不申、当村方へ振向不差構口上書付差越、今更セ話可致願ハ無之筈、尤仁右衛門引請急度申渡通り可致候、迎も久兵衛儀親之事故申事も不相用、手二合不申談最初申立候得者、不手合者へ御下ケニハ相成間敷、能々勘弁之上可申出旨達し理解申渡、

廿二日 晴 徳右衛門

一、去ル天保三辰年七月、別紙証札ヲ以唯傳寺本堂再建要用二付、銀子貳貫目用立置候、尤証文之通已十二月廿日限返済之約定ニ御座候間、其節催促仕候処、暫猶予之義致呉候様段々被申聞候付、兼而規定通相違仕候得共、無是非任其意置、猶又以後催促仕候処、兎角不都合計之返答二而、其後義理合も相立候様度々催促仕候得共、頼母子二而も出来候ハ、早速返済可仕様被申聞、段々延引二相成、今度も再三引合候者、当盆前二入銀も旁可致様被申聞致承知居候処、是又差掛り断二而甚当惑而已仕、私手元不都合ニ相成前顯奉願候通、先達而方数度約定違二付、不得止事、乍恐奉願候儀ニ御座候、尤當時元利三貫三百六拾匁六分二相成候間、何卒格別之御憐愍ヲ以右銀高早々返済御坐候様御取扱奉願度、右願之通被為仰付被下置候ハ、冥加至極難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永二酉年七月

鮎屋徳兵衛○

組頭

板屋市兵衛○

借用申一札之事

一、銀貳貫目也 但し利

右者本堂再建二付無抛借用申候処実正也、返済之義ハ来ル已十二月廿日限無相違返済可申候、若及遲滞候者、加印之者方返并可申候、

為後年一札仍如件、

天保三年

辰七月

唯傳寺印

笹屋嘉助印

武内堅八郎印

鮎屋徳兵衛殿

酉正月改元利

一、銀三貫貳百三拾四匁式分

天保三辰年ろ

利百廿九匁四分

元壹貫目

×三貫三百六拾三匁六分

廿三日 晴 藤助

一、鮎屋徳兵衛、唯傳寺相手銀談願書二付、唯傳寺講中茶屋嘉助呼出候
処、他行留守、歸り次第罷出候趣返答、

廿四日 晴 卯三郎

一、茶屋嘉助今朝罷出、右相談対談いたし候様申渡、

一、以切紙致啓上候、然者先達而他参留申付置候其御城下宮町小步行三
助并中庄村七右衛門江、猶相尋度儀有之候間、所役人差添印形持参、
明後廿六日朝五ツ時、当御役所江御差出可被成候、右之段可得御意
旨清左衛門申聞、如此御座候、以上、

七月廿四日

中寫直右衛門

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

一、御切紙致拝見候、然者然者先達(符)而他参留御申付被置候当城下宮町

小步行三助并中庄村七右衛門江、猶又御尋之義有之候付、印形持参、
明後廿六日朝五ツ時、御役所江差出候様御紙面之趣委細承知いたし
候、右御答如此御座候、以上、

七月廿四日

川那辺壯右衛門

名和伴六様

右宇野七兵衛ろ丁稚使二而持参、但七兵衛ろも添口上到来、受取返
書遣入、

一、海老屋弥助拝領地と申義、段々取調候処、文化六巳年町方沽券改二
付網町ろ差出候帳面二弥助分左之通認メ有之、

一、表間口五間壹尺式寸 一、裏間口八間五尺五寸五分

一、裏行十三間、外二三間四方拝領地

右之通向ろ差出帳面二ハ相見候得共、沽券状二者拝領地之義無之、
且又其後文政度沽券改之節差出候帳面二ハ、右拝領地之義書載無之、
尤役前之帳面二ハ右之義相見不申候、但し文化度之改之節者海老屋
町代役相務、文政度改之節次郎兵衛町代致相勤候、此節之帳面二ハ
拝領地之義無之、左候得者文化度改之節者手盛二而もあらんかと疑
敷被存候、

一、弥右衛門、又九郎、善右衛門居宅風破之節、石垣打崩レ難渋二付、
浜先十間計水中二浪除杭打度段願有之、右ハ御聞濟二相成候段、寛
政四年子年役場留記二相見候、乍併此義ハ向二覺不申候哉、右之義
此度ハ何共不申出候得共、見当り候故爰二記し置、

廿五日 晴 右野右衛門

一、私居宅西方御大手之側壁塗替之義被仰付奉畏候、御例之通御下銀被
成下候様奉御願申上候、何卒格別之御憐愍を以、右願之通御聞濟被
為成下候様奉御願申上候、以上、

嘉永二己

柴屋利兵衛〇

西七月

町代

但代積り書付添、

喜助○

メ百六拾三匁六分

一、前二記又海老屋弥助三間四方拝領地之趣申聞、役前留記相調候得共、右地面被下候義一切相見へ不申、尤荒川軍兵衛町奉行中二頂戴いたし候段申伝候趣弥助申之、弥助方二ハ存不申候得共、寛政度沽券改之節町内之差出候帳面二沽券之外二三間四方拝領地と申事相見へ候得とも、是ハ向方認め差出候帳面二而慥ならず被存候、其後文政十一子年沽券改之節も、同様町内之沽券帳差出申候、此帳面二も拝領地と申事可有筈なれとも、此節者拝領地之事認め無之、沽券地計一兩度トモ役所帳面二拝領地之義相見へ不申候、左候へハ、只今無証如通、当時舩道具小屋建有之由地面小屋共舩付二可申付哉候趣、其通り二而可然由御沙汰有之、裏沽券之義弥助分ハ建物少し引退り有之、少々建物外之沽券地有之、徳兵衛宅建物沽券一枚二相成、九右衛門宅東ヨリ二而ハ少々沽券外江建物角出張候気味、東へヨリ候程沽券外江建物出張有之候得共、最早年来建有之候事、御憐愍ヲ以御用捨之義役前々御断申上相済、坂本屋右生洲軒方二間計向二有之、是も御用捨御断申上候御聞届、其外沽券外少々野菜物坏植有之候分取払申付候段申上、御承知之御返答有之、

右之趣海老屋弥助、鮎屋徳兵衛、坂本や九右衛門江申渡ス、八百屋半兵衛江弥助居宅西尻二有之候わら葺小屋地面建物共、已来舩附二相成候間、此旨相心得候様申渡、

一、寛政四年子年、弥右衛門、又九郎、善右衛門居宅風波之節、石垣打崩建物損難義仕候付、浜先方十間計水中二浪除杭打度段願有之、右者御聞届二相成候趣相見申候、此度右願ハ無之候得共、調序二見当り候付申上候段、御中老平十郎殿迄申上置、但三人之者へ右之儀者何

共不申聞候事、

一、八百屋半兵衛江前文申達候上、別段急度差図いたし候儀二而ハ無之候得共、鮎屋、坂本や、系ひ屋共建物一枚沽券地石垣際方御上地二候得共、如何程舩竅取乱之積候とも不苦候得共、其心得ハ可有之と存候得共、含二而少々用捨いたし遣し候様申渡置、

廿六日 晴 元次

以切紙致啓上候、然者其御城下宮町小步行三助并中庄村七右衛門共所役人差添、今廿六日当御役所江御差出方之儀及御懸合候処、則罷出候付相糺候上、兩人共口書取之猶他参留申付、一同差帰申候、右之段可得御意旨清左衛門申聞如斯御座候、以上、

七月廿六日

中嶋直右衛門

名和伴六

廿七日 晴 徳右衛門

一、網町晒屋長兵衛義借財多二付、櫛形晒小屋江逼塞仕候段、町代届出、

廿八日 晴 藤助

一、大津町并筒屋左兵衛宅表通取繕二付、足場掛置候段届出、廿九日大目付へ案内、并町筋追々取繕相始り可申、職人仕事都合二寄俄二取懸り候分も可有之付、時宜寄一々御案内不申上候段、同所江断申置ク、

廿九日 晴 卯三郎

一、早統二付、五ヶ村申合雨乞宮籠いたし候段、五ヶ村を届出ル、

晦日 晴、夕雨 右野右衛門

一、前二記長兵衛晒小屋へ逼塞二付、米仲も定而難相勤儀と存候得共、別段右之沙汰ハ不申出、是迄米仲難相勤者出来候共、御断不申上御勝手へ案内いたし候儀も無之、柴屋庄兵衛江右之趣相心得候様申達

候処、利兵衛申聞候ハ、御払米有之候へ者米仲共江廻状差出申候得共、
入札不致候共別段断と申儀も無之仕来り候、猶又長兵衛江ハ御米仲
休ミ候哉否哉相尋可申、何レニも心得罷在候由返答、

八月

朔日 朝晴、夕雨 元次

二日 雨 徳右衛門

一、三州保衣郡片野原村初蔵妻娘三人之者、心願二付神社仏閣順拝罷出
申候、尤右初蔵義ハいさり二而右女房車を引、当村迄参候処、女房
病氣二而車引候事難相成候処、何分早々国元へ歸村仕度趣相願候付、
則国元へ送り遣申度奉願上候、何卒御憐愍ヲ以此段御聞濟被成下候
ハ、難有仕合奉存候、已上、

八月二日

肝煎

繁八〇

庄屋

田中与次兵衛〇

往来手形之事

一、三州見河保衣郡片野原村初蔵、妻ゆか、娘てふ右之者此度心願御座候付、神
社仏閣拝礼二罷出申候、宗旨之儀者代々真言宗二而当院旦那二紛無
御座候、依之、国々所々御関所無相違御通可被成候、若亦行暮難渋
之節者一宿奉頼申入候、万一途中二而病死等仕候、其所之御作法通
り御取埋可被成候、其節国元へ不及届申候、為後日之往来手形一札
仍而如件、

同国同郡同村

真如寺

嘉永二年

西三月

国々所々

御関所并ニ在町御役人衆中

送り一札之事

一、三州保衣郡片野原村初蔵、妻ゆか、娘てふ右之者心願二付、神社仏閣順拝罷
越申候処、右女房当村二而病氣差起り難車引候二付、早々国元へ歸
村仕度趣相願候付、地頭役場江相伺御聞濟之上、車引送り遣申候間、
宿々村々以御慈悲本国へ御継送り被遣可被下候、為其送り手形仍而
如件、

膳所御城下

宮町年寄

嘉永二年

繁八〇

西八月

庄屋

田中与次兵衛〇

宿々村々

御役人衆中

一、先二御舩出入勘定之儀二付、坂元屋九右衛門が私相手取御願奉申
上候付、双方被召出御調之上、銀六百目右九右衛門江相渡可申之処、
近来私不如意二付段々及延引奉恐入候、然ル処、此度海老屋弥助扱
ヲ以当九月晦日銀三百目相渡、残銀三百目者同十二月廿五日限、当
御役所江持参可仕候段申談候、前書徳兵衛が奉申上候通相違無御座
候付、連印済証文奉差上候、以上、

網町

西七月

鮎屋徳兵衛〇

坂本屋九右衛門〇

扱人

海老屋弥助〇

組頭

梅屋市兵衛〇

三日 晴 藤助

(三河国宝飯郡)
一、三州東漸寺御代替り二付、当表江被罷出候先例三星屋次郎兵衛下宿

二相成候間、此度も三星屋江被仰付候間、右相勤候様可申達旨御用所被申聞候、申渡、

四日 曇、雨 卯三郎

五日 曇 右野右衛門

一、此度本堂修覆二付、取退寄進講別紙仕法帳之通相結申度、此段奉願上候、右御聞濟被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

嘉永二年 法傳寺○

酉七月

肝煎

与助○

庄屋

小西藤吉○

右之願書口上二而御差支無之哉相同候処、右寺講中旦中二而取結之義不苦候得共、郷中等へ押ならし相願候義ハ無用ニ可致旨御沙汰有之申渡、

一、此度本堂修覆二付、取退寄進講取結申度御加入奉希上候、

一、札数五百枚、壹枚懸銀四匁ツ、尤坐掛坐渡之事、

但掛銀御持参無之御方様鬩相除候事、

一、満講迄御当無之御方様へ、銀四貫七百貳拾四匁六分四厘ヲ以割戻し候事、

一、三ヶ年間毎月相勤候事、

一、会日御出席之御方様へ鹿酒差出候事、

渡方左之通、

第壹番

銀百目

二ヨリ四迄花三匁ツ、

第五番

同拾匁

六ヨリ九迄同三匁ツ、

第拾番

同貳拾匁

十一ヨリ十四迄同三匁ツ、

同拾匁

第十六ヨリ十九迄同三匁ツ、

第廿番

同貳拾匁

廿一ヨリ廿四迄同三匁ツ、

第廿五番

同拾匁

廿六ヨリ廿九迄同三匁ツ、

第卅番

同貳拾匁

三十一ヨリ卅四迄同三匁ツ、

第卅五番

同拾匁

卅六ヨリ卅九迄同三匁ツ、

第四拾番

同貳拾匁

四十一ヨリ四十四迄同三匁ツ、

第四十五番

同拾匁

四十六ヨリ四十九迄同三匁ツ、

第五拾番

同貳拾匁

五十一ヨリ五十四迄同三匁ツ、

第五拾五番

同拾匁

五十六ヨリ五十九迄同三匁ツ、

第六拾番

同貳拾匁

六十一ヨリ六十四迄同三匁ツ、

第六拾五番

同拾匁

六十六ヨリ六十九迄同三匁ツ、

第七拾番

同貳拾匁

七十一ヨリ七十四迄同三匁ツ、

第七十五番

同拾匁

七十六ヨリ七十九迄同三匁ツ、

第八拾番

同三百目

嘉永二年

酉七月

膳所西庄村

法傳寺○

セ話方大津町

太助○

同宮町

次郎七○

一、米屋嘉十郎悴庄太郎義、先年ゝ親類共江相預ヶ置候処、追々成長仕候付、此度分家并別家共打寄相談仕、右庄太郎江本家相続為致申度此段奉願上候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永二年

酉五月

米屋久右衛門○

米屋金五郎○

米屋太七○

組頭

嘉助○

同

善次○

一、右先達而相続いたし候儀、家屋敷柴屋庄兵衛手二入有之、外家二而相続いたし候哉、家取戻し候心得二候哉相尋候処、柴屋ゝ出候銀高、又米屋ゝ出候銀高大体融通二相成候付、家取戻し度由、左候ハ、柴庄へ引合相済候上と存相對いたし候処、中々柴庄承知も不致様子、三星屋次郎兵衛中人二入、此節対談中二候得共、米屋親類共一向強情二而談し方相整難キ旨三星や申出、本人庄太郎呼二遣置候処、此間参り候趣届出呼出理解申聞候得共、何分年若之事今少し難分、三星屋へ参り相談いたし候様申渡、

六日 曇

代藤助

一、私居宅北側壁、此度塗直し候儀被仰付奉畏候、右二付別紙入用書奉入御高覧候間、乍恐先例通被下置候様御願奉申上候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

願主

酉八月

茶屋長七○

肝煎

庄左衛門○

同

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

一、私義飛脚稼二而渡世仕来り候得共、勝手二付兼而相譲り申度存居候処此度柏屋次兵衛親類二二文字屋万助与申慥成者在之候間、此者儀讓受度由「二付」、^(朱筆)段々相願候付、相応之義と存相讓申度此段奉願上候、右二付御用状ハ勿論、御家中様方其外御届物等是迄通り聊麁略無之様大切二可仕候、依之、已来ハ柏屋次兵衛親分二取究、諸事引請為相稼可申候間、乍恐此段奉願上候、以上、

譲り主

国友屋傳吉○

讓請

二文字屋万助○

親分

柏屋次兵衛○

前文之通相違無御座候二付、私共奥印仕奉差上候、尤万助飛脚渡世向二付故障ヶ間敷義出来候共、私共ゝ^{引請}相糺可申候間、何卒格別之以御憐愍、右願之通御聞濟被為成下候ハ、一統難有仕合奉存候、以上、

嘉永二己酉年

丸屋安次郎○

八月

灰屋新次郎○

年寄

近江屋清吉○

右御聞濟、八月十五日、右日限二御達し之義記ス、
積り書メ五拾弍分三分、貳貫三百九十弍文、八月七日御用懸りへ差出ス、

七日 晴 徳右衛門

一、来ル廿二日安昌寺施我鬼^(徳)二付、広小路へ立札いたし候、大目付へ御届申候段案内来、

一、米屋正太郎、柴屋庄兵衛金銀出入之儀二付、段々引合候得共、双方落合不申、願下いたし呉候様申聞、三星屋次郎兵衛、枅屋安次郎申出ル、下浜田町国友屋傳吉持家江、此度網町二文字屋万助与申者借宅仕度此段奉願上候、此者慥成者二御座候二付私共請人二相立申候、

一、宗旨者代々浄土宗二而清徳院旦那二紛無御座候、
一、從御奉行様被仰渡候御法度之趣、少も為相背申間敷候、若相背候義御坐候ハ、此印形之者共如何様共被為仰付可被下候、為後日借家願書奉差上候、以上、

酉八月

借り主

万助○

家主

傳吉○

請人

龜屋清次郎○

引取

柏ヤ次兵衛○

五人組

宗七○

肝煎

庄左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

八日 曇、晴 藤助

一、米屋久三郎并太七呼出し候処、太七留守二付代金兵衛罷出、米屋本家相続方之義二付、柴屋庄兵衛へ引合候処、兎角対談出来難キ趣、

右ハ天保十亥年仲中真借財濟方仕、右米屋家屋敷建物不残、柴屋庄兵衛江売払申度旨、米屋久三郎、柴屋庄兵衛、米仲年番田中屋善次郎、塩屋新左衛門、組頭嘉助、町代伊兵衛連印ヲ以、願書差出申上候上御聞濟申達有之候、左候へハ全く庄兵衛買得二相成有之、此間方之引合振齟齬いたし可有之哉二被察候、只今之引合二而ハ買戻し之相談二不相成候半而ハ、熟談二不及義と被存候趣申聞候処、金兵衛右壳払二相成候義ハ一向覚不申、久三郎印形願書差上候得者、甚恐入候訳合二御座候趣、猶得と勘弁相談仕直し候様申渡ス、

九日 晴 代右野右衛門

一、私義不調法者二御座候処、町代役被仰付御蔭ヲ以兎も角も相勤難有仕合奉存候、然ル処、追々及老年氣臆^(記憶)等薄相成候付、当春退役御願奉申上候処、不存寄御褒美被下置退役御差留被成下、冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、近年身上不如意二相成候付、此俣差置候而ハ、必至極難二相成候間、急々仕法仕度奉存候間、御差留之後間も無御座、退役御願奉申上候義甚以恐多奉存候得共、何卒格別之御憐愍ヲ以、御役儀御赦免被成下候様偏奉願上候、右願之通御聞濟被成下候者難有仕合奉存候、以上、

八月

町代

徳兵衛○

組頭

清兵衛○

八日付落

一、糺屋七兵衛名目銀拝借一条二付、京都御番所御呼出、加判^(カ)与次兵衛、重兵衛、弥三郎、但し当時家出断申出候由右届出、

九日

一、当時裏町二居候糺や七兵衛弟左八郎、右同断二付御呼出、加判七兵衛、弥兵衛罷出候段届、

一、以切紙致啓上候、然者去月中御懸合之上他參留申付置候、其御城下宮町小步行三助并中庄村七右衛門江申渡候儀有之候間、所之もの壺人ツ、差添、印形持參、明後十一日朝五ツ時、当御役所江御差出有之候様可及御懸合旨清左衛門申聞、如斯御座候、以上、

八月九日

中嶋直右衛門

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

川———
(川那邊壯右衛門)

十日 代卯三郎

一、御切紙致拜見候、然者去月中御掛合有之、他參留御申付被置候当城下宮町小步行三助并中庄村七右衛門江御申渡之儀有之候付、所之者壺人ツ、差添、印形持參、十一日朝五ツ時、其御役所へ差出候様被仰越致承知、則差出申候、右御答如斯御坐候、以上、

八月十一日

川———

右四人名宛

十一日 晴 元次

一、鮎屋徳兵衛内実身代不如意二付、退役願候二付承届申度、右二付町代代り糺屋市兵衛申付候思召相伺候処、思召無之旨御沙汰有之、

一、切紙ヲ以致啓上候、然者其御城下宮町小步行三助、中庄村七右衛門江申渡候儀有之候間、所之もの差添、今十一日当御役所江御差出有之候様及御懸合候処、則罷出候付、酒井若狭守様江伺之上、三助、七右衛門儀得と出所も不相糺、三助者無宿惣吉任頼衣類三品質入いたし遣候段不埒二付、過料錢三貫文、七右衛門ハ三助方衣類壺品請人も不取置質二取候段不埒二付、右品取上過料錢三貫文申付、一同差帰申候、右之段可得御意旨清左衛門申聞如此御座候、以上、

八月十一日

中嶋直右衛門

川———
(川那邊壯右衛門)

十二日 雨 徳右衛門

一、来ル十五日、例年之通神事始并放生会執行仕候、尤諸商人入込候付、此段御届奉申上候、以上、

嘉永二年

西八月

御聞届、大目付へ案内致ス、

若宮八幡宮神主
斎藤筑前〇

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

一、大津町町代儀五郎代り悴安次郎役所へ罷出内々申聞候ハ、此間米屋正太郎相続方之儀二付、右家屋敷柴庄へ売払度願書^段、天保十亥年二月米屋久三郎買取、庄兵衛米仲年番組頭町代連印ヲ以願出、伺之上承届候間、就而ハ是迄柴庄江之引合方相違も可有之、此度談候買戻し之相談二無之候而ハ調不申候間、得と勘弁致候様理解申渡候処、右久三郎印形ヲ以相願候義金兵衛一向承知不仕、右願書差上候上ハ、引合方不都候段恐入候旨申聞、得と勘弁引合直し候様申渡置候処、其後米屋太七方へ金兵衛参り申聞候ハ、久三郎ハ幼年二而印形いたし候義も不存、太七後見入込居候内之事故、太七印形いたし候事と相見へ、不取計候段申聞、右二而ハ全ク太七不取計故、米屋家相続も出来不申訳合いたし、甚以太七不行届之段重々理屈申甚困り迷惑仕居候、右二付何卒程能庄兵衛へ御理解被下候様安次郎申聞候得共、金兵衛心中悩ならす信実ケ様二いたし度と申処承知不致候ハ而者、庄兵衛へ理解難申、依之、米屋方、金兵衛、太七、久三郎呼出し、此間庄兵衛方江も談し直し度候様申渡候、如何相談相成候哉尋候処、未其尽二而談し直も不致候、何レ京都親類共呼寄相談之上、

柴屋へ引合取懸り候趣申聞、先是切二而為引取候事、

十三日 晴 藤助

- 一、鮒屋徳兵衛町代役願之通差免申渡、
- 一、右代り町代役柏屋市兵衛へ申付ル、
- 一、右同人昼後礼請之事、

十四日 晴 卯三郎

- 一、当「秋姫」君様関東御下向二付、町筋置土取懸り候様申達ス、
- 一、御使者取次所毎々間違不都合義も有之趣、右者御先方尋方不行届哉二候得共、当町之者江尋有之節者、山形屋岩太郎方教候様町触出し呉候様、御使番を被申聞候、右両条町触出ス、

十五日 晴 右野右衛門

「三ヶ浦拝借願二付、船町十兵衛歎願一条此所へ可記処間違、同心職方組方帳二記し有之、」

- 一、此間願置候中庄宮普請用檜木拾本之口、御山二無之不被下候付、右代松枯木出来候節被下相願候処、御山々枯松有無問合候様御中老方御沙汰有之、引合候処、枯松大小二不拘御用財二不被成候悪木ハ可有之、尤焼木ならてハ難用品割木も夥敷出来有之、置所なく困り居候事、夫故立枯候俣有之、悪木五十、八十位者随分可有之候由被申聞、右之趣申上置候処、今日右檜代り枯松大小二不拘、五十本被下候御達有之、尤此節御山方御用多二付、御用透候根切有之候様達し置候間、右役方へ談し為請取候様御中老平十郎殿へ御達し有之、右御山方へも談置候事、

- 一、国友屋傳吉飛脚稼譲り、二文字屋万助買請願書上置候処、今日御達、先達而諸手破株二相成候付、飛脚も同様之義二候得共、先人数ハ御増不被成候思召二付、御用状賃錢下直二而致候様御沙汰有之候処、此度猶又改株立之義ハ不相成、人数ハ御増不被成候思召二付、

御用代ハ以後不被下候間、御冥加二相勤候様右人数御増二相成候節者、御用賃錢可被下、夫迄ハ無賃二而御用相勤候様御中老平十郎殿へ御達し有之、申渡ス、十六日御請申出ル、

- 一、今十五日信心之輩申合千燈奉納仕度段申出候、俄之義二付恐入候得共、何卒御聞届被成下候様奉願候、以上、

西八月

八幡宮神主
斎藤筑前〇

- 一、此度左之通殊之外及破損候付、乍恐何卒御見分之上、右何も御修覆奉願上候、以上、

- 一、御簾 一、宮井戸屋根

右式ヶ所之破損、乍恐御修覆奉願上候、以上、

西八月

斎藤兵部〇

- 一、私方へ昨十四日夜盜賊這入、小屋二入置申候左之品盜出し申候二付、右之段御届奉申上候、

- 一、紺立嶋女かたひら

壺

一、七寸鏡

壺枚

- 一、五寸同

壺

一、黒鼈甲かうかい 式本

右之通盜取出申候、

西八月

肝煎
棒屋喜三郎〇

庄屋

庄左衛門〇

竹内新左衛門〇

十六日 晴

元次

十七日 晴

徳右衛門

十八日 晴

代元次

- 一、伊勢屋町置土出来届ル、

十九日 晴

卯三郎

廿日 晴 右野右衛門

一、米屋嘉十郎跡家屋敷之儀、去ル亥年売払申度様御願奉申上候処、御聞濟被成下難有奉存候、然ル処、家屋敷之儀未売得^(買)不仕、是迄等閑二打過居候処、幸嘉十郎倅庄太郎成長仕、元家屋敷二而相続仕度段親類共へ申出候二付、親類共談之上、此度元家屋敷二而相続為致申度候二付、京都親類^〆柴屋庄兵衛殿方へ段々引合申候処、何分彼是申立一切取敢呉不申、甚以歎^ケ敷奉存候、依之、何共奉恐入候得共、柴屋庄兵衛殿御召出し之上家屋敷相渡呉候様、乍恐御利解被為 仰付被下候様奉願上候、何卒右願之通格別之御慈悲を以御聞届被成下候ハ、御蔭ヲ以相続仕、莫太之御慈悲与親類共一統難有仕合奉存候以上、

願主

米屋久右衛門〇

米屋金五郎〇

米屋太七〇

組頭

佐兵衛〇

右願意口上二而色々申出候得共筋立不申、依之、書付を以申出候様申付、則此口上書差出不審之文言押之、猶又仲人三星屋次郎兵衛^〆今一応米屋へ押候上、柴庄へ引合候様次郎兵衛へ申付ル、

廿一日 雨 元次

廿二日 晴 徳右衛門

廿三日 晴 藤助

一、来九月三日逮夜^〆同四日日中迄、伊勢屋町於掛所、例年之通報恩講執行仕度、猶引続四日逮夜^〆七日初夜迄法座相勤申度奉存候、右法会中法談同宗之門相招相勤度奉存候、此段御許容被成下候様御願奉申上候、仍之右以書付御届奉申上候、已上、

嘉永二年

酉八月

永順寺〇

伊勢屋町町代

喜助〇

御聞届、大目付へ案内、

一、此度揚豆腐直下^ケ被仰付候付、是迄揚豆腐^〆二付六文売払申候得共、壹丁二付五文二直下仕候、依之、乍恐御届奉申上候、已上、

豆腐屋物代

嘉永二年

酉八月

山形屋嘉七〇

右別紙認メ申上候、御聞濟、大目付へ案内

(二十四日条脱)

廿五日 晴 右野右衛門

一、昨年八軒町切所追々土減り候付、此度町筋置土之序二為持呉候様御作事奉行^〆談有之、下浜田広小路三郎兵衛普請二付、古木等御乱有之候裏へ片付候様大目付^〆尋、急度沙汰有之右両条申渡入、

廿六日 雨 元次

一、私義親長三郎、存命中新堀御魴請負結構被仰付難有仕合二奉存候、然ル処、無拋義御坐候趣二而、請負一統申談、南都紀州御役所金拝借仕候趣二御座候、其後親長三郎死後、諸手借財向多必至難渋仕致方無御座、御救之義奉願上候処、格別之御憐愍を以御救拜借被仰付、御蔭ヲ以右御下金之内二而、早速御役所金をも無相違為相濟全 御仁恵ヲ以家業相続仕冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、右返金之節請負之内丸屋弥兵衛、判人糺屋七兵衛兩人出銀無之、無余儀金子持参之向計其節相納申候、右二付毎々兩人江及催促候得共、未弁金不仕、一統当惑仕居候、私義者格別之蒙御憐愍拜借被仰付有之候処、今以不及事済二、自然出訴二も相成候而ハ、蒙 御仁恵候御趣意二も相違仕候而者奉恐入候付、何卒右兩人之者共^〆早々出銀二

相成候様被仰付、双方埒明事済仕候様奉蒙御威光度、此段乍恐奉願上候、右願通御聞濟被成下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

嘉永二年
酉八月

山形屋岩太郎○

町代

久助○

丸屋弥兵衛、糶七へ申聞候様、膳所村庄屋へ申渡、

一、枅屋宗兵衛門前今朝銭売箱有之候段届出、盜賊方へ案内候様申渡、

一、凡金拾五兩程

一、銭拾五貫文計

入物銭箱壹ツ

昨廿五日夜、私表見セ戸少々破損致候処も御座候与相見へ、引明候而這入、右之通取逃ケ申候二付恐多御座候得共、右之趣御届奉申上候、已上、

願主

嘉永二酉年

塩屋七左衛門○

八月廿六日

町代

喜助○

廿七日 晴

代卯三郎

廿八日 曇

藤助

一、昨日山形屋岩太郎願出二付、糶七、丸弥埒明之儀庄屋新左衛門へ及沙汰候処、七兵衛儀者此節南都へ被呼出留守中二候、是ハ何レ家屋敷売払、如何様とも片付可申、丸弥義者大津浅井屋源兵衛呼二遣し可申聞旨申居候、則源兵衛呼二遣候処、是も京都御番所へ御呼出し只今出掛候処、参り候仕合何レ引取候ハ、又々罷出候由申聞候趣新左衛門申出ル、

一、当町内清八家去冬類焼仕候、然ル処、清八義相果申候二付、無抛町持二致居候処、諸歩役等迷惑仕候間、此度隣家左兵衛江地面相譲り申度、尤佐兵衛方も譲り請申度此段奉願上候、右願之通御聞濟被成

下候ハ、町内一統難有仕合二奉存候、以上、

町惣代

嘉永二年
酉八月

次郎七○

譲り請

佐兵衛○

肝煎

繁八○

庄屋

田中与次兵衛○

聞濟申渡、

廿九日 曇

代徳右衛門

一、柴屋庄兵衛江米屋引合之趣聞糺候事、但出入勘定書役所二在之、

九月中

朔日 曇

代藤助

一、当町内清八類焼跡地面此度讓請候二付、間口式間半、裏行三間半、尤藁ふき二家作仕度、御時節柄奉恐入候得共、家作御手当銀壹軒役分御下ケ被成下候様奉願上候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞届被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永二年
酉九月

佐兵衛○

肝煎

繁八○

庄屋

田中与次兵衛○

一、柴庄方銀談出入之義二付、米屋久三郎、同太七、同金兵衛呼出し、米屋家屋敷柴庄江先達而売払願濟二付、庄兵衛方借分立銀いたし家

買戻し候様利解申渡、尤四十年庄兵衛へ家貸中ハ貸賃取之、売渡後ハかし賃取候訳も無之段申渡ス、追而願下ケ之義申出候、

二日 雨 代 右野右衛門

三日 晴 徳右衛門

四日 晴 藤助

一、米屋家共猶又願下ケ催促申出ル、

以剪紙致啓上候、然者当閏四月中御懸合之上遠方留申付置候、其御城下大津町餅屋金五郎江相尋度儀有之候間、所役人差添、明後六日朝五ツ時、当御役所江御差出有之候様存候、右之段可及御懸合旨清左衛門申聞、如斯御座候、以上、

九月四日

中嶋直右衛門
秦園輔
柴山順右衛門
名和伴六

一、米屋、柴屋出入一条二付、久三郎、太七、金兵衛、庄兵衛、七郎兵衛、利兵衛何レも呼出し、双方対談いたさセ候得共、兎角落着不致屋後方夜九ツ時過迄利解申聞談しさセ候得共落合不申、深更二も相成候付、双方猶得卜勘弁いたし候様申渡引セ候、

五日 晴 卯三郎

一、金三兩式歩 宮町佐兵衛

右昨年類焼之处、此家作いたし候付、為家作料被下置候、

一、御切紙致拝見候、然者当閏四月中御掛合有之遠方留御申付被置候、当城下大津町餅屋金五郎江御尋之儀有之候付、所役人差添、今六日朝五ツ時、御役所江差出候様被仰越、委細致承知、則今日差出申候、右御答如斯御座候、以上、

九月六日

名宛四人

川那辺壮右衛門

五日

六日 晴 右野右衛門

一、丸屋弥三郎家出跡家財諸道具、柴庄方江御米代引宛二引取、当役所右売捌之義差留申付、右之段御席江申上置候、然ル処、弥三郎家出致候而、何レ方か柴庄大津両彦米仲共へ連名二而書状差越、右三所借財有之候方へ諸道具任セ、相談之上可然取計呉候様申越候趣、右手紙柴庄方へ参り候ヲ両彦方へ沙汰二不及、道具引取候而、其後彦兵衛方へ手紙相達候処、「^(貼紙)両彦方江家」財諸道具不残書入、兼而借金宛二申置候趣、双方引取方纏合、先日方猶又対談有之候処、御米代之趣意二而柴庄方へ道具引取、庄兵衛両彦へ書状届、延引相成断之^(兼)而銀三百目差出し候由、右二而埒片相付候段、御元々助重様、九郎右衛門方沙汰有之、

一、右故障前文之通埒片相付候段、米仲新左衛門方も届ル、

一、以剪紙致啓上候、然者其御城下大津町餅や金五郎二所役人差添、今六日当御役所へ御差出方之儀及御懸合候処、則罷出候付相糺候上、口書取之、猶遠方留申付差帰申候、右之段可得御意旨清左衛門申聞、如斯御座候、以上、

九月六日

名前前同断略ス

七日 晴 元次

八日 晴 徳右衛門

一、米嘉、柴庄出入書入出願有之、

九日 晴 藤助

一、丸屋弥三郎諸道具、御米代二柴庄方へ引取候処、大津両彦江も書入有之、双方引取方落合不申、先達而方対談可致旨申付置候、御勝手方方挨拶も有之候様子二而同所方申上有之、右道具ハ柴庄方江引取、両彦方江ハ庄兵衛方三百七拾匁遣し、対談事済二相成候趣、右二付

当役方差留置候、柴庄引取道具勝手二壳捌候而可然旨、御中老九郎三郎殿方御沙汰有之、

十日 晴 卯三郎

一、右之趣米仲新左衛門江申渡、

一、大須賀町江引取候道具も少々有之、是も勝手壳捌候様町役へ申渡、御者頭金之儀も及沙汰置候事、

十一日 晴 右野右衛門

一、牢飯料請取、当番江渡ス、

十二日 晴 元次

十三日 曇 徳右衛門

十四日 雨 藤助

十五日 晴 卯三郎

一、寿明君様御通輿無御滞相済、

十六日 晴 右野右衛門

一、来ル十九日 新羅大明神祭礼并御湯

一、廿日 別保村草木

一、廿一日 宮町草木

一、廿五日 若宮八幡宮祭礼

右之通執行仕候、依之、御届奉申上候、以上、

嘉永二年

若宮八幡宮神主

酉九月

斎藤筑前〇

御聞届、大目付へ案内、

一、私儀、近年商売向不景氣二而必至難渋二付、親類共呼集、色々仕法之儀相談も仕候得共、頓与思敷手段無御座候二付、無抛親類共并格別入魂之者江今度相頼、別紙帳面之通相続講仕度此段奉願上候、右講之儀二付故障等出来候共、御役所様江聊御苦勞相掛ケ申間敷候、

何卒右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永二己酉年

九月

願主

徳兵衛〇

京都二条通烏丸西へ入

親類惣代

松屋喜兵衛〇

組頭

清兵衛〇

町代

市兵衛〇

廿三日御聞届、申渡、大目付、郡奉行へ案内、

一、此度仕法講取結仕度候付、何卒各組方被仰合、乍御苦勞様御加入被成下候様偏二奉願候、

一、御人数六拾枚壹組与相定、壹枚分掛金壹両春秋両度相勤申度、尤返濟方之儀者左之割合ヲ以御渡可申候事、

一、毎会花鬘として銀三匁ツ、廿人様へ振鬘を以御渡可申上候事、

一、掛金之儀者当日会席江御持参被下候様奉頼候事、

一、会日之儀者、前以御案内可申上、其節鹿末之酒飯差上可申候事、

一、金子御入用之御方様者、掛金高二応し、年七朱之利足二而御預可申上候事、

割合左之通、

初

金四両

掛金壹両ツ、

一、式

同五両

一、三

同六両

一、四

入札

一、五

同八両

一、六

入札

一、七

同金拾両

一、八

入札

一、九

同金拾貳両壹歩

一、

同

同

同

一、十	入札	同	一、十一	金拾四兩壹歩	同
一、十二	入札	同	一、十三	金拾六兩貳歩	同
一、十四	入札	同	一、十五	金拾八兩貳歩	同
一、十六	入札	同	一、十七	金貳拾兩三歩	同
一、十八	入札	同	一、十九	金貳貳兩三歩	同
一、廿	入札	同	一、廿一	金廿四兩、是乃掛金なし	
一、廿二	入札	同	一、廿三	金廿四兩壹歩	
一、廿四	入札		一、廿五	金廿四兩貳歩	
一、廿六	入札		一、廿七	金廿四兩貳歩	
一、廿八	入札		一、三十	金廿四兩貳歩	

右年限中仕法之通御渡申上、残ル御人数様江壹枚分金貳拾五兩ツ、無相違返済可仕候事、

講元
鮒屋徳兵衛○
セ話元
枳屋万左衛門○
同
海老屋弥助○
京都
松屋喜兵衛○
田中屋茂兵衛○

一、私儀段々及老年候二付、家名之義悖徳三郎江相譲り徳三郎義徳兵衛与改名仕、私義又十郎と仕度右両様奉願上候、右願之通御聞済被成下候得者難有仕合奉存候、已上、

網町
鮒屋徳兵衛○
町代
卯兵衛○
嘉永貳年
酉九月

廿三日聞届、申渡

一、私義近年不仕合二付、取続方凌兼難渋仕候付、為助成大須賀町筒屋家二において一夜浄瑠璃興行仕度、此段奉願上候、右願之通御聞済被成下候得者難有仕合二奉存候、以上、

酉九月

願主
傳八○
町代
市兵衛○

御聞届、大目付へ案内、

十七日 晴 代藤助

一、丸弥三郎諸道具米仲共引取、町内同断、右二付家附道具も有之、同心共立会出ル、

十八日 晴 徳右衛門

一、小間太入湯二付、卯三郎立会出ル、
十九日 晴 藤助

一、例年之通り来ル廿日、廿六日迄、永代経并法談執行仕度候付奉願上候、右願之通御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永二年
西九月
景沢寺○
庄屋

大津常徳寺

竹内新左衛門○

一、米屋柴屋家屋敷銀談一条之儀、此間御通輿前御用多二付、暫延引申置候処、猶亦兎角相談落合不申、依之、先来春迄願延しいたし致度申出ル、仲人三星やヲ以、

廿日 晴 卯三郎

一、前段一条二付、柴庄呼出勘弁いたし候様申渡、
一、当町内持元清八家、此度私へ讓請候段御願奉申上候処、御聞済被成

下難有奉存候、然ル処、右讓受之沽券書入有之候二付、此度新沽券御割印頂戴仕度奉願上候、尤私居宅隣家之儀二御座候ハ、新沽券壹通二被成下候様奉願上候、何卒格別之御慈悲を以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

嘉永二年
酉八月

願主
佐兵衛○
肝煎
繁八○
庄屋
田中与次兵衛○

聞届

廿一日 晴 右野右衛門

一、新田二駕籠人足賃錢御定無之、此度本多頼母殿御詰二付、右定賃錢差出し候様書記役ヲ以申聞候、セた、石山壹人分片道四拾三文、草津迄八拾三文二付、新田迄六拾文書付書記役へ出ス、
一、米屋一統、柴屋一統双方役所対談申付候処、今日埒方相付不申候、米屋共方明後日迄猶予御願引取、

廿二日 晴 元次

廿三日 雨 徳右衛門

一、伊勢屋町木屋勘兵衛義、先代方勢田餅屋江かし有之、先月廿五日不動へ参詣引取掛、右餅屋方へ立寄、右日限ハ兼而約定も有之趣二候へとも、勘兵衛同道御持組御奉公人も有之、酒も過し候様子、先方貳貫文かり候江壹貫文差出、右之跡延引呉候様申聞候、夫方段々声高之応対二相成、店之餅杯食、或者手桶碎ヶ候様之次第二相成、餅屋甚迷惑二及候趣、為差義二も無之候得共、余り声高手荒之引合方且御奉公人も有之、夫々支配之分方擦当有之候間、右勘兵衛義元起り二付、役所銀擦度可申渡旨、役頭承知之上談、目付方御沙汰有之、

廿四日 晴 藤助

一、木下村清右衛門家宅二において、浅井屋清八荒道具類廿六日昼市致し度段、庄屋届出、

廿五日 晴 卯三郎

一、八幡神事二付、昨夜今日同心廻り之事、
一、右神事無別条相濟、徳右衛門、元次届、

廿六日 晴 右野右衛門

一、米屋嘉十郎方二預り居候麴屋五郎兵衛貸株、柴屋^ヤ庄兵衛江譲り渡、米屋株、麴屋株貳株有之候処、此度米屋家相統方之義二付、一株譲り戻し候様可致、右二付松右衛門、七右衛門、彦兵衛在来質屋二付、一応相当り当時破株二付、今一軒質屋増候共申立方者無之儀二者候得共、表立候儀二ハ無之、下対談二而仲真全差出さセ候義者、勝手次第申談可致旨申渡候処、質屋増之義者迷惑之趣平三郎申聞候得共、前文之通当時破株之義二付、右断承届難旨再三利害申聞三人共納得承知致し、乍去此度米屋家相統方二付質商売いたし度旨無抛訳合二付、麴屋株休株二候得共、是ヲ以渡世被致、若勝手二付外商売二相替り候節者、右株米屋切二而相止譲り二相成候義者断申聞候、尤米屋質商売跡入二付、右方方古質屋共申合等相談可参様御沙汰被下候様、三人質屋共申聞、其段柴庄米屋并中人次郎兵衛江呼出し申渡ス、

廿七日 雨 元次

一、十月十八日、九日、例年之通報恩講執行仕度候間、此段御届奉申上候、以上、

嘉永二年
酉九月

専光寺○

九月廿日御聞濟、何レも同断、大目付へ案内、
大津常圓寺

一、例年之通十月八日、九日報恩講執行仕度、此段御届奉申上候、右之通御許容被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、已上、

嘉永二年

景沢寺○

酉九月

坊袋養專寺

一、例年之通報恩講執行仕度、此段御届奉申上候、

一、十月十日十一日

黒津光明寺

光源寺

一、同十一日十二日

黒津光明寺

大養寺

一、同十五日、十六日

大津常圓寺

正法寺

一、同廿日、廿一日

馬場村光林寺

法傳寺

右之通御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

嘉永二年

法中惣代

酉九月

光源寺○

一、前文同断、

十月十四日、十五日

寺坊

敬願寺

同十九日、廿日

本坊

唯泉寺

一、来ル十月十二日、例年之通会式執行仕度、尤客僧者無御座候、乍恐

此段書付ヲ以御届奉申上候、以上、

九月

庄屋

妙福寺○

堀池又三郎○

廿九日日限伺候処、思召無之、大目付へ案内、

一、此間御聞濟ニ相成候傳八一夜淨瑠璃^(塙)理興行、来月二日ニ相催し度段届出ル、

廿八日 雨

代 藤助

廿九日 晴

代 徳右衛門

一、柴庄方へ引取候弥三郎諸道具、晦日広小路ニ而昼市いたし度段届出、

承届、

白ヶ分

銀九拾六匁

同五百三拾五匁四分

×六百三拾壹匁四分

樽屋新九郎
但し御用懸り取扱也

右此度 寿明姫君様御下向二付、桶類御用新九郎請負被仰付、御用代被下置候、右二付為御冥加金貳百足差上候段届ル、

晦日 晴 卯三郎

(裏表紙、落書)

溝路城

溝口城

水曾路丈

二、日記（二冊目）嘉永二年一〇月～二月

（表紙）

嘉永二年己酉年

日記 二二二

十月ヨリ

川那辺壯右衛門

（本文）

十月中

朔日 晴 右野右衛門

二日 晴 元次

一、米屋一統呼出し、理解申渡、

三日 晴 徳右衛門

一、右同断、呼出し、

一、網町傳八願浄瑠理昨夜無別条相済、見廻り届、

四日 晴 藤助

一、米屋共三人呼出し、裏隠居立物理解申聞候得共、不納得之趣二付、付添嘉助へ申付、柴庄方へ申聞候趣引合候様申渡、

五日 晴 代右野右衛門

一、伊勢屋町於永順寺掛所、五日夜々五夜之間数寄寄軍書講尺仕度、此段御願上奉存、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、已上、

嘉永二年

十月三日

願主 清水屋源八〇
庄屋 堀池又三郎〇

（この間、破れあり。六日～九日条脱カ）

一、御切紙致拝見候、然者当城下大津町柴屋七兵衛長屋久七江御尋之義有之候付、所役人差添、十日御役所江差出候様被仰越、致承知可御差出申候、右御答如斯御座候、以上、

十月十日

川那部壯右衛門

四人名前

尚以大津町柴屋七兵衛と被仰候得共、柴屋七郎兵衛差出申候、

一、安之助、^{嘉助}庄助米屋共へ昨日御理解町役共々段々申聞候得共、一向承知不仕候趣申出、直様太七呼二遣、安之助同道罷出、礪五郎引取迄猶予之義相願候段、安之助迄太七申聞候趣二候へとも、右も米屋共一統之義二候哉、太七一存二候哉、精々理解申渡之上、弥一統二有余相願候ハ、連印願書ヲ以相願候様申渡ス、

十日 晴 卯三郎

一、金三両式歩、宮町佐兵衛家作料受取当番へ渡ス、

十一日 晴 右野右衛門

一、御通輿之節、法傳寺へ被下茶代式百文請取、御者頭中根仁左衛門へ渡ス、

一、米屋共へ九日有余願書之義申達置候処、五日有余之義町役ヲ以口上願出、

十二日 晴 元次

一、先月廿一日御役所様江双方御呼出しニ相成奉恐入候、其節被仰聞候二ハ、諸差引打交り候而者詔りかたく故、先最初先年かし置候家代対談可仕候様被為仰付奉承知候、則双方熟談之上御請書差上置申候通、乍恐銀子御役所様江早々□御取立可被下候様御願奉申上候、右

十三日 晴 徳右衛門

十四日 曇 藤助

一、先月廿一日御役所様江双方御呼出しニ相成奉恐入候、其節被仰聞候二ハ、諸差引打交り候而者詔りかたく故、先最初先年かし置候家代対談可仕候様被為仰付奉承知候、則双方熟談之上御請書差上置申候通、乍恐銀子御役所様江早々□御取立可被下候様御願奉申上候、右

様二候共前以御願申上候通り扣銀諸差引書、左二書記仕奉御高覧入候、

一、銀九貫三百目

西ノ庄村

巳年ノ西九月迄

江坂屋取引当

利四貫三百八十九匁六分かし

巳三月二日

□、金壹兩 西九月迄利 壹部^(歩)貳朱五匁八リ 太七渡かし

// 四月六日

一、同三兩 壹兩^(歩)部六匁貳リ

同人渡かし

一、銀壹貫六百目

御勝手方

西九月迄利七百四匁

年賦上納メ

一、金拾八兩貳步

嘉十郎

銀拾貳匁

勝太郎

錢六拾五貫四百四拾四文

糸屋商売之節取かへメかし

米貳俵

一、銀七百三拾五匁 同人

組糸九百八十把「」

糸八幡屋藤兵衛取極メ

一、金貳兩貳步貳朱 右同人

右八組糸三百五十把大津質受代かし

一、同壹步

同人かし

錢百五拾文

右ハ台壹丁糸三把大津質受代

天保酉十月十八日

一、金貳兩貳步 同人かし

錢四貫七百四十八文

右ハちりめん質出し不足

天保□月十八日

□、金壹兩貳步 同人かし

右ハ嘉十郎へ直二手代長五郎取かへ

一、銀貳貫八百三拾五匁六厘

質物不足

代呂物口々メかし

午十二月十一日迄之質物

受出し候分利足

入銀壹貫六百六拾八匁三厘可相渡分

差引

金三拾壹兩

銀拾七貫九百拾九匁三分七厘

錢七拾貫三百四拾六文 かし

米貳俵

右之通二相成申候、何共重々恐入候得共、御取立可被下候様御願奉申上候、「」右銀談相済申候得者、家屋敷譲り之儀「」申上度奉存候、尤七郎兵衛義宅替為致候様も御坐候得共、延引二相成候而者甚困り居申候、何卒乍恐米屋一統御利解被成下、早々出銀可仕候様被為仰付被下候得者、如何計難有仕合奉存候、右願之通^(御力)憐愍ヲ以御聞済被為成下候得者、一統難有仕合可奉存候、以上、

酉十月

柴屋庄兵衛○

同 利兵衛○

町代 喜助○

十五日 晴 卯三郎

一、今日御法事二付、一昨日御停止触出候、

□剪紙致啓上候、然者其御城下大津町柴屋七郎兵衛長屋百姓久七義、

無宿与惣吉致盜候一件引合二付、右始末相糺候上口書申付、七郎兵衛者遠方留、久七八他參留申付、一同一先ッ差歸申候、右可得御意如斯御座候、以上、

十月十五日

中嶋直右衛門

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

右郡奉行江も相廻し候、

十六日 晴 右野右衛門

一、昨十五日夜九ツ時、町内太吉宅へ盜賊入込錢貳貫八百文、半てん壹枚盜取、表口江出候処へ網町坂本屋九右衛門、升屋儀五郎方江用向有之、通り懸ニ此賊見^{コナ}□候^{コナ}、南之方江逃出、盜取之品者捨置候、九右衛門直様升屋儀五郎方へ參り、□□^{常力}悴已之助此趣申聞候処已之助追掛、伊勢屋町二而捕申候、右太吉九、

(この間破れ、一七・二八日条脱力)

印頂戴仕度此段奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

木下町

嘉永二年

茂助○

西十月

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

右役印紛失不埒二付叱追込申付、委裁許帳載、

十九日 晴 代元次

廿日 晴 卯三郎

廿一日 雨 代元次

一、当社表側高塀扣柱朽損し候二付、何卒御修覆被成下候様奉願上候、右願之通御聞届被成下候ハ、難有奉存候、以上、

神主

嘉永二年

齋藤筑前○

西八月

右願書姫君様御通與前差出、余日も無之事故、御作事奉行へ内談いたし候処、所々御通與迄ニ御修覆之場所有之、御手も廻り兼候付、可相成者御通後ニ致度由、尤表側見分ニハ掛り不申、乍去危キ事ニ候へハ取懸り可申二付、先内見可致由之処、先只今倒レ候様ニも無之、当分突張又引張等ニ而倒不申候様用心致し置可申、追而御修覆可相成様談二付、右願書差出不申、今日差出、

廿二日 晴 代右野右衛門

一、当村風呂屋清助方、昨廿一日暮過時、客衆入湯之節御足輕組青木大次郎殿着用物紛失仕候二付、色々吟味仕候得共相知レ不申候間、乍恐此段御届奉申上候、失物左之通御座候、以上、

一、浅黄木綿襦袢 壹ツ

一、木綿茶嶋綿入 壹ツ

一、同嶋半てん 壹ツ

一、同嶋羽織 壹ツ ×四品

庄屋

十月廿二日

堀池又三郎○

廿三日 晴 徳右衛門

一、来十一月五日ハ八日迄、例年之永代経執行仕度奉存候、此段御届奉申上候、以上、

中ノ庄

嘉永二年

光源寺○

西十月

庄屋

堀池又三郎○

客僧中野村浄念寺御聞届、大目付へ案内済、

一、柴屋七郎平銀子出入之儀二付、相手取奉願上候処、双方御召出之上御利解被仰渡難有奉存候、然ル処、段々及対談候得共、兎角和濟相調兼何共恐入候得共、当役儀五郎儀者元来有趣意委く承知も致居候儀二付、何分春来出府致居候故、最早近々二者右同人之儀歸宅可仕候間、何卒御憐愍を以、夫迄之所御猶予被成下候様、乍恐奉願上候、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

大津町

米屋

西十月

久右衛門○

同

金兵衛○

同

太七○

組頭

嘉助○

右願書差出候、町役^(猶予)も同様有余之義段々相願、何角意味も有之候趣二相聞候、発端米屋家出仕掛候事故、有余願も不相当二候得共、

柴屋庄兵衛呼二遣候処、同人留守二而利兵衛罷出、右有余願之趣、

(この間破れ、二四日二二六日条脱力)

十月

丸屋弥兵衛○

藤右衛門○

五人組

宗兵衛○

肝煎

庄左衛門○

同

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

一、私所持之家屋敷壹ヶ所、尤式軒役借家共不殘代銀三貫目二相定メ、町内小兵衛仲人を以、私本家二借宅仕居候、嶋屋治兵衛与申方江讓渡申度、尤治兵衛^も譲り請申度奉存候付、乍恐右之段奉願上候、何卒御憐愍を以、右願之通御聞濟被成下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

譲り主

木下町

嘉永二年

茂助○

西十月

買主

嶋屋治兵衛○

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

一、私義所持仕居候沽券狀紛失仕候二付、吟味仕候得共相分不申、等閑

之段奉恐入候、右二付新沽券御願申上候処御聞濟被成下、御割印沽券狀御下ケ二相成難有奉存候、然ル上者、右紛失仕候古沽券狀外方^方出候共可為反古候、依之、乍恐一札奉差上候、以上、

木下町

嘉永二歳

茂助○

西十月

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○
町代

小兵衛○

一、私義、此度持借家沽券狀為致紛失候付、預御憐愍願之通御聞濟被成下難有仕合奉存候、然ル処、居宅沽券狀とも虫付二相成難相用御坐候付、本家借家共沽券狀式軒役壹通二御認替被成下候様奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

木下町

嘉永二年

願主茂助○

酉十月

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

一、来ル晦日、例年之通正四ツ時御神前湯花差上申候、乍恐此段以書附御届奉申上候、以上、

木下

酉十月

馬杉信濃○

一、来ル十月晦日、例年之通御火焼相勤申候二付、尤四ツ時湯花差上申候、乍恐此段御届奉申上候、已上、

八大龍王宮神主

小西大和○

一、例年之通、来ル朔日御火焼二付、御湯花差上申度、此段御届奉申上候、以上、

膳所社神主

初田和泉○

酉十月

一、十一月十八日、田端山王

御火焼

一、十一月朔日、牛頭天王

御火焼

右之通御湯献備執行仕度奉存候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

神主

十月

堀池主馬○

右四社共御聞届、大目付へ案内、

廿七日 晴、昼後雪 代右野右衛門

一、十一月十五日、若宮八幡宮御火焼御湯

一、同十九日、神尾大明神御火焼

一、同廿五日、天満宮御火焼

右例年之通執行仕候間、此段御届奉申上候、以上、

神主

嘉永二年

齋藤筑前○

酉十月

一、十一月八日、稻荷大明神

御火焼

一、同廿五日、天満宮

御火焼

右例年之通執行仕候間、此段奉申上候、以上、

十月

齋藤筑前○

右二社御聞届、大目付へ案内、

一、私相続人之義、先達而御願奉申上候処、御聞濟被成下難有奉存候、

然ル処、右養子部義不熟二付、無拠此度不縁仕候、此段御聞届被成

下候様奉願上候、右社用向之義者同家筑前方へ被仰付被下候様奉願

上候、已上、

嘉永二年

齋藤石見○

酉十月

齋藤筑前○

廿九日申上候、御聞届、

一、私所持之沽券狀大切二所持仕候処、何レ江紛失仕候哉、色々吟味仕候得共、行方相分不申候、等閑之段奉恐入候得共、何卒此度新沽券狀御割印頂戴仕度此段奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕

合奉存候、以上、

西十月

船町願主

五兵衛○

組頭

平三郎○

清八○

一、今晚紺屋町長兵衛宅二而稽古浄瑠璃いたし候段届、見廻り同心申付ル、

廿八日 晴 徳右衛門

一、中浜田町小間物屋善七会所留二相成候段、庄屋新左衛門届出、

(袋綴内挿入文書)
一札之事

一、当村二積立講有之、其御町内樽屋五兵衛殿加入被致候二付、右講錢之内御同人江沽券状引宛ヲ以貸附申候、然ル処、此度満会相濟候付、預り置候沽券状御返納可申処、何レ江紛失仕候哉相知不申、何共申分無御座次第恐入候、依之、新規沽券状御判御願御聞届二相成候上者、下地沽券状何レ出候共可為反古、右二付聊故障出来為致申間敷候、為其村役人共何レも連印ヲ以、為後日証文一札仍而如件、

嘉永二己酉

本人

十月

廿九日 晴 藤助

一、宮町勘兵衛会所留二相成候段、同所届出、

但し御徒目付も案内有之、二人共、

一、十一月從十四日廿日迄、例年之通永代経執行仕度、此段御届申上候、

以上、

嘉永二年

専光寺○

西十月

客僧中野村常念寺十三日客僧差支有之、延引断申届、御序大

目付へも達ス、御聞濟、大目付へ案内、

一、鮎屋徳兵衛、坂元屋江出金九月晦日切之処、未相渡不申等閑二付、当月晦日限相渡可申旨町役へ達ス、

晦日 雨 卯三郎

一、私儀当酉年方格別之以御憐愍、瓦ヶ浜御魼請負被為 仰付被下、以御蔭渡世相続仕難有仕合二奉存候、然ル処、近年諸方竹払底二而直段も高直二相成候而入用も相嵩候得共、是非買入仕候半而ハ、難打立精々買入申候、然ル二御魼御年限も最早来戌年限二御座候得者、御差免も可被為仰付候乍恐奉存候、左様候而ハ難渋ヲ以甚以当惑仕候儀二付、何共重々奉恐入候儀二御坐候得共、来々亥年方向卯年迄五ヶ年之間、是迄通請負被為仰付被下、此段偏奉願上候、何卒格別之以御憐愍御聞濟被成下候ハ、永続之基与存、広太之御慈悲冥加至極難有仕合二可奉存候、以上、

嘉永二酉年

田中屋茂兵衛○

十一月

町代

小兵衛○

十一月中

朔日 右野右衛門

一、当村二積立講有之、其御町内樽屋五兵衛殿加入被致候二付、右講錢之内御同人江沽券状引宛ヲ以貸附申候、然ル処、此度満会相濟候二付、預り置候沽券状御返納可申処、何レ江紛失仕候哉相知不申、何共申

分無御座次第恐入候、依之新規沽券状御判御願御聞届二相成候上者、下地沽券状何レも出候共可為反古、右二付聊故障出来為致申間敷候、為其村役人共何レも連印ヲ以、為後日証文一札仍而如件、

嘉永二己酉

十月

講元馬場村

鍵屋久兵衛○

世話方

塩屋善兵衛○

七右衛門○

五人組

清助○

平左衛門○

庄屋

七右衛門○

船町

御役人衆中

但し右証札者写し戻ス、

一、馬場村清蔵講取結二付、右会席西ノ庄法傳寺借呉候様申聞候付、貸申度旨届出承届、

一、船町町代五兵衛叱追込申渡、裁許帳二記、

二日 曇 元次

一、鮎屋徳兵衛方坂本屋九右衛門江九月晦日三百目、当暮三百目出銀可致対談相済、役所江請書差出有之候処、九月晦日限り之三百目^(貼紙)二一
月延引二相成有之候、当月晦日限是非「役所江持参候様申達置候処、晦日晚迄持参不致、猶又朔日早々持参可致旨申遣候処、朔日銀貳百目持参、跡百目者当月廿日迄猶予之義、坂本や江申呉候様申聞候得共、右者其方坂本屋へ対談いたし承知二候得者、坂本屋九右衛門方延し遣候段届可出、役所方坂本屋江延し候義不申渡候段徳兵衛江申渡候、然ル処、九右衛門罷出百目之処、廿日迄待呉候様段々清兵衛相頼候付、

承知之返答いたし候趣届ル、預り置候貳百目、先役所二預り置呉候様九右衛門申聞ル、

一、御者頭金丸屋弥三郎江預ケ有之候処、右弥三郎家出いたし候付、大須賀町内へ形二取候道具売払、右代之内金五両出金之約束二而当役所へ持参二付、御者頭伊藤弥一郎江相渡、十一月三日右受取書御者頭月番鈴木為次方受取、役所二有之、大須賀町弥三郎道具売払候ハ、出金可致段証文御者頭中江差出置候、右出金相済候付、差出し置候証札下ケ呉候様申聞、御者頭へ談証札受取、大須賀町へ戻ス、

三日 曇、小雪 徳右衛門

四日 晴 藤助

五日 晴 卯三郎

六日 晴 右野右衛門

七日 晴 代藤助

一、私義大津馬場村積立講二加入仕居候二付、右講錢之内借用いたし、為引宛家屋敷沽券状差入置候、然ル処、此度満会相済候二付、預ケ置候沽券状取戻し可申之処、先方二而何レ江紛失仕候哉相知レ不申候趣、段々断申聞候、依之無抛新規沽券状御割判頂戴仕度奉願上候処、御聞届被成下候上者、下地沽券状外方出候共可為反古旨、馬場村役人共連印一札取置申候、仍而乍恐猶又一札奉差上候、以上、

船町

乍町代

嘉永二己

西十一月

樽屋五兵衛○

組頭

平三郎○

清八○

一、中大手前丸屋弥三郎家屋敷沽券、同人大津銭屋彦兵衛方へ借財引宛二差入置、其俣弥三郎家出致候、然ル処、右家屋敷二付織田章助

住居之節、御上^方金拾三兩貳步直下切共なく拝借共なく出候而、御上家之趣二相見来り候、彦兵衛義者右之次第ハ不存、形二取置候趣、尤章助次二住宅いたし候、弥助義も自分二五百匁計出金いたし候趣二も相聞候、左候へハ家代不殘御上^方出候と申訳二も無之、章助住宅之節自分金不足二付、右不足分 御上^方出候事哉、何レ共慥二相分不申候、然ル処、御上屋敷二候得者、沽券状ハ渡し無之筈二被存候、此度右家屋敷彦兵衛持二相成候付而ハ、沽券改相願可申様子、御上屋敷二候得者、下地沽券状取上可申、又矢張沽券状持度候得者、以前御上^方出候拾三兩少々御減少被下、上納為致可申哉、何レ可然哉、御評議被下候様御中老九郎三郎殿へ御内談申上候処、御評議之上右等之訳合も不存引宛二取置候沽券状二付、上納為致候義も何とか不都合二有之、御席思召二者右之拾三兩者章助へ被下候二極候得者、彦兵衛^方上納不及、現在拾三兩何某^カ出有之候事故、御上家と申事と被存候、又自分二も譲り渡之節出金いたし^居_{来り}候得者、全御上家共難申訳合二可有之哉、乍然御勝手方二而以前御金出有之候付、是非上納無之時ハ、家屋敷向之物二ハ不相成と申事二候哉、一応御勝手へ談し候様御沙汰二付、五日御元^メ助九郎右衛門江談候処、猶相談之上返答可致由二而、則今日右返答御勝手方二而も取調候得共、余程年数も相立如何之事二而出候哉慥ならず、乍去拝借等之廉ハ無之、左候へハ是迄弥三郎居候内二も少々宛成共上納之道附有之筈、右者相見不申、左候へハ章助江被下切々相成御事と相見候、今更彦兵衛^方上納不致候半而ハ、家屋敷渡ス間敷との義者無之由、何レ共都合次第取計候而可然由返答二付、右之趣九郎三郎殿ヲ以申上候処、御勝手二において右之通二候へハ、御席二思召者無之、以来者外町家同様二而御上家之義者無之^旨流レ二相成候、右二付御取次所も有之、右守り并右地面之役御上^方不被成候付、入用之節者右御取

次所も内借可相成、其替り二右地面之役掛りも相勤可申候様御沙汰有之候、

一、明後九日髪結^老人、四ツ時郡方役所江差出呉候様申来ル、

八日 晴 代 卯三郎

九日 晴 代 右野右衛門

一、船町樽屋五兵衛沽券状判願聞届、印形渡、

十日 晴 藤助

十一日 晴 代 元次

十二日 晴、夕小雨 代 卯三郎

十三日 晴 徳右衛門

十四日 晴 藤助

十五日 晴 代 徳右衛門

十六日 晴 代 元次

十七日 晴 右野右衛門

一、勢田口北小堀万石懸浚被仰付候、右二付先例之通茶わりし、耆人日々差出候様御達有之、申達ス、

一、伊七屋町大文字屋持地面為地改、右野右衛門、藤助、

一、西ノ庄宮神主心得方不宜趣相聞、役所異見、

一、夜八「^{貼紙}ツ時前京都」出火之由二而、早鐘拍子木相聞、早速同心寄場へ召出、我等引続罷出、二条烏丸辺出火、未消火不致候趣、御人数押出し有之、

先駈 御者頭 水奉行

水野権六郎 鈴木為次 山元左門

大目付 御番頭

鈴木半右衛門 多田三八郎 水奉行

先駈 御者頭 御中小性

杉中晴太郎 浅岡達弥

御家老

御先使

村松猪右衛門

本多紋三郎

一、右押出し有之、未消火注進不参二付、三番手御人数押出可有之用意いたし候様、夫々達有之候、然ル処、無程消火注進來り、三番手御押出無之、一番手大津札之辻辺迄押出注進二出合候趣、

十八日 晴 徳右衛門

一、私義先年の神職仕、御蔭ヲ以段々相続仕難有仕合奉存候、然ル処、此度心得違之義二而社内二畑ヲ仕付、且又藪竹ニ手荒シ仕、湖辺ニ鱧筒ヲ取扱候義被達御耳奉恐入候、然ル上者、以来右ヶ条之義ハ不及申、万端急度相愼神職仕候、若相背候義御座候ハ、如何様之曲事ニも可被仰付候、為後日一札奉差上候、以上、

嘉永二年

神主

小西大和○

西十一月

庄屋

小西藤吉○

十九日 雨 藤助

一、太兵衛牢飯料三拾九匁、切手受取、藤助へ渡ス、

廿日 晴 卯三郎

一、町内山形屋新蔵居宅及破損住居難出来相成申候付、此度古木相用家作仕度奉存候、乍恐此段奉願上候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞済被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

新蔵○

町代

万左衛門○

十一月

一、牛頭天王江御寄附被成下候金拾両、此節頂戴仕度奉存候間、何卒御取扱被成下候様奉願上候、以上、

中庄村

西十一月十九日

庄屋○

廿一日 押切出ス

一、魚屋町六兵衛居宅破損二付取続中、表囲付候段届、大目付へ案内、

廿一日 晴 右野右衛門

一、柳屋喜兵衛跡古道具類、廿三日の五夜之間夜市致候段届出、大目付へ案内、

一、私預り居候一文字屋喜兵衛家、間口三間式尺五寸之処、私持地建物共之間三尺五寸、都合五間壹軒役付、此度勝手二付町内八百屋^{半兵衛}江代銀壹貫六百目二而譲り申度、尤半兵衛も譲り請申度奉願上候、右二付沽券私持分四間三尺三寸二、右式通共御認替被成下候様、是又乍恐奉願上候、右願之通御聞済被成下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

譲り主

嘉永二己酉年

大文字屋久助○

十一月

請主

八百屋半兵衛○

町代

喜助○

廿二日 晴 元次

右沽券状判形相渡ス、

廿三日 曇 徳右衛門

一、郡方手壺人、盜賊方手壺人、五ツ半時の評定所二において集評有之候、一決不相成候事、

一、郡方手今日擲払有之、立会出ル、

廿四日 晴 藤助

一、去申年丸屋弥三郎義、御家中様御飯米多分御預申居、不残売払其俣

家出仕候二付、御飯米御手支二相成御難渋之趣、弥三郎弟卯八江段々御引合被成下候得共、差当り償方も無御座、色々心配仕候義二御座候、然ル処、弥三郎在宿中二仕送り御取替申上候引宛御手形御預申居候付、右引宛ヲ以御米拝借御願申上呉候様卯八申聞、成程御手形有之候得者慥成義、且御家中様御飯米当分御凌二も相成候事故、右引宛御手形ヲ以拝借御願申上候処、段々御調之上、慥二引宛有之候得者可被仰付、右引宛ヲ以則貳百俵拝借被仰付候、然ル処、右預り置候御手形米無拠訳柄ヲ以段々御引合有之、申年百三拾五俵慥二入米相成候付、貳百俵拝借被仰付被下候内、六拾五俵ハ直様上納仕、米三拾五俵ヲ以御飯米御預り口へ御割渡し申上候由、昨冬右俵数上納可仕候処、冬ニ至り又候御手形不足二相成不得止事、御勝手御役所様江御断申上候処、不足之分来酉年上納可仕旨被仰付候付、当暮皆上納可仕筈之処、御中小性様之内御出米難被成御渡も無之、段々御願申上候得者、右小頭様御渡不被成候趣、左候而者御返上納難出来甚当惑仕候、依之何卒右之段御賢察被成下、可相成御取扱被下置候様奉願上候、已上、

酉十一月

藤屋文助○

升屋礖五郎○

廿五日 晴

卯三郎

廿六日 晴

右野右衛門

廿七日 晴

徳右衛門

一、当村糺屋七兵衛義南都 紀伊様御名目銀拝借上納方未埒二付、去八月出訴二相成、無拠村方江引請拝借御願奉申上候処、御下ケ銀被成下、難有御蔭を以濟方仕、七兵衛家屋敷建物諸道具酒造道具一式為書入、先月預之証文を取置候得共埒明不申、段々引合詰候処、銀子借入可仕候間、当月廿日迄之猶予頼候二付、承知いたし遣、右日限相

過候付、尚又嚴敷引合候処、不法を申掛、迎も私共取立候義難出来、最早上納日限二相成延引仕候而者奉恐入、甚心配仕候二付御願奉申上候、則入用銀高書証文写奉入御高覧候間、宜御願奉申上候、以上、

酉十一月

惣代

宗次郎○

組頭

庄七○

同

三郎兵衛○

肝煎

庄左衛門○

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

覚

一、銀七貫目、右ハ去ル九月拝借銀二御座候、

一、同壹貫目、右利足諸雜用二御座候、

一、米三拾石余、御未進代銀三貫目計り

一、銀四貫目

入御座候、

右ハ先御鯰仲間南都紀伊様御名目拝借之内、分借引当二居宅之沽券状差

一、金貳拾壹兩壹步

右ハ酒造印札質入二而借用殘金入用高二御座候、

×拾六貫三百目余

外二

一、銀五貫五百目計

右御役所御講掛戻し、尤村持二御座候得共、壹人二而持来り候、

一、銀四貫目計 御勝手方拝借年賦銀二御座候、

×右之通二御座候、

証文写

一、銀七貫目也、

右者此度南都 紀伊^キ様御銀村方江御引受濟方被成下忝仕合奉存候、

然ル上者来月晦日迄二右銀子調達可申候、右二付私家屋敷酒造道具一式并諸道具不殘御任申候間、右日限相過候ハ、御勝手二御差配可被下候、乍併郡方御講掛戻し銀、御勝手方拝借年賦銀、酒造印札二而借用金銭、右口々御引請被下濟方可被下候、右様二相成候ハ、聊申分無御座候、何時二而も立退御渡可申候、為後日証文仍而如件、

嘉永二年

糎屋七兵衛

酉九月

庄屋御役人中

右願書郡方^ル相廻ル、

廿八日 晴 藤助

廿九日 晴 卯三郎

十二月中

朔日 晴 右野右衛門

一、私義忤長兵衛、此度多病二付養生為致候間、暫私再勤仕度候段奉願上候、右願之通御聞濟被為下候得者難有仕合二奉存候、以上、

願主

西十一月

庄兵衛○

組頭

清兵衛○

町代

市兵衛○

二日 晴 徳右衛門

一、私義、是迄町代役年来親共^ル無調法者二結講被為 仰付難有仕合二御礼奉申上候、何共奉恐入候得共、親共も追々及老躰候処、御蔭ヲ以商売もセ話敷多用二相暮申候二付、御用向も行届不申候而者、何

共恐入候儀二御座候間、退役之義御願奉申上候、何卒格別之御憐愍を以、右願之通御聞濟被為成下候得者、莫太之御恩重々難有仕合奉存候、以上、

願主

町代

嘉永二己酉年

喜助○

組頭惣代

新四郎○

三日 雪 藤助

一、右町代替り本屋彦兵衛申付候義相同候処、思召無之段御沙汰有之、

四日 晴 卯三郎

本屋彦兵衛

右町代役申付候、

十二月

但し組頭付添役所二において申渡、

一、柏屋喜助町代退役願之通承届申渡、

右親^{アキマ} 忤後見相勤、大義之段申渡、

五日 晴 右野右衛門

一、右彦兵衛御礼請之、

一、米三俵 八百屋半兵衛

一、鳥目三貫文 石田屋藤吉

右当年御献上松茸上納、格別骨折候付被下置候、

六日 晴 元次

一、当村妙福寺借家ふき与申者方へ、去四日夜裏之戸をこち明盜賊入込候様子二付、家内吟味仕候処、左之品書之通相失申候間、乍恐此段御届奉申上候、尤妙福寺所持之品二御座候、

一、黒縮緬衣 壹ツ 一、せんまい織綿入 壹ツ

一、木綿水浅黄古裕 壹ツ 一、浅黄木綿襦袢 壹ツ
但し袖かいき絹

一、黒ちりめんほうろく頭巾壹ツ 一、浅黄木綿糸り巻 壹ツ

一、古足袋 壹足 一、木綿小風呂敷 壹ツ

一、布米袋 壹ツ 一、錢四百文

×十品、右之通相失申候、以上、

十二月六日 妙福寺○

庄屋

堀池又三郎○

七日 晴 徳右衛門

一、先達而中庄牛頭天王社壇再建二付、金三拾兩三ヶ年二御寄附之内、
当年分拾兩請取、当番へ渡入、

八日 晴 藤助

九日 晴 卯三郎

一、私義先年茶商売仕渡世罷在候処、近來時節悪敷候二付、茶商売計
二而者過兼候間、片商売二郷宿仕度奉存候、左候へハ相応之利益も
御座候趣被申呉候仁も有之候之間、此度諸色格別下直二仕候而、右
郷宿仕度候之間御聞届被成下候様奉願上候、右願之通御聞済被成下
候ハ、難有仕合二奉存候、以上、

膳所村

嘉永貳年 粉屋源助○

西十二月

庄屋

竹内新左衛門○

十日 晴 右野右衛門

十一日 晴 元次

十二日 雨 徳右衛門

一、昨日大目付中ハ被申聞候ハ、先魴方連中南都名目銀拝借いたし候

処、内糶屋七兵衛、丸屋弥兵衛分借出金不致付、出銀相納候者共者
判拔不申候二付、同様一統二御呼出候にも可相成様子二相聞候、出
銀いたし候者も同様二呼出され候義ハ何共迷惑二も可有之、且七兵
衛、弥兵衛兩人ハ出銀いたし候得者、小勢二而事済候へ共、出銀之
者迄も呼出され候へハ、附添人掛大分之多人数二相成、一統困窮之
上雜費も相懸り候事、右兩人出金無之故二大勢呼出し二相成候義者、
如何二しても不実成仕方二相聞候、右等之趣ヲ以理解申様可然旨被
申聞、則今日山形屋岩太郎、鮎屋徳兵衛、丸屋弥兵衛、糶屋七兵衛、
升屋礒五郎呼出し理解申渡、弥兵衛分出候得者、七兵衛義ハ道具売
払利足丈二而も調達可致旨、弥兵衛義者浅井や源兵衛後見、万事任
セ有之候事二而返答難出来、源兵衛呼寄候様申達入、

一、当村糶屋七兵衛義、南都 紀伊様御名目銀拝借上納方未埒二付、去
ル八月出訴二相成、無抛村方引請拝借御願奉申上候処、御下ケ銀被
成下難有御蔭を以濟方仕、七兵衛ハ家屋敷建物諸道具酒造道具一式
為書入、先月限之証文を取置候得共埒明不申、段々引合詰候処、銀
子借り入可仕候間、当月廿日迄之猶予頼候付、承知いたし遣、右日
限相過候付、猶又嚴敷引合候処、不法ヲ申掛、逆も私共ハ取置候義
難出来、最早上納日限二相成延引仕候而ハ奉恐入、甚心配仕候付御
願奉申上候、則入用銀高書証文写奉入御高覧候間、宜御願奉申上候、
以上、

惣代

西十一月

宗次郎○

組頭

庄七○

三郎兵衛○

肝煎

庄左衛門○

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

覺

一、銀七貫目

右者去ル九月拝借銀二御座候、

一、同壹貫目、右利足諸雜用二御座候、

一、米三拾石余、御未進代三貫目計

一、銀四貫目

右者先御魰方仲真方南都 紀伊様御名目銀拝借之内、分借引当二居室之沽券状差入二相成御座候、

一、金貳拾壹兩三步

右者酒造印札質入二而借用金殘金入用高二御座候、

✕拾六貫三百目余

外二

一、銀五貫五百目計

右御役所御講掛戻し、尤村持二御座候得共壹人二而持參、

一、銀四貫目計

御勝手方拝借年賦銀二御座候、

✕右之通二御座候、

証文写

一、銀七貫目也

右者此度南都 紀伊様御銀村方江御引請濟方被成下忝仕合奉存候、然ル上者来月晦日迄二右銀子調達可申候、右二付私家屋敷酒道具一式并諸道具不殘御任申候間、右日限相過候ハ、御勝手二御差配可被下候、乍併郡方御講掛戻し銀御勝手方拝借年賦銀、酒造印札二而借用金殘、右口々御引受被下濟方可被下候、右様二相成候ハ、聊

申分無御坐候、何時二而も立退御渡可申候、為後日証文仍而如件、

嘉永二年霜月

糺屋七兵衛

庄屋御役人中

一、右願書郡方相廻り、今日七兵衛、村役人共呼出し、双方理解申渡、七兵衛申候者、此度入用八貫目丈、不用之道具并建物売払出金致候付、其外ハ待呉候様村方へ相頼候得共、承知無之旨村方是迄猶予もいたし遣、最早差詰り猶予出来不申候趣七兵衛申聞、前申上候も私壹人二而取極之義二而も無之、親類共打寄相談之上之義二付、今一応親類へ相談之上^カ為^カ□□ハ証札□可致御返答も出来難キ由、左候ハ、今晚親とも相談いたし出金之義定出来候ハ、格別出金無之相談ハ出来申間敷二付、金子持出又相談不相成候ハ、証文通諸色相可申、尤明朝約束通家屋敷諸色共相渡可申候旨申渡、

一、^マ十三日 晴 藤助

一、糺屋七兵衛今朝役所へ罷出、昨夜方親類共呼集相談仕居候、大津親類之者呼二遣候へとも今二参り不申、此者江出金相頼候付、暫御猶豫之義願出候得共、其方壹分二而ハ承不届、村役ヲ以猶予断可申出旨申聞ル、

一、右引続村役人共、七兵衛親類、昨夜相談有之候処、宜勘弁も無之、弥渡し候段樽屋新九郎ヲ以庄屋新左衛門方へ申出候、右二付家屋其約束通今朝請取候段届、

一、当村掃除場新堀御枅形二、年比廿四才計成男非人躰之者行倒病死仕候付、村役人立合得と相改申候処、相身二疵等も無御座、全非人病死二相違無御坐候、着用物之義者古単物壹ツ、菰苞壹枚、古碗壹ツ、右之外所持之品無御座候二付、岡山へ土埋二仕度奉存候付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

肝煎

酉十二月

与惣兵衛○

十四日 晴 卯三郎

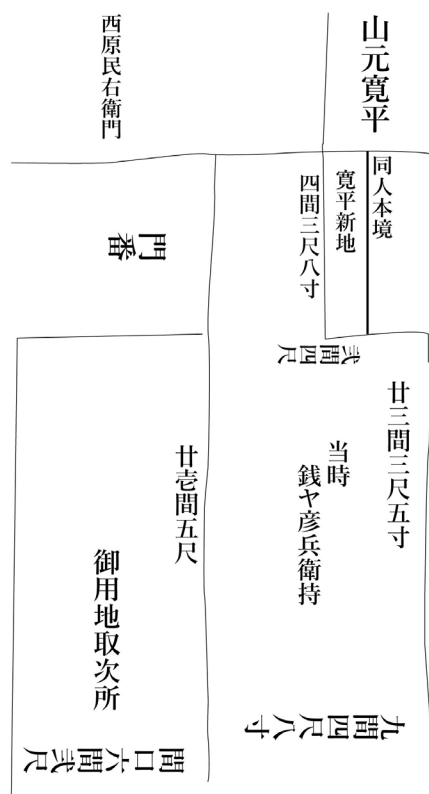
(マ)
十五日 晴 右野右衛門

- 一、大津本陣、百艘、問屋、例年被下物請取、
- 一、八百屋半兵衛、石田屋藤吉半飯被下受取、
- 一、稻荷社御渡被下受取、

一、先達而中大手前丸屋弥三郎家中奥、御上家二相成候趣先記二相見、
右子細者木屋政右衛門住宅跡江織田章助住居二相成、其節章助へ拾
三両貳步御上^方出、木政へ家代相済候趣、右御上^方出候金子^{貼紙}拝借共
之届共無之、右家御上へ御買上^ケ二相成候様之振二相見候、「右章助
跡」へ丸屋弥助住居続、忝弥三郎住居同人^方沽券大津錢屋彦兵衛^方
へ「引宛」二入置、其^{貼紙}出奔いたし候付、右家者兩彦之物二相成有
之候、先達而掛合早々住居人拵候様理解申聞候処、未^レ切二相成有
之候、然ル^レ処、此度右家裏手山元寛平^方願書差出候付、願通右^地弥
三郎地面之内寛平へ可被下哉二候得共、兩彦持居候沽券地二候得者、
右地面減候而ハ迷惑筋可申立哉、他所之者之義二付、余り無理成義
被致間敷御中老^方御談二付、元来右家ハ町家二候得共、章助買得之
節御上^方拾三兩御出有之候故、御上家之振二相成候事と相見へ候、
然ル時者右拾三兩貳步御上納為致候得者、一通り町家自分物二相成
候訳合二付、右金子御冥加上納為致、町家二相成候而ハ如何御座可
有哉、御相談申候処、御評義之上御席思召二ハ一通り町家之積二而
沽券取置候処へ出金之義申候ハ、不都合ニも可有之、右ハ章助へ
被下候とすれハ兩彦^方上納二ハ不及義、乍併御勝手方二而ハ右金子
出有之付而ハ、家ハ御上納、又家ヲ渡切二相成候へハ、金子上納致
さねハならぬと申候か、一応御勝手方へ内談いたし候様御沙汰二付、
御元^メ助重様、九郎右衛門江談候処、一統相談之上、右ハ睨^といた

し候義も不相分、又拝借と申義も無之、右之次第二候得共、少々成
共是迄二上納之道付有之害無其儀も候付、差支之義も無之、何レ共
都合次第二取計候而、可然由被申聞、其段御中老中江御返答申上候
処、一応兩彦江引合格別迷惑共不申候ハ、宜敷由、左候ハ、右御家
之義家代出有之故之事、右ハ流レ二相成、以来町家二被下、御取所
ハ御上普請右外囲共、其外右役ハ御上^方不被成、家附掃除等内外共
同断御使者之間明有之節、自入用有之節ハ借り候而も不苦、又右立
物裏空地も物干場野菜物抔作り候義ハ不苦、若土蔵抔御用地二立候
義ハ勝手^尽二ハ不相成、其節ハ別段願書可差出、御聞濟之上取計可
有之地なり二而遣候義ハ不苦候、地面減り候替り二家自分物二相成
候段彦兵衛手代芳兵衛へ申聞候処、右御替り御取扱被下候上者、何
之存寄も無御座義二ハ御座候得共、引取一応申聞候上御返答申上候
由申聞、後日大須賀町代久助へ催足申遣候^處、御返事参り候筈之
処、取込居候付不罷出旨趣断二而被仰下候通奉畏候、何之存寄も無
御座候由返答、右御中老江申上、

(図面)



右絵図面御覧入候処、右寛平増地坪数算当御勘定奉行へ御達し有之、御談候様御沙汰有之候、

一、古魼請負之者共、南都名目拝借濟方いたし候様申達候付、大津浅井や源兵衛呼二遣置候処腹痛之趣、此間を断申越、^(漸カ)斬今日参り早々相談濟方いたし候様理解申渡、

一、山元寛平支配頭へ内願書取写、私屋敷地面東南之角二而、凡拾坪余之処當時明家、元丸屋弥三郎構内二入込二相成有之候、右地面者元来御家中屋敷尻之地面二而、先年中村新五郎屋敷内二御座候処、享保三戌年正月新五郎居宅類焼後、右屋敷跡一円火除地二被仰付、尤右地面御入用二も無御座候付、町家境之所二而表幅三間半余二、裏行四間三尺五寸之場所、其比在住罷在候川屋彦次江被下置、則只今二至町家地面二相成有之候、其余相残り候分も年貢附御預被仰付、其後右空地私屋敷地二被下置候得共、彦次江被下二相成候御地面之分ハ、先其俣被差置候、右之通二而前顯十坪余之場所者、前々右町家二持来り候地面二而も無御坐、中古以来御入用無之故、御家中地之内ヲ御分ケ被下候事二承及申候、然ル処、當時私屋敷手狭二付、何卒御差支二も相成不申儀二御座候ハ、以前之通御直し被仰付、私屋敷地面内江御増被下置候之様仕度、此段御手前様迄御内々奉願候、不苦候儀二御座候ハ、宜敷御取扱被成下候様奉頼存候、以上、

十一月

山元寛平

三松助左衛門殿

十六日 晴 元次

一、浅井屋源兵衛義、魼連中寄合之義通達いたし候処、留守二而寄合不申、一統御呼出し対談いたし候様被仰付被下候様申出候、然ル処、安之助昨朝を出京候趣、今晚二ハ引取可申由、猶又引取之程も不相知候ハ、呼二遣候様申達ス、

一、木下晒屋長三郎義名目拝借有之、取立催促南都を参候趣、右家沽券も京都へ引宛二入有之候趣、右家へ売札差出、先長三郎義者家出之振二いたし候趣町代届、

十七日 晴 徳右衛門

町奉行江

八百屋

一、鳥目五百文

半兵衛

右 寿明君様御下向之節、葭御買入二相成候処、格別骨折候付被下置候、

一、酒貳升

三星屋

次郎兵衛

右同断之節、火鉢御借入二相成候付被下置候、

大工

一、鳥目三百文

市兵衛

右同断之節、草津御本陣、鳥井川御小休所、新田御茶屋場御普請向、格別骨折候付被下置候、

山形屋

一、銀壹両宛

長三郎

坂本屋

九右衛門

右同断之節、御用向出情^(精)いたし候付被下置候、

十二月

樽屋

新九郎

右同断之節、御用被 仰付候付、上り物いたし候段達御聞、役場限賞美可申渡旨御達有之、

十八日 雨 藤助

一、当村方百姓新助義、御年貢米不納仕候付、村役共打寄嚴敷申聞候得共、何分難渋之趣申候二付、村役共相談之上、今十八日無拠付立申候、依之年恐御届奉申上候、以上、

嘉永二年

西十二月

肝煎

茂兵衛○

同

繁八○

庄屋

田中与次兵衛○

一、私親類木下村手伝市兵衛跡相続人無御座候付、網町惣兵衛末男、八百屋半兵衛媒を以養子貰申度、此段奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永貳年

酉十一月

木下村市兵衛親類惣代
下浜田町

八百屋弥助○

庄屋

中西又次郎○

一、私末男、此度木下村市兵衛方八百屋半兵衛媒を以養子二差遣申度、乍恐此段奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永二年

酉十一月

網町

惣兵衛○

町代

市兵衛○

一、私親類木下村手伝市兵衛跡養子市藏義、未幼年二御座候付市兵衛下方二召仕居候、魚屋町与惣次郎と申者後見ヲ以相続仕度奉存候、乍恐御用向等是迄之通被為 仰付被下置候様奉願上候、何卒右願之通

御憐愍ヲ以、御聞濟被為成下候者一統難有仕合奉存候、已上、

嘉永二年

西十二月

木下村手伝

市藏

親類惣代

八百屋弥助○

手伝方

靄之助○

年番

喜助○

右三願書之趣御中老中へ伺候処、思召無之旨御沙汰、

一、御城下宮町小間物屋太兵衛義、当六月從御町奉行様御役庁二御取留被為置候段、親類共奉恐入候、然ル処、中野村太兵衛実父当年八拾六才二罷成候、此程太兵衛一条委く承り深ク相歎キ日夜落涙仕、寢食を忘れ行歩不自由之中役元へ参り、存命中二一度太兵衛二対面仕度候得者、何卒御侘之出願被成下、老後之願為叶被下候様、日々来り被頼甚氣之毒二被存、難默止候得ハ、此度老父之悲歎御憐察之上奉蒙御赦免、太兵衛義村方へ御預ケ被為成下候ハ、村内二一室ヲ拵込置、村方之見廻りハ不申及、兄仁右衛門并親類共へも別段為申聞、日夜不怠氣ヲ為付可申、万々一此上不束之事共有之候ハ、村方并太兵衛親類いか様二被為仰付候共違背不仕心中二御座候付、不顧恐奉願上候、何卒右願之通、以御慈悲御聞濟被成下候ハ、村方一統難有仕合奉存候、以上、

中野村

願主兄

仁 右衛門○

親類惣代

喜兵衛○

年寄

文右衛門○

庄屋

佐右衛門○

御代官

元持治郎右衛門○

右大目付へ談之上伺候処、堅固ニいたしセ話いたし候儀ニ候へハ思召無之、下ヶ遣候様御沙汰、委廿五日記、

十九日 雪 卯三郎

一、高嶋米式俵

米屋善兵衛

右御勝手方御用向格別骨折候付被下置候、

一、高嶋米三俵

柴屋庄助

右御掛屋御用骨折相勤候付被下置候、

一、金百疋

本屋彦兵衛

一、鳥目三百文ツ、

山形屋岩太郎

右待合宿相勤候付被下置候、

一、鳥目三貫文

床之者江

一、同五百文

歩行□者江

右之通被下候、

一、同八百文

床之者江

右当秋 寿明君様御通輿之節、同心付添夜廻り等骨折候付被下之、

一、鳥目貳貫文

水揚御蔵付

四人

右当夏御蔵日覆并取片付骨折候付被下置候、

一、同五百文

水揚共江

右村戻し米印付候付被下置候、

一、鳥目五百文

大須賀町

右当春 上使并当秋 寿明君様御通輿之節、待合宿相勤候付被下置候、

一、鳥目壹貫文

膳所村庄屋

右為筆墨紙料被下置候、

廿日 雪 晴 右野右衛門

一、私居屋敷浦御堀端石垣之義、近年大洪水ニ而大破損ニ相成、此度石積直し仕度奉存候、且又私物入之義是又大破ニ相成候間、右石垣壹はいニ建直し仕度奉存候、右之段御願奉申上候、何卒御憐愍ヲ以願之通御聞濟被為成下候得者難有仕合奉存候、以上、

西十二月

柴屋利兵衛○

町代

廿七日右御堀奉行へ存寄承候上申上、御聞濟、御普請奉行へ

彦兵衛○

も案内申置、

一、私妻之義、先年高嶋郡十八川村菊屋庄兵衛娘貰置候処、不熟ニ付此度双方納得之上不縁仕候、此段御届奉申上候、右御憐愍ヲ以、御聞濟被成下候得者難有仕合奉存候、以上、

西十二月

柴屋庄兵衛○

町代

聞濟、申渡

彦兵衛○

一、町内弥三郎義、此度西ノ庄村為蔵セ話を以、同村傳七倅二男市之助と申者養子二貫申度此段奉願上候、何卒御慈悲を以、右願之通御聞濟被為成下候得者難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永二西十二月

弥三郎○

セ話人

為蔵○

町代

市兵衛○

聞濟、申渡

一、当村傳七忤市之助与申者、此度同村為蔵世話を以て、網町弥三郎方へ養子ニ差遣申度奉願上候、何卒御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

酉十二月

願主

傳七

セ話人

為蔵

肝煎

与惣兵衛

庄屋

小西藤吉

聞濟、申渡、

一、古魴請負共磯五郎、徳兵衛、岩太郎、七兵衛、弥兵衛、浅井や源兵衛呼出、急々南都名目埒方対談いたし候様理解申渡、下対談を丸屋弥兵衛分年内ニ調立いたし出銀之請書取一統を差出、

一、弥兵衛右同様受書差出、

廿一日 晴 元次

竹内新左衛門

右曾祖父以来数年来町雇骨折相勤候付、五節句神事之外非常之節帶刀御免被仰付候、

廿二日 曇 徳右衛門

一、例年之通禁酒有之、夫々達入、

廿三日 晴 藤助

一、私儀先年水上小頭役蒙仰、以御蔭兎茂角も相勤来り難有仕合奉存候、

然ル処、段々及老年物忘等多仕、殊ニ近年者多病ニ而冬分ニ茂相成候而者、毎々引籠居、御用等御差支ニも可相成と奉恐察候、依之私義何共恐多御願ニ御座候得共、右役義御免被為 仰付候様奉願上候、何卒乍恐格別之御憐愍を以、右願之通御聞濟被為成下候者、冥加至極難有仕合可奉存候、以上、

十二月

願主

新蔵○

年寄惣代

喜助○

水小頭

弥兵衛○

廿五日申上候処、願之通御聞濟、委廿五日記、

一、新酒直段 壹升ニ付百九拾貳文ノ壹合貳拾文

右之直段ヲ以商内仕度奉存候、此段奉願上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、一統難有仕合奉存候、以上、

酒造稼惣代

掛屋伊兵衛○

嘉永二年

酉十二月

廿七日御聞届、

廿四日 雪 卯三郎

廿五日 晴 右野右衛門

一、太兵衛身上ニ付郡方江歎願申出候、同所引合有之、兼而御聞及之太兵衛故、追放にてハ又々故障出来之程も難計、尤太兵衛儀者無宿二候へとも宮町二候内ニ居候掛り合ニ而、役手扱相成候へとも、中野村願ニ任候へハ、下ケ遣候義ニ而願面預ケ之義者無之、且嚴重ニ守致候哉如何可有之、郡奉行江談候処、猶又仁右衛門呼出し、右等之訳合ヲ以村方ニおいて囲入堅固ニ守り候哉、押而理解被申聞候

処、如何躰之儀有之候共、故障ケ間敷義為致申間敷請合候趣、右二付大目付中へ談候処、存寄無之、依之御中老九郎三郎殿ヲ以相伺候候、老父仁右衛門并親類村方之願、且左程迄請合堅固ニセ話致候ハ、思召無之、下ケ遣候様御沙汰有之、大目付へ案内、郡奉行へ引合仁右衛門村役付添急々呼出し候義談候事、

一、水小頭新藏此度退役願書差出、御藏奉行内談も有之候処、内実ハ不正之義も有之趣、乍併年来相勤候事故、穩便之取扱ニ而願通相濟候様致度旨、右年来無滞相勤候得者御褒美申立も可有之儀ニ候へ共、右二而ハ趣意違、尤右御用向者御藏奉行差配之事故、当勝手計ニ而ハ取計難出来、猶々御勝手江御談被成候様及挨拶候処、御元々阿閉助右衛門方兩願之事故、当役御勝手方可申上、右ハ先年も不調法筋有之、御叱被仰渡、年来無滞相勤候と申訳ニも無之候付、御褒美被下ニ不及候段申上候而可然哉内談有之、右辺ニ而新藏義追々老年ニ相成、物覺も薄く少々宛ハ間違義も有之趣勤方行届候と申訳ニも無之、御褒美被下之儀者相止メ、小頭役願之通御免被成下候様申立候処、無程願之通御免可申渡旨、九郎三郎殿方御達有之、

一、大津本陣、問屋、百艘祝義被下、例之通御水主同心使遣受取書来、

一、例之通役所勘定寄合相濟、

廿六日 曇 元次

一、中野村仁右衛門庄屋同道罷出、兩人之者へ太兵衛下遣候役宅ニ而申渡、太兵衛儀者吟味所江出し同心共方申渡、仁右衛門庄屋請書取之、裁許帳ニ記、但肝煎親類喜兵衛忌中ニ付不参、追而請書調印申渡ス、

一、中庄村又兵衛妻死去ニ付、明日野送り届、

廿七日 曇 徳右衛門

一、太兵衛牢番十二月朔日方廿六日迄分切手受取渡、

一、以剪紙致啓上候、然者其御城下大津町餅屋金五郎江申渡候儀有之候

間、所役人差添、明後廿六日夕七ツ時迄ニ、当御役所江罷出相届候様御申渡可被成候、右之段可及御懸合旨清左衛門申付、如斯御座候、以上、

十二月廿四日

中嶋直右衛門

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

川那辺

但右手紙廿四日貝屋七兵衛方へ差出有之候処、大方ニ而取込居廿六日昼時分中嶋郡次方へ相届候由、然ル処、同人方ニ而滞り有之、廿六日金五郎御役所へ不罷出候付、七兵衛方へ催促有之候趣ニ而、貝七手代中嶋郡次同道ニ而、今廿七日朝四ツ時拙宅へ被参候、早速申達今日罷出候様申付、尤右之次第ニ而延引相成候段御断申吳候様七兵衛手代申聞ル、

一、御剪紙致拝見候、然者当所大津町餅屋金五郎江御申渡之義有之候付、所役人差添、廿六日夕七時迄ニ、御役所へ差出候様被仰越候趣致承知候、然ル処、右御書面今廿七日四時相達候付、今日差出申候、右御答如此御座候、以上、

十二月廿七日

川

四人

尚以右御書面廿四日御差出之処、貝屋七兵衛無滞廿六日九ツ時当所へ差越候趣、右方ニ而又候滞り□廿七日四ツ時拙宅へ相達候付、則今廿七日金五郎差出申候、右延引ニ相成候段、貝屋七兵衛御断申上吳候様申出候、以上、

一、中野村仁右衛門并年寄太兵衛下ケ遣候礼申出ル、

廿八日 晴 藤助

一、以剪紙致啓上候、然者其御城下大津町餅屋金五郎江申渡候儀有之候

間、所之もの差添、昨廿六日当御役所江御差出有之候様及御掛合候処、則御差出二付酒井若狭守様江伺之上金五郎儀得と出所も不相糺、無宿清吉の薪買請不殘焚用二いたし候付、右買請候代錢取上無構段申渡差帰申候、右之段可得御意旨清左衛門申聞如斯御座候、以上、

十二月廿七日

右同断四人

川

猶以右書面廿四日差出候処、貝屋七兵衛其外二而相滞、今廿七日御役場へ相廻り候二付、延引相成候段御申越趣致承知候、已上、

但し金五郎昨夜遅ク引取、今朝持参、「」

一、此間大養寺隠居覚成本山江御呼出し有之、先達而蟄居被仰付候処、此度御赦免被仰出候段光源寺申出ル、状箱式ツ持参一筆致啓達候、余寒之節弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者其御城下二罷在候当御門跡末派大養寺隠居覚成儀、宗意安心且寺法におゐて不審之筋有之、蟄居被 仰付候条、去ル閏四月廿日御届申入置候処、今般右蟄居被差免候、此段御届申入候間宜御承知可被下候、為其如斯御座候、恐惶謹言、

十二月廿七日

小島民部

信□(花押写)

小幡大和介

徳常(花押写)

小幡出羽介

徳義(花押写)

川那辺壯右衛門様

一筆致啓上候、余寒之節弥御安全被成御勤珍重奉存候、誠二其後者御無音打過申候条御用捨可被下候、然者今般御城下大養寺隠居覚成蟄居被差免候次第八重役共方及御文通候、然ル処、先達而之手續も御座候二付、今般之申達書拙者方入御一見置候様重役共申付候二付、

則写書老通差出申候、先者右得其意度如斯御坐候、恐惶謹言、

十二月廿七日

北村将監

重威(花押写)

川那辺壯右衛門様

申達

江州滋賀郡膳所

大養寺隠居覚成江

其方儀御寺法違犯之儀有之、去閏四月已来蟄居被 仰付、尚学問之志願不相忘候ハ、三経七祖之解釈并二今家 御宗意之正不、右蟄居中可致習熟旨被 仰付置候処、其後日数も相立候二付、右解釈之熟練も如何哉与、右三経中觀經下々品生之文義御尋向之処、具二相認差上候始末、御宗意二違戾無之旨学職演上二付、蟄居 御赦免被成下候事、

西十二月廿七日

廿九日 晴 卯三郎

晦日 晴 右野右衛門

一、ふるや徳兵衛、升屋礖五郎坂本屋九右衛門江出金約速^(束)之処、今二持参も無之、内談相濟候儀も不申出候、出方へ催促申遣、
一、夜四ツ半時、安之助、徳兵衛、九右衛門罷出、徳兵衛金壹兩^(歩)持参、都合式兩三步役所二預り、残銀正月廿五日限り、礖五郎分三五七明迄二片付候趣、右兩条九右衛門承知二而致遣し候趣申聞ル、
一、大養寺一条二付本山の書面参り、年内返書可差出候処、余日も無之便りも無之候付、正月五日飛脚初登二御留守居へ向差出入、
一、貴札拝見仕候、如仰余寒之節、弥御安全被成御勤珍重奉存候、然者当城下二罷在候大養寺隠居覚成義、御宗意安心、且御寺法において御不審之筋有之、蟄居被 仰付旨、去閏四月廿日被仰達候処、今般右

蟄居御免被仰出候段、委曲御紙面之趣承知仕候、右貴報如此御座候、
恐惶謹言、

川那辺壯右衛門

十二月廿九日

実名（花押）

小幡出羽介様

小幡大和介様

小島民部様

一、貴札致拝見候、如仰余寒之節御座候処、弥御堅固被成御勤珍重奉存
候、然者其後者從是御無音打過候段御悔^悔恕可被下候、将又今般当地
大養寺隱居覚成儀蟄居被免候次第、御重役中^中被仰聞致承知候、然
ル処、先達而之御手続も御座候付、御達書一通被差遣被人御念候義
致承知候、右貴酬如此御座候、恐惶謹言、

川那辺壯右衛門

十二月廿九日

実名（花押）

北村将監様

三、日記(三冊目) 嘉永三年正月(二九日)

(表紙)

嘉永三庚戌年

日記

(朱筆)
「壺」

正月ヨリ 川那辺壯右衛門

(本文)

正中中

元日 晴

元次

二日 晴

徳右衛門

三日 晴

藤助

一、大津百艘年寄年礼来ル、

四日 晴

卯三郎

五日 晴

右野右衛門

一、大津本陣、問屋、唯泉寺、永順寺、三ヶ浦年始、使藤助、

一、三ヶ浦船年寄、米仲共年礼罷出ル、例之通祝酒差出ス、右之外手先

之者共年礼申出ル、

一、本陣大塚嘉右衛門年礼罷出候処、遅刻二相成、二丸不参之趣御断申

上候、後二罷出候、宅二而礼請、扇子箱請取、七日御用所へ納ル、

一、於御料理間御礼申上、

神職

齊藤筑前
堀池主馬
真杉信濃

町代

萬左衛門
半兵衛
小兵衛

小西大和
初田和泉

御米仲

初田三郎兵衛
掛屋伝兵衛
白木屋左十郎
樽屋長兵衛
樽屋新九郎
仕立物屋兵藏

又左衛門
久助
彦兵衛
五兵衛

御掛屋
馬杉庄兵衛
御城附大工
宗兵衛

一、於御時計之間、御礼申上、

三ヶ浦船年寄

清太郎
茂兵衛
藤村重兵衛
以上

六日 晴

元次

七日 雪

徳右衛門

八日 晴

藤助

九日 曇

代右野右衛門

一、来ル十六日初夜六廿日初夜迄、自坊二而法話修行仕度奉存候、此段御届奉申上候、以上、

嘉永三年

大養寺○

戊正月

十七日右延引之段断申出、聞届、

一、私儀池田屋儀助跡相続仕候処、此度勝手二付、弟常五郎与申者江相続相譲り申度奉存候二付、乍恐此段奉願上候、何卒格別之御憐愍ヲ以、

右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年
戌正月

願主

儀兵衛○

組頭

久五郎○

同

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

聞届、

一、私義不調法者二御座候処、町代役被為仰付、以御蔭永々無滞相勤難有仕合奉存候、然ル処、元来愚案者二而万事不束二御座候処、近来持病毎々差出甚以難渋仕候、自然不行届之義も出来仕候哉与深ク奉恐入、甚以心勞仕候、右二付何卒以御憐愍町代役御免被為下置候様此段奉願上候、何卒右願之通御聞濟被為成下候ハ、重畳難有仕合奉存候、以上、

願主

町代小兵衛○

組頭

久五郎○

嘉兵衛○

嘉永三年
戌正月

十五日差留申渡

十日 雪 代卯三郎

一、織色男单物式ツ

右ハ当月八日夜、裏口押明候而入込候土蔵屋根へ手掛候へとも其間二捨置、右之品物計盗取申候、已上、

願主

藤兵衛○

町代

嘉永三年
戌正月

一、明十一日夕七ツ時、宮町信心之輩方当社江御湯進献仕候、依之御届申上候、以上、

五兵衛○

八幡宮神主

斎藤筑前○

嘉永三年

戌正月十日

一、牛頭天王社檀破壊仕候二付、昨年来再建之儀御願奉申上候処、色々御寄附被成下難有仕合二奉存候、以御蔭当早春方普請二取懸申度奉存候、尤社之義者別紙絵図面之通修理仕度奉存候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

神主

堀池主馬○

庄屋

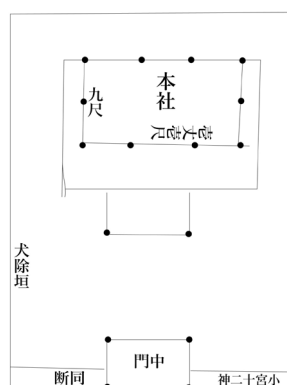
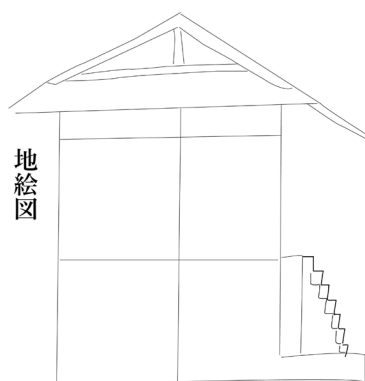
堀池又三郎○

嘉永三年

戌正月

十三日申上ル、

(図面：便宜上、上下に配置)



十一日 曇 代徳右衛門

十二日 晴 代藤助

十三日 晴 藤助

一、当月十二日夜、土蔵屋根切ぬき候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

嘉永三年

戊正月

願主

重兵衛

町代

五兵衛

一、茶立嶋結城男綿入

一、きし嶋男綿入

一、あい嶋青梅男綿入

一、あひしやが青梅男綿入

一、越後結城立嶋薄色裏女綿入

一、嶋ちりめん女わた入

一、あいきし女綿入

一、藍しやがきし女単物

一、嶋ちりめんくるり女下着

一、結城茶立しま女綿入

一、浅黄はかた男帯

一、岸しま茶ちやか女わた入

一、木綿あさき胴袖小紋縮緬男ちはん

一、藍しま青梅絹うら女綿入

一、あいしやか青梅女わた入

一、あいきし男裕

一、風つう女丸帯

一、くり皮茶女丸帯

一、二重とんす女丸帯

一、越後結城女綿入

一、緋ちりめん女下着

一、岸しま女綿入

一、甲州女単物

一、嶋縮めん女下着

一、玉結城女綿入

一、越後花色かすり女かたひら

一、岸嶋女裕

一、緋つむき女ちはん

一、玉結城単物

一、三拾貳品

十四日 晴 代徳右衛門

一、来ル二月朔日の五日まで永代経誦誦仕度候、則法話拙僧相勤申候、

此段御聞濟被成下候様奉願上候、以上、

嘉永三戌年

正月

聞届、

一、於大津町唯泉寺掛所、正月廿七日迄永代経修行仕度候、法談

自坊相勤候、此段御聞濟被成下候様奉願上候、以上、

嘉永三戌年

正月

聞濟、

十五日 晴 右野右衛門

一、具足二付鑑札十五枚請取、

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

壱ツ

一、木下町小兵衛町代退役願差留メ申渡入、

十六日 曇 元次

十七日 晴 徳右衛門

一、大養寺法談之義聞濟申渡置候処、病氣二付、右法談延引致候段断出ル、
一、網町弥助、おか山二不埒筋有之、取留申付候儀、御山奉行富増持参断申来ル、

十八日 雨 藤助

一、木下町軸屋長三郎家林升策買戻し相談いたし候付、沽券願町代方可差出旨頼被参候、

十九日 晴 卯三郎

一、牛頭天王社檀再建絵図面を以、十三日御届申上候処、在来前後二方流レニ而済来、且当所ニおゐて外之宮社檀何レも前後流ニ在之候、右四方流レニ相成候得者、何レ丈夫之人用ハ相嵩ミ可申、少々ハ寄附金も可有之候得共、迎も足り申間敷、不足之分ハ村方ニ而も扣申さてハ不相成、近来村方一統難渋之上之事故、少しニ而も物入少ニ而出来候方可然旨、急度なく御中老方御沙汰ニ而御届書、十七日御下ケニ相成ハ直様猶又申上、是迄通前後流ニ而ハ横手之処方雨吹込社檀前迄濡候趣、此度再建ニ付、御上^付木財等御寄附被下候得共、其余買調候木品性宜敷ヲ吟味いたし買調候と申訳柄ニも無之、成丈下直之木品相用候積り之由、右之通木性も吟味不致候得者、弥しけを含ミ、毎々修覆相廻り候而ハ、村方難渋ニ相成候付、右防之為方四方流レニ致し度由、尤入用之儀成程少しハ相嵩ミ候得共、其替り二四方流レニ相成候得者、横手之処又入用之減り候義も在之、平均いたし候得者格別入用上り候義ニ而も無之由、且又表立申上候義ニ而ハ無御坐候得共、最早右積りニ而木拵も少々取懸り有之趣、只今最初之通り社檀仕立候様ニ相成候而ハ木拵間ニ合不申、失費ニ相成

内実^ニ是又迷惑ニ御座可有、此段御含何卒今被仰上被下候様、御中老九郎三郎殿へ御相談申候処、猶又御評議も可有之由之処、今十九日牛頭天王社再建之儀一統難渋之事故、入用少ニ而も嵩低之方可然との思召ニ而、一旦御下ケニ相成候得共、内実木拵も取懸り候趣、是又不用ニ相成候而ハ差当り迷惑ニも可及二付、図面之通再建之義御聞届ニ相成候段、御中老九郎三郎殿方御達し有之、乍併右御聞届も無之、先ニ木拵等取掛り候義者、御上ヲ差計候心得方、右ハ源兵衛義ハ大工職之事何レ^カ差図ヲ請取掛り可申筈、右差図致候者ハ神主ニ候哉、庄屋ニ候哉、何レ重々引請候哉御尋有之候付、凡而御届之義も神主、庄屋兩名ニ而御届申上候得共、必竟ハ神主庄屋差配ニ而、神主了簡ハ無之、庄屋重々引受取扱申候段申上候処、左候ハ、庄屋叱之上追込可申付旨、尤右者何事も出来難キ事ハ先へ拵置、最早拵置候間□然ニ致し度と申候へハ不成与申候得者、差当迷惑ニ及筋ニ相成、右之通致度と存候ハ、前廉ニ当社迄成不成之義ヲ申出候上、取掛り可申筈、無其儀も無之、途際迄沙汰も無之、木拵いたし置、是非建ねハ迷惑と申様ニ相成候而、御差支ニ相成候、庄屋急度取^メり致候、為叱追込申渡候様御沙汰有之、

一、右御達有之、表向庄屋御咎メニ而可然と存、御請申引取候得共、又三郎先年大病ニ而長ク引籠居、其後引続右同人妻病死いたし彼懇難相続候事、右四方流之義ハ其内ニ極り候事哉、乍去引籠中ニ而諸願届共庄屋加印ニ付、不存候共通れハ無之事ニ候得共、一応調之上と存、又三郎呼出役所ニ而取調させ候処、又三郎申聞候ハ、右四方流之義大源方申聞、右之通ニ致候へハ、雨吹込之愁も無之、急々修覆も不相廻、可然之趣成程可然候得共、右社御上様方御寄附も在之候事、此方俣ニ普請も難相成、何レ御届御聞濟之上ならてハ取究難キ旨申聞置候処、其後段々右之次第申聞、弥四方流源兵衛内極メ致し、尤

本拵之義も源兵衛計二而取懸申候、右も私不存二而ハ無之、源兵衛
はなし承居申候、乍去源兵衛を段々入込訳柄申聞、其意二相泥ミ
任セ置候段不行届恐入候段申聞ル、

一、右之通又三郎申聞候付、猶又源兵衛呼出し相調させ候処、源兵衛
申候ハ成程天王社再建之義私請取申候、然ル処、下地之社二而横手
を雨吹込、始終二しけ入修覆も早く可相廻、尤木品も買入候分性宜
敷を吟味いたし候訳二而も無之、少し二而も直安之方肝要之事二付、
右四方流レハ最初少々ハ直嵩ミ候得共、長ク修覆之不廻処ハ其方為
方と存、又三郎を差図いたし候義二而ハ決而無御座、私を右之通い
たし候ハ、為方二可然旨申出候、且本拵取掛り候義ハ、昨冬右普
請請取内渡金五拾兩村方を請取申候処、木買入茂木作りも不懸、先
渡之金子外用二遣ひ候哉と村方二おもはれ候も如何と心配仕、夫故
少々細工取掛申候処、御上様御聞届ヲ不相待差計ひ、本拵二取懸り
候二相当り何共恐入候次第二御坐候、且以又三郎を差図御座候訳二
而無之間、全私不調法之趣断申聞ル、

一、廿日、右之趣二而ハ源兵衛叱追込、又三郎ハ叱計二而相当と存、廿
日早朝九郎三郎殿を参り候処、留守二付平十郎殿江罷出、前文一応
調候処、源兵衛を存付候趣二而庄屋差図いたし候義ハ決而無之、乍
去右一条ハ源兵衛一存二而庄屋ハ一向不存と申訳二而も無之、源兵
衛を一々相談ハ承り居候由、亦御上御聞届之上ならてハ、ケ様と取
極出来難キ儀者能承知致居候得共、爰ニハ無拠是非御聞済之上なら
てハ、誰か何と云共細工取掛りならぬと留切事も不相成、子細も有
之候事哉二被察候、源兵衛申候ニハ、全私不調法之趣平誤リ二恐入
居候付、源兵衛叱追込、又三郎叱計二而可然と存、今一応御伺申上
候段申述候処、先今日申渡之義者見合、明日御登城之御相談可申由、
廿一日平十郎殿を昨日被仰聞候趣色々御評義之處、成程内実之處其

通り尤二候へ共、源兵衛義ハ職人之事、何レか差図するもの可有
筈、然時ハ上二立て差配する庄屋なり、全ク庄屋ハしらぬ二而も無之、
心付ハ在之候事、左すれハ急度取掛り不申候様可申付筈之處、不念
二付矢張庄屋叱追込、源兵衛ハ叱計二而可宜御評義之趣御達し有之、
庄屋役之重ク相成候方、後々之為ニも可然哉之趣御沙汰有之、其儀
も御尤之義庄屋江叱追込申付候共^(弛カ)レハ無之事候得共、内実ヲ以申
候へハ、源兵衛發起人二付一応申上候段申上、御達候通可申渡旨御
請申上ル、右申渡書裁許帳二記、

但し社檀ハ本拵取懸り候事故、絵図面通相建、廻り玉垣之義ハ
未拵も無之事、尤只今出来候趣二而も無之事、是ハ追而之義可
然段、御中老平十郎殿を御沙汰有之、中門共、

廿日 晴

一、私所持之家屋敷、此度勝手二付、網町柏屋次兵衛仲人を以、林十吉
与申人江表間口七間式尺三寸、裏行拾貳間三尺五寸、家屋敷共不残
代金三拾七両貳歩二相定相譲り申度、尤十吉も譲り請申度、乍恐
右之段奉願上候、軒役之儀者は迄之通り壹軒半役相勤申候、何卒御
憐愍を以右願之通御聞済被為成下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

譲り主

嘉永三年

中村屋長三郎○

戌正月

譲り請

林十吉○

仲人

柏屋治兵衛○

組頭

久五郎○

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

聞届、申渡、

一、右二付、右野右衛門、藤助、元次地改見分差遣入、

一、例年之通、来ル二月十一日夕廿日迄永代経并法談執行仕度候二付、奉御願申上候、右之願之通り御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

嘉永三年

戌正月

景沢寺○
(屋敷)庄

竹内新左衛門○

客僧野路村浄泉寺

二月三日御聞届、申渡、大目付へ案内、

廿一日 晴 藤助

廿二日 曇 元次

廿三日 晴 卯三郎

廿四日 晴、夕雨 右野右衛門

一、網町町代五兵衛町内二組頭相勤候者、何レも断申出持手無之申付呉候様申出、不得止事、重兵衛、善兵衛申付候処、兩人共断申出、外二持順之者も御座候付、何レ共下方二而相談いたし申上候付、兩人之外ハ先御断申上度旨申出、任其意候事、

一、西ノ庄宮神主引替り願書差出候得共、実ニ病氣ニ而も無之、兎角神主株之者方色々故障申立候様子は迄ニも毎々右体有之、昨年も急度相慎候様理解申聞、請書も差出し、此度ハ本人方引替り願二付、取扱候而も可然候得共、外之者替り候共、又候故障申立候振合ニ被察候付、只今迄之神主病氣下り二而、右助役庄右衛門江申付ル、廿五日御請申出ル、

廿五日 晴 元次

一、船町五三郎妻、網町弥助妻御山二而御用割木枯木等取歸り候付、過

代夫役申付候様御達し有之、委裁許帳ニ記入、

廿六日 晴 藤助

一、当町内裏町口北大路村、国分村、別保村、裏町、右村之者日々牛通路仕候処、右通路之節後綱ニ而出這入仕候二付、兼々当村方申通し候得共聞入不申、往還之入口ニ御座候ハ、上々様御通行之節并往来之旅人へ行当り怪我等有之候而者、村役之者共難義迷惑仕候付、以後牛通行之節、入口者鼻綱ニ而出入仕候様、乍恐被為仰付被下候様奉願上候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞届被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌正月

肝煎
熊八○
庄屋

田中与次兵衛○

郡奉行へ廻入、

廿七日 晴 卯三郎

一、銀三拾四匁五分也、御扇子料

内式人三匁、拾三人式匁、五人五分

右年始御礼申上候間、扇子料今日御用所へ納、

一、当町内塩屋惣右衛門義不仕合打続難渋罷在候上、家大破ニ相成、町並苦敷御座候二付、普請仕度候得共、何分必至難渋之者ニ而繕ひ普請出来兼候二付、何共御時節柄奉恐入候得共、御金貳両御貸下ケ被成下候様奉願上候、上納之儀者去々月ニ金貳朱ツ、急度上納可仕候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞届被遊被下候ハ、御蔭を以取繕ひ仕難有仕合ニ奉存候、以上、

嘉永三年

戌正月

肝煎
熊八○
庄屋

承届、

田中与次兵衛○

一、私儀以御蔭商売致来候得共、何分時節柄悪敷候而、段々勝手向不廻り二付渡世方仕兼候故、親類共談合仕候得共、甚六ヶ敷御坐候故致様も無之、此度仕法仕候而、町内八百屋与兵衛忤鉄次郎江拾ヶ年之間餅煮売等之商売向仕法中之間店貸置度奉存候、何卒御憐愍ヲ以御聞濟被為成下候ハ、難有奉存候、私家内之義者逼塞中、只今迄から白場之処へ戸口ヲ明、少々小店ヲ出し日雇拵等仕度奉存候、恐多奉存候得共、右願之通御聞濟被為成下候ハ、重々難有仕合ニ奉存候、以上、

伊七屋町

願主

嘉永三年

戌正月

町代

彦兵衛○

聞届、申渡、

一、私儀是迄荒物屋忠左衛門表借家借居候处、此度餅屋吉兵衛店借呉候様被申候二付、当年拾ヶ年之間借請度奉存候間、何卒御憐愍を以、右願之通御聞濟被為成候ハ、重々難有仕合ニ奉存候、以上、

伊勢屋町

嘉永三年

戌正月

町代

彦兵衛○

聞届、申渡、

(※二八日条脱)

廿九日 曇 元次

晦日 晴 徳右衛門

二月

朔日 晴 藤助

二日 晴 卯三郎

三日 晴 右野右衛門

一、来ル七月初午二付、六日八日迄例年之通神事執行仕度候、此段御届奉申上候、以上、

戌二月

御聞届、申渡、大目付へ案内、

稻荷大明神神主代

斎藤筑前○

一、来七月初午二付、当社内二有之候稻荷大明神江信心之者、六日夜、灯明献申度旨申来候、此段御聞届奉願上候、已上、

若宮八幡宮神主

斎藤筑前○

戌二月

四日 晴 元次

五日 晴 徳右衛門

一、魚屋町新蔵家作致し候義承届置候处、今日普請取掛り候付、表囲附候段届出、大目付へ案内致入、

六日 雨 藤助

七日 曇 卯三郎

八日 晴 右野右衛門

一、私忤徳兵衛義家業向不出情二付、一同寄毎々為申聞候得共、相用不申候二付、家「」無覺束御座候故、無扨此度双方得心之上離縁仕、私義徳兵衛与相改再住仕度奉存候間、何卒格別之御慈悲ヲ以、「」通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

網町徳兵衛父

願主

嘉永三戌二月

又十郎○

親類惣代

樽屋長兵衛○

町代

市兵衛○

聞届、申渡、

一、私娘ますと申者、此度本屋彦兵衛媒人ヲ以膳所塩屋七左衛門妻二遣し申度候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

大津下小唐崎町

嘉永三年

戌二月

年寄

近江屋弥兵衛○

聞届、申渡、

一、大津下小唐崎町近江屋弥兵衛媒人ますと申者、此度本屋彦兵衛媒人ヲ以妻二貫ひ申度、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永三年

戌二月

町代

七左衛門○

聞届、申渡、

一、城州綴喜郡宇治田原禪定寺村平次郎娘つる和申者、此度私方江嫁二貫申「」地縁家二も御坐候而、双方熟談治定仕候付、此段奉願上候、何卒格別之御仁恵ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

戊二月

市右衛門○

肝煎

与惣兵衛○

庄屋

聞届、申渡、

一、私娘つると申者、当年十七才二相成候者、此度御当所西ノ庄村市右衛門方從來縁家二御座候付、双方熟談ヲ以嫁二差遣し申度、此段奉願上候、何卒御仁恵ヲ以右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

城州綴喜郡宇治田原

禪定寺村

願主

庄屋平□□○

年寄

幸右衛門○

百姓惣代

新次郎○

聞届、申渡、

九日 晴 元次

十日 晴 徳右衛門

十一日 雨 藤助

一、朝五ツ半時過、早鐘拍子木相聞、同心当番召連罷出、我等も同様罷出ル、同心共何レも出勤、人足割例之通京西院東町公家衆數様出火之趣、御場所柄二付、御人数札ノ辻上辺迄押出有之、

先駈 御者頭

山元左門

大目付 御番頭

加藤三右衛門

先駈 御者頭

松井竹司

中根仁左衛門

御家老

兼松四郎兵衛

小西藤右衛門○

水奉行御小姓 御先使

柳原鐘次郎

十二日 昨夜雪、晴 卯三郎

一、暮六ツ時前早鐘相聞、大津出火之趣、拍子木打廻り、同心早速寄場へ罷出ル、圓滿院様御寺中金勝院出火、御人数出ル、

先驅 御者頭

山元左門 榊原五郎太夫

十三日 晴 右野右衛門

一、私妻二紺屋町柴屋傳四郎娘にハと申者、当年十七才二相成候、此者同町釘屋長右衛門媒ヲ以貴申度内談仕候二付、乍恐奉願上候、何卒願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永三年 戌二月 豊屋善兵衛○

町代

文助○

聞濟、申渡、

一、私娘にハと申者、当年十七才二罷成候、此者大須賀町釘屋長右衛門媒ヲ以、豊屋善兵衛妻二遣申度内談仕候付、此段奉願上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永三年 戌二月 柴屋傳四郎○

町代

浜屋半兵衛○

聞濟、申渡、

十四日 雨 元次

十五日 晴 徳右衛門

十六日 晴 藤助

一、私家屋敷之義売買仕候付、左之通増減仕候間、沽券状御改左之通二奉願上候、

一、式軒役 表間口 九間壹尺三寸

裏巾 右同断

奥行 廿三間五尺

内 表巾 壹間六寸三分

西南方 裏巾 壹間壹尺三寸八分

長 九間

此入込地不殘今度買戻し私所持二相成申候

壹軒役 表間口 四間壹尺三寸四分

裏巾 右同断

奥行 廿三間五尺

此分田中屋茂兵衛江相譲り減申候

引残 壹軒役 表間口 四間五尺八寸六分

裏巾 右同断

奥行 廿三間五尺

當時右之通沽券相改申度奉願上候、何卒願之通御聞濟御割印被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永三年 二月 杉浦義八○

組頭

久五郎○

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

聞濟、

一、私家屋敷之義今度売買仕候付、左之通増減出来候間、沽券御改之義

左之通奉願上候、

一、老軒役

表間口 七間式尺三寸

裏巾

右同断

下地長三郎分

奥行

拾貳間三尺五寸

買戻之分

表巾

壹間六寸三分

外二東方二而

裏巾

壹間壹尺三寸八分

長

九間

此入込地不殘杉浦義八江差戻し申候、

一、老軒半役

表口貳間、奥行廿三間五尺

所持之分

中程、東方江入込地有之、

此間口七間式尺三寸

奥行拾壹間壹尺五寸

裏巾九間式尺三寸

右二口

表間口 九間式尺三寸

合三軒役

裏巾

右同断

奥行

廿三間五尺

當時右之通沽券相改申度奉願候、何卒願之通御聞濟御割印被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

二月

願主

林十吉○

組頭

久五郎○

嘉兵衛○

町代

小兵衛○

聞濟、

十七日

晴、昼後雨

卯三郎

十八日

晴

右野右衛門

一、町内傳八、此度魚屋町与惣次郎媒ヲ以、西庄村利八後家かね娘すへと申者妻二貫申度右之段奉願上候、何卒御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合二奉存候、以上、

戌二月

願主

傳八○

媒魚屋町

町代

市兵衛○

聞濟、

一、当村利八後家かね与申者娘すへと申者、此度網町傳八方へ嫁二被貫候付差遣申度、尤熟談治定仕候二付此段奉願上候、何卒格別之御仁恵ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌二月

願主

かね○

庄屋

小西藤吉○

一、牛頭天王社再建二付、来ル三月中旬旬氏子共打寄地築仕度段奉願上候、何卒御憐愍ヲ以、右之段御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、尤日限之義者御聞濟之上追而可奉申上候、以上、

二月十七日

神主

堀池主馬○

庄屋

堀池又三郎○

十九日 曇 元次

金百足

竹内新左衛門

右御払米之節、格別心ヲ入札致出情候付被下置候、

二月

掛屋伊兵衛

右御膳酒御用被 仰付候、

二月

廿日 晴 徳右衛門

廿一日 晴 藤助

廿二日 晴、夜雨 卯三郎

廿三日 晴 右野右衛門

廿四日 曇 元次

廿五日 晴 徳右衛門

廿六日 晴 藤助

廿七日 晴 卯三郎

一、来ル三月三日例年之通祭礼相勤申度奉存候間、乍恐此段書付ヲ以御届奉申上候、已上、

二月

御聞濟、大目付へ案内、

一、膳所大明神 右同断、

神主

堀池主馬○

神主

初田和泉○

二月

右同断濟、

一、毛鑓式本

一、船印之太鼓

右者山王御神事御道具損申候二付、御修覆被成下候様、乍恐御願奉申上候、何卒御見分之上、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

楽人物代

樽屋理助○

三星ヤ

藤太郎○

近江ヤ

長次郎○

廿九日御聞濟、御用所へ御達有之、明朔日御見分、

一、当町内久藏義及老年候二付、町役諸役之儀忝喜蔵江相譲り申度此段奉願上候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

嘉永三年

戌二月

久蔵○

組頭

市郎兵衛○

町代

又左衛門○

聞濟、申渡、

一、膳所御城下八軒町又左衛門兄喜三郎義、此度同所宮町勘蔵媒ヲ以、当村久右衛門方へ養子二貫申度此段奉願上候、何卒格別之御慈悲を以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

田原郷山田村

願主

嘉永三年

戌二月

久右衛門○

肝煎

茂左衛門○

庄屋

勘左衛門○

聞濟、申渡、

一、私兄喜三郎義、此度宮町勘蔵媒ヲ以、田原郷山田村久右衛門方へ養子二遣し申度此段奉願上候、何卒格別之御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

乍町代願主

嘉永三年

戌二月

又左衛門○

組頭

聞濟、申渡、

市郎兵衛○

廿八日 晴 右野右衛門

一、膳所大明神神主此度宮下り仕候二付、跡神主之義、宮年寄共御鬪ヲ以御伺申上候処、庄左衛門江御差図御座候二付、右庄左衛門初田和泉与相改相勤申度段乍恐奉願上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌二月

宮年寄惣代

初田三郎兵衛○

肝煎

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

御聞濟、申渡、

一、牛頭天王社普請之義、願之通被為仰付難有奉存候、然ル処、末社八将神社虫付大破二相成、其尽難差置御座候処、本社修理之末木伐端等二而右八将神社再建仕度奉存候、左候得者木代出銀二不及、少々之手間料二而出来申候二付、何卒御憐愍ヲ以、右之通御許容被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

二月

神主

堀池主馬○

庄屋

堀池又三郎○

廿九日 晴 元次

一、来ル三月十五日、十六日兩日地築仕度、若雨天二御座候ハ、順延二仕度奉存候、其節引物左之通、

一、米三俵

地車二而

大工手伝并

幟壹本

大津屋根屋

一、米三俵 右同断

材木屋

幟壹本

伊勢屋町

一、米三俵 右同断

中庄村

幟壹本

一、米三俵 右同断

紺屋町

幟壹本

右之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

二月

庄屋 堀池又三郎○

御聞濟、大目付へ案内濟、

三月中

朔日 雨

徳右衛門

一、山王神事入用毛鑓式本、樂船船印之太鼓御用所御勝手見分二付差出、鑓鞘者御不用物御下ケ二相成、船印者薩^摩屋九兵衛へ被仰付御修覆相成候旨、御勝手^ニ談有之候、

二日 雨 藤助

三日 晴 卯三郎

四日 晴 右野右衛門

一、木下宮神主心得違之義有之、叱追込申付候、委細者裁許帳二記ス、

五日 晴 元次

一、此度町内九右衛門姉あくりと申者、柏屋市兵衛媒を以妻二貫申度、右之段奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合二奉存候、以上、

戌三月

願主

弥助○

媒

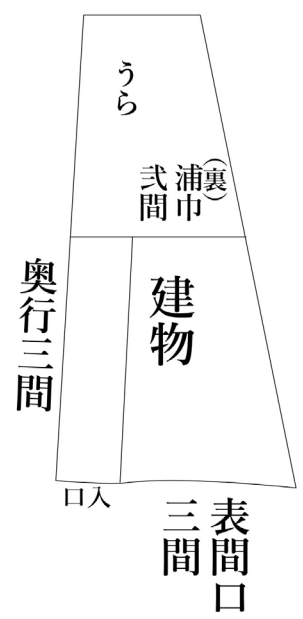
一、私姉あくり、此度柏屋市兵衛媒ヲ以、町内海老屋弥助方江妻ニ遣し申度、此段奉願上候、何卒御聞濟被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

戊三月

一、山王神事用毛鑓韃式本御用所ニ受取、衆人共へ渡ス、

六日 雨 徳右衛門
七日 晴 藤助
八日 晴 卯三郎

(左図面は挾込文書、四月二三日条図面と同内容。便宜的にここに示す)



市兵衛○
組頭
治兵衛○

願主
九右衛門
媒
市兵衛
組頭
治兵衛

九日 晴 右野右衛門
一、先達而御願奉申上候地築之節、於拜殿壬生仕形狂言仕度、尤地築之途間ヲ見合間々ニ仕候、右御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

戊三月

十日 晴 元次

一、以切紙致啓上候、然者其御城下長家百性久七并儀兵衛、大津町柴屋七郎兵衛江申渡候儀有之候間、夫々所役人差添印形持参、明後十二日夕七ツ時迄ニ、当御役所江罷出相届候様御申渡可被成候、右之段可及御懸合旨、清左衛門申聞如此御座候、以上、

三月十日

中嶋直右衛門
秦園輔
柴山順右衛門
名和伴六

十一日 晴 徳右衛門

一、御切紙致拜見候、然者当所長家百性久七、儀兵衛、大津町柴屋七郎兵衛江御申渡之儀有之候付、夫々所役人差添、印形持参、十二日夕七ツ時迄ニ、御役所江罷出候様可申付旨被仰越候、委細致承知候、則今日差出申候、右御答可得御意如此御座候、以上、

三月十二日

川那辺壯右衛門

名和伴六様

中嶋直右衛門様

但し郡奉行へ談之上、一所ニ認メ遣ス、

十二日 雨 藤助

十三日 曇 卯三郎

一、御呼出し者三人、昨日大津御役所へ罷出候処、明日罷出候様との義

二付、今日罷出引取候段、七郎兵衛屈、

一、以切紙致啓上候、然者其御城下長家百姓久七并儀兵衛、大津町柴屋七郎兵衛江申渡候儀有之候間、昨十二日当御役所へ御差出有之候様及御懸合候処、則罷出候付、酒井若狭守様江伺之上、久七儀無宿与惣吉盜取候品々ハ不存候とも、得と出所も不相糺、大津下百石町吉兵衛任頼、蒲団其外質入いたし遣候段不埒二付、質代金銭半分償、儀兵衛義ハ得と出所も不相糺、久七質入之請人二相立候段不念二付、質代金銭半分償申付、七郎兵衛ハ不念之筋無之候二付、質物取上、質代金銭金主請人ハ為償、一同差歸申候、右之段可得御意旨、清左衛門申聞如斯御座候、以上、

三月十三日

中嶋直右衛門

秦園輔

柴山順右衛門

名和伴六

川那邊――

一、中庄宮十五日、十六日地築之節、壬生狂言奉納いたし度段伺出、十一日相伺候処、少々御聞込之義も有之、今一応取調候様御沙汰有之、庄屋又三郎江調申付返答之趣ヲ以、今ハ御用番猪右衛門殿御宅へ罷出伺候処、左候ハ、御存寄へ無之旨御沙汰有之、尤狂言地築共不
断之着服二而いたし候様申達ス、大御目付中へも案内致ス、

十四日 曇 右野右衛門

一、木下宮神主追込差免申渡、

十五日 曇 元次

一、宮町方中庄宮へ引物いたし度申出候得共、差留申付候、
二、右地築二付、同心見廻り之事、

十六日 昼後雨 徳右衛門

十七日 曇 代卯三郎

十八日 曇、雨 代藤助

十九日 曇 右野右衛門

廿日 晴 元次

廿一日 晴 徳右衛門

廿二日 晴 藤助

廿三日 晴 代元次

廿四日 晴 右野右衛門

一、来ル廿六日糺七荒道具残り広小路二而売捌仕候段届出ル、

廿五日 晴 代卯三郎

一、塩屋新左衛門江被下候百足請取、当番へ渡ス、

廿六日 晴 徳右衛門

廿七日 晴 藤助

一、来四月朔日、例年之通神事相勤候二付、□来ル晦日正九ツ時湯花差上申度奉存候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

木下宮

馬杉信濃○

嘉永三年 戌三月

一、右同断届、

西ノ庄宮

小西大和○

嘉永三年戌三月

御聞届、大目付へ案内、

廿八日 雨 卯三郎

一、廿六日大津町代方申出候趣、川屋彦次義京都古川町白木屋嘉右衛門方ニ奉公いたし居「」続ヲ以与次兵衛義も右方江入込罷在嘉右衛門□話ヲ以錢会所引請働罷在候由、然ル処、嘉右衛門方融通合之義二付、諸道具を以銀拾貫目計借り入度存意之処、京地二而ハ百両計者貸不申候趣、然ル処大津納屋甚兵衛と申者参り候付、右

之次第咄合有之候処、大津二而ハ八貫目計之借入出来候間、セ話いたし可遣旨甚兵衛申之、道具類引取右道具代遣込、金子相渡し不申、彼是致し□□内、右嘉右衛門親類共る役筋へ申立候付、去九日大津二而徳屋与次兵衛御召捕二相成候由、右二付京都方長吏方江聞合有之候趣、右ハ与次兵衛当所人別二加り候哉尋参り候段長吏申聞候、町内返答当月五日彦次罷越、与次兵衛借宅引払申候、右二付伯父嘉助町内へ申聞候ハ、与次兵衛義兼々身持風聞不宜、自然後難之程難計、并親類共掛合出来候而ハ及迷惑候付、嘉右衛門方除帳致呉候様申聞候二付、早速当御役所へ御届申上置候趣、長吏迄答置候付、右之段御含被下候様町代内願申出ル、

廿九日 晴 右野右衛門

一、四月二日、三日当組内法中江本山表へ使僧差向二相成、各寺二おいて法席一座ツ、相勤候間、此段御届申上候、以上、

法中惣代

専光寺○

嘉永三年

戊三月

御聞届、大目付へ案内、

使僧京都大行寺法座執行刻付

四月二日九半時

法傳寺

同日八ツ時

正法寺

同晩泊り

大養寺

三日五ツ時

光源寺

同日四ツ時

専光寺

晦日 晴 代 藤助

一、木下西ノ庄神事二付、宵宮廻り之事、

四月 中

朔日 晴 徳右衛門

一、両社神事無別条相済、卯三郎、元次届ル、

二日 晴 代 元次

三日 晴 卯三郎

山王神事入用乗船之船印御修覆出来、御勝手二而受取、直衆人共へ渡、代四拾五匁奥印致ス、薩^摩屋直受取、

四日 晴 右野右衛門

一、当村平蔵後家忤吉松と申者、昨年家出仕候付、除帳之儀御願奉申上候処、其後心躰相改、且亡父年回二も相成候得者、歸村之義御願申呉候様親類共る申出候間、未年数も相立不申奉恐入候へとも、御免之儀奉願上候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

親類惣代

市右衛門○

肝煎

孫左衛門○

庄屋

堀池又三郎○

聞届、申渡、

但右年数も無之、急度改心候哉、尚又親類共へ念ヲ押し候事、且右家出高橋卯八郎方二奉公中之趣二付、右家へも案内旁当り候事、

五日 晴 代 卯三郎

六日 晴 代 元次

七日 雨 藤助

八日 晴 卯三郎

九日 晴 右野右衛門

一、私儀近年不仕合二而難渋仕候付、此度当村於大養寺、一夜淨瑠璃興行仕度、此段乍恐御願奉申上候、何卒格別之御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、如何計難有仕合奉存候、以上、

戊四月
下浜田町
願主
弥助○
肝煎
七左衛門○
庄屋

竹内新左衛門○

右御聞濟、大目付へも案内致ス、但東照宮御祭二付、十六日、十七日并十八日大猷院様御法事二付、右三日ハ差扣、其余日限申出候様申渡、

一、御領分関津村二医業仕居候順孝与申者、去ル巳年菜種仕送り呉候様相頼候付差遣申候処、右代金難渋之趣申聞一錢も払不仕候付、其後手合不仕候処、段々相頼候付、又々仕送りいたし遣し候、然ル処、昨年私病氣二而打臥罷在候節、代呂物家内二而者相分不申候付、差遣不申候処、注文之菜種不相送候故、払不致扨と申、少しも取合不申、勘定其忸二相成有之候処、私病氣全快後、度々催促応対仕候得共、兎角難渋申聞、勘定仕不申、甚迷惑仕候、然ル処、同村庄助と申者私廻縁之者二御座候処、右順孝が金子少々借用いたし居、村方二而も少々宛金子借用いたし居候もの有之由承知仕候、左候へハ全難渋と申二而も無御座横道成儀与奉存候、右二付段々掛合仕候得共、何分強情二申募候故、同人親類之者江右之訳柄相談いたし相頼候処、本来性質不宜者二御座候間、下方二而ハ引合相分不申候間、此上者如何様共可仕旨申聞候二付、不得止事乍恐奉願上候、何卒右順孝儀

被為召出、別紙之通勘定仕候様被為仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、以上、

四月三日 新兵衛○

町代

但郡奉行へ談之上、順孝呼出双方対談、理解申聞候処、後日済証文差出、後日記ス、

一、壮右衛門、明日为上砥山江四宿之御暇、留守中御持頭助、

十日 雨 代藤助

十一日 雨 代卯三郎

十二日 晴

十三日 晴 卯三郎

十四日 晴 右野右衛門

一、町内浅井屋長七後家さと、申者、老母老人、幼年之子供有之、甚難渋仕候付、親類共も世話仕候得共、銘々渡世二難渋仕候へハ、相談之上隣家安兵衛裏小家江引退、居宅之義者借家二仕度奉存候、此段奉願上候、乍恐御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

長七後家

四月 さと○

町代

万左衛門○

十五日 晴 元次

十六日 晴 徳右衛門

一、夕七ツ時前、京都出火之趣、早鐘拍子木鳴候付、当番徳右衛門早速寄場へ出、同心共何レも出ル、我等引続罷出候、麩屋町松原辺火元二而、大火之趣、一番、式番御人数被差出候、

御先使 先駈 御者頭 水奉行
羽賀記 荒川範蔵 浅岡達弥 水谷左内
大目付 御番頭 多田三八郎

二番手

先駈 御者頭 水奉行御中小姓 御家老
山元左門 山田善太夫 伊藤堅吾 本多頼母

一、右御人数義無程注進参り、追々大火之趣、三番手御人数被差出候三番手

先駈 御者頭 水奉行 御番頭
松井竹司 鈴木為次 岡田宗太郎 村松八郎右衛門

一、右御人数押出有之、未消注進不参候付、四番手同意いたし候様との義二而人足割付、

四番手

先駈 御者頭 水奉行 御番頭
浅井鹿五郎 伊藤弥一郎 戸田弁三郎 三松助左衛門

御家老代 御宮番
小栗九郎三郎 本多紋三郎

一、右同意有之、夜四ツ時前迄早鐘鳴り、未消注進不参候得共、先早鐘相止、猶又早鐘鳴候ハ、四番手御人数被差出候御儀定二而、下宿江引扣候事、其後鐘鳴り不申候、

十七日 曇 藤助

一、四月廿一日、廿六日迄法座執行仕度候間、此段御届申上候、以上、

嘉永三年

戌四月

専光寺〇

客僧越後国熊谷善養寺

御聞済、大目付へ案内致ス、

一、関津村順孝義藥代相滞候二付、乍恐出願仕候処、双方御召出し二相

成、御利解被仰付、尤情々相談事仕候処、銀高百五拾三匁六分、右之処へ当時金貳步請取、残之分ハ当盆前貳步、極月貳步、来亥年正月二金貳朱、都合金壹兩貳步貳朱請取、和談済方仕候、双方得心之上済証文奉差上候、以上、

嘉永三年
戌四月

関津村
相手
順孝書判
役人代
藤九郎〇
伊七屋町
願主
新兵衛〇
町代
彦兵衛〇

十八日 曇 卯三郎

一、来ル廿二日、日吉山王神事二付、例年之通田端宮江御湯献備仕度候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

四月十八日

堀池主馬〇

御聞届、申渡、大目付へ案内、

十九日 曇 右野右衛門

一、山王神事入用銀切手受取、当番へ渡ス、

一、十六日京都出火二付、御人数登り候処、人足之内伊勢屋町古手屋与七町御奉行手二而召捕二相成候由、喧嘩相手ハ右之者二無之、全人違之趣二ハ候へ共、人質二召捕二相成候様子、右二付御徒目付林金左衛門御屋敷二残り引合有之候趣之処、十九日夜右金左衛門、与七連引取二相成候趣、町役届出ル、
但し組頭新兵衛
登り右同道引取

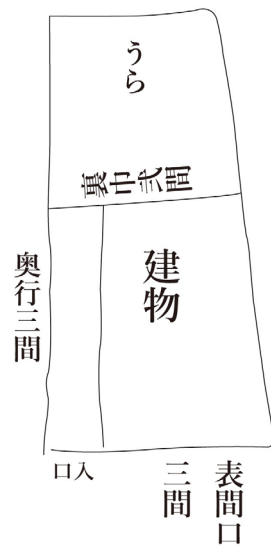
廿日 曇 代藤助

廿一日 曇 徳右衛門

一、朝四ツ時山王神事出役之者共、舟方申渡、
二、**廿二日** 同 藤助

一、町内見番屋家及破損候二付、此度表間口三間、裏中貳間、奥行三間
之建物二普請仕度奉存候二付、乍恐右之段奉願上候、何卒右願之通
御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年
戊四月
(図面)
町代
小兵衛〇



承届、聞届、申渡、
一、山王神事無別条相濟候段、五ツ半時飛脚来、

廿三日 曇 卯三郎
一、金式朱 柴屋庄助

右京都大火二付、御屋敷江多分之白米御差登之節取集相納、格別骨
折候付被下置候、
一、同式朱

柴屋利兵衛
掛屋伊兵衛
俵屋重兵衛
樽屋新九郎

右京都大火二付、御屋敷江多分之白米御登之節、柴屋庄助方へ早速
駈付手伝いたし候付被下置候、

四月

廿四日 晴 右野右衛門
廿五日 晴 代藤助
廿六日 雨 徳右衛門
廿七日 曇 藤助
廿八日 晴 代徳右衛門
廿九日 雨 右野右衛門

五月中

朔日 曇 代藤助

一、徳屋与次兵衛儀、先達而銀子出入故障二付、京都御役所二而御差留
メニ相成、後難之程難計、当所除帳之義御届申上候処、右与次兵衛
牢死いたし候付、親類ハ相願死骸御下ニ相成候趣、先達□大養寺方
申出候得共、右者間違ニ而願ニ不及、親類之者へ御下ケニ相成候付、
引取候様との義二而、一切六ヶ敷義二而ハ無之趣二付、嘉助親類京
都二罷在候、此者ハ引取、則同人宿坊黒谷江葬り、則元来大養寺旦
那二付、大養寺相頼京都へ葬候段、嘉助届、右与次兵衛弟川屋彦次
ハ当所入□之処、与次兵衛、彦次兩人共御役所二而□□宿之御取計
二候、彦次義ハ追扨ニ相成候趣、右二付彦次当所入帳如何二付沙汰
及候、

二日 曇 徳右衛門

一、当町内米屋萬六所持仕居候家屋敷、此度油屋□左衛門仲人ヲ以、代
銀五百目ニ相定、当町内米屋勘兵衛甥笹屋与八江壳渡申度此段奉願
上候、尤与八買請申度奉願上候、何卒格別之御慈悲を以、右願之通

御聞濟被成下候ハ、難有奉存候、以上、

嘉永三年
戊五月

売主

米屋萬六〇

買請人

笹屋与八〇

肝煎

繁八〇

庄屋

田中与次兵衛〇

右承届、申渡、

三日 雨 藤助

(マ)
四日 半雨 卯三郎

一、線宮「姫」^(貼紙)□様御所司代□□之御下向二付、当町筋見分見苦敷場所

夫々取繕申付ル、

大目付

町奉行

御作事

加藤三右衛門

川那部^(逆)壯右衛門

横山九平次

御徒目付

岡野甕次^{大工老人、子老人}□子老人

同心 田中徳右衛門
山口卯三郎

五日 雨 右野右衛門

六日 晴 元次

七日 晴 徳右衛門

一、来ル八日前住上人御法事、引続十三日迄法話執行仕度奉存候、法談之儀者自坊相勤申候、此段御届奉申上候、以上、

嘉永三戌年

大養寺〇

五月

聞濟、申渡、

八日 晴 藤助

九日 晴 代 右野右衛門

一、当町内米屋久右衛門住家南之入口方「」同夜こじ明盗人忍入候而、裏二有之候木綿立嶋引ときもの沓ツ盗取申候、外二品物取不申候、此段乍恐御届奉申上候、以上、

嘉永三年

戊五月

大津町

米屋久右衛門〇

町代

礪五郎〇

一、伊勢屋町永順寺掛所二而、当十五日初夜十九日初夜迄法座執行仕度此段奉願上候、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有奉存候、已上、

大津

嘉永三戌年

五月

永順寺〇

伊七屋町丁代

彦兵衛〇

客僧大津長寿寺

御聞濟、申渡、大目付へ案内、

十日 晴 右野右衛門

一、来ル廿三日〆廿九日迄法談修行仕度候二付奉御願申上候、右之通御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戊五月

景沢寺〇

庄屋

竹内新左衛門〇

客僧野路村浄泉寺

御聞濟、申渡、大目付へ案内、

十一日 晴 元次

京都出火二付、米登方柴庄外四人分金沓歩受取当番へ渡ス、

十二日 雨 徳右衛門

十三日 晴 藤助

一、来ル十五日夕七ツ時別保村方御湯奉献、

一、同日 宮町同断
右之通御届申上候、以上、

嘉永三年
戌五月十三日
神主 齋藤筑前〇

十四日 晴 右野右衛門

一、十一日新堀川浚出来之趣届出、右御中老ヲ以申上、少し御酒代被下候様申立候得共、御六ヶ敷御様子御返答無之、同心兩人町見分申付候付、序二川浚見分申付ル、

十五日 曇、夕雨 藤助

一、来ル十七日、例年之通御湯献備仕度奉存候間、乍恐此段以書附御届申上候、以上、

五月九日
承届、
神主 堀池主馬〇

十六日 雨 德右衛門

十七日 曇 藤助

一、当村借宅致居候為次方江、昨十六日夜盜賊這入候様子二申候、紛失之品左之通、

一、錢貳貫貳百文 一、紺立嶋綿入 壹ツ

一、田葉粉入 壹ツ 一、手ぬくい 壹ツ

ノ四品

乍恐右之段御届奉申上候、以上、

木下村
庄屋

嘉永三年
戌五月
中西又次郎〇

一、先月淨留理之義御聞濟被成下難有仕合二奉存候、右日限之義、来ル廿日夜当村於大養寺興行仕度、此段御届申上候、以上、

戌五月
下浜田町
神助〇

肝煎
七左衛門〇

庄屋
竹内新左衛門〇

申上候処御差支無之、大目付へ案内、

通札直書

一、大札壹人様七拾文 一、小札 四拾八文

興行元

弥助

一、木下町家破損二付、建替致度先達而願書差出、承届置候、然ル処、御通輿前取懸り度旨申出候得共、差留メ置候処、猶又近日方取掛候付、围付候段届出、大目付へ案内申達、

十八日 晴 右野右衛門

一、私忤久次郎儀、清左衛門弟二御坐候処、先年養子二貫置候処不熟二付、此度双方得心之上離縁仕度、此段乍恐奉御届申上候、何卒右之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

伊勢屋町

嘉永三年
善兵衛〇

戊五月
清左衛門〇

町代

彦兵衛〇

聞届、申渡、

十九日 晴 元次

一、伊勢屋町掛所法座之儀、今十九日初夜迄之御願二御座候処、明後廿

一日夜迄御日延之儀御願奉申上度、何卒右願之通御聞濟被為成下候
ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

嘉永三年

戊五月

大津

永順寺○

伊勢屋町

町代

彦兵衛○

客僧大津長寿寺

御聞届、大目付へ案内、

廿日 曇 徳右衛門

廿一日 晴 藤助

一、昨夜弥助興行浄留理無別条相濟候段出役同心届、

廿二日 曇 右野右衛門

廿三日 晴 藤助

廿四日 朝曇、昼後雨 徳右衛門

廿五日 朝雨 右野右衛門

一、昨廿三日夜、町内魚屋源七裏へ盜賊入候哉、左之品数紛失仕候、

一、銚石金杓子四本 一、金盞 壹ツ 赤

右之二品紛失仕候付、乍恐此段奉御届申上候、以上、

五月廿四日

届人

源七○

町代

万左衛門○

廿六日 晴 徳右衛門

廿七日 時雨 藤助

廿八日 同 右野右衛門

常州新治郡土浦城下

田中郷百性伊兵衛忤

傳兵衛

右之者心願ニ付諸国神社仏閣為拝礼、去ル酉年八月国元出立、昨廿七日当所新堀相模川西堤ニ而行倒病死仕候ニ付、村役人共立合、得と相改申候処、年比五十七才計成男、相身ニ疵与も無御座、全病死ニ相違無御座候、着用物古單物着し、肩衣壹ツづゝ、袋壹ツ、無錢ニ而古さい布壹ツ、脚半壹足、手拭式ツ、風呂敷壹ツ、茶碗壹ツ、右之外所持之品無御座候、尤寺送り老通所持仕居候得共、何分非人同様之躰ニ相見へ候ニ付、岡山へ土埋ニ仕度奉存候ニ付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

肝煎

権六○

与惣兵衛○

庄屋

小西藤吉○

戊五月

承届、

往来手形一札之事

一、男傭人

常州新治郡土浦城下田中郷

百性伊兵衛家内傳兵衛

右之者代々曹洞宗ニ而拙寺旦那二紛無御座候、今般心願有之、諸国神社仏閣参詣ニ罷出申候間、御関所無相違御通可被下候、若此者病死等致し候ハ、其所之御慈悲ヲ以御取置可被下候、其節此方へ御沙汰及不申候、猶又行暮難渋之砌ハ止宿之程偏ニ奉希候、為其往来一札仍而如件、

嘉永二己酉

八月十八日

国御関所御番衆中

宿々村々御役人中

常州新治郡土浦城下

曹洞宗

神龍寺○

廿九日 雨 徳右衛門

六月中

朔日 雨 藤助

一、此度御講御取結二付、当町加入之面々名前付御吟味役を被差越候、

三枚八分

柴屋庄兵衛

壹枚

三星屋次郎兵衛

升屋儀五郎

塩屋新右衛門

三分

井筒屋佐兵衛

半枚ツ、

掛屋伊兵衛

近江屋三郎兵衛

貳分五厘ツ、

釘屋長右衛門

龜屋清次郎

坂本屋九右衛門

貳分ツ、

茶屋長七

八百屋半兵衛

白木屋佐十郎

貳分ツ、

鍛冶屋義右衛門

穂積や傳^カ□

塩屋七左衛門

浜屋□□□

壹分五厘

樽屋新九郎

壹分

一、鳥目 百文ツ、

網町

弥助

左吉

次郎兵衛

卯之吉

傳八

木下町

平七

藤右衛門

浅次郎

源助

伊勢屋町

勘兵衛

文吉

与七

善八

半兵衛

庄兵衛

喜兵衛

吉兵衛

彦兵衛

大津町

与助

定吉

弥助

久右衛門

新助

金五郎

佐兵衛

兵助

膳所村

三次郎

源七

与惣右衛門

庄七

新九郎

平蔵

助四郎

儀助

庄左衛門

藤右衛門

太兵衛

勘右衛門

源八

徳蔵

源助

庄次郎

市蔵

喜三郎

繁蔵

孫次郎

重助

喜八

宮町

徳蔵

弥助

源助

常吉

次郎七

長蔵

利右衛門

西ノ庄村

奎兵衛

半五郎

重五郎

拾吉

政蔵

捨蔵

大須賀町

源七

次郎兵衛

長右衛門

源次郎

善兵衛

魚屋町

吉兵衛

嘉兵衛

茂助

卯八

孫八

勘四郎

紺屋町

儀吉

安次郎

八軒町

喜助

木下村

伊助

喜三郎

清□

清八

弥兵衛

五郎助

宇之助

中庄村

弥助

五郎四郎

和吉

半兵衛

勇七

彦兵衛

助□

利右衛門

権左衛門

船町

重兵衛

清七

膳所村庄屋

伊勢屋町

喜助

清兵衛
佐兵衛
七兵衛
與次兵衛

右先々月京都大火之節、火消人数二而罷登消防骨折候付被下置候、
一、〔貼紙〕鳥目、百文ツ、

御纏持
徳兵衛
友七
勘次郎
権六
作兵衛
三次郎

鳶之者
太助
浅吉
惣吉
弥吉
龜吉
安兵衛
次郎助
卯之吉
松之助
常次郎
平右衛門
佐助
平吉
万吉
小頭
喜助

右先々月京都大火之節、火消人数二而罷登消防骨折候付被下置候、

二日 雨 右野右衛門

一、私儀、当月朔日夜土藏家根切ぬぎ盜賊入込、品物之義紛失物無御座候、何レなか竹はしこ持、土藏家根掛置候間此段御届奉申上候、以上、

嘉永三年

願主

十兵衛〇

戌六月

町代

五兵衛〇

一、来六日正四ツ時、例年之通り麦湯奉献仕候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

戌六月

西ノ庄

小西大和〇

御聞届、大目付済、

一、来ル六日正九ツ時、例年之通麦湯花奉献仕候付、乍恐此段御届可申上候、以上、

戌六月

木下

真杉信濃〇

御聞届、大目付済、

三日 雨 徳右衛門

一、膳所村肝煎庄左衛門代り孫太郎相勤候段届、

一、来ル六日、麦湯膳所大明神江差上申度奉存候付、此段御届奉申上候、右聞済被成下候ハ、難有奉存候、已上、

神主

初田和泉〇

戌六月

御聞届、大目付済、

四日 晴 藤助

五日 晴 右野右衛門

一、私儀以御蔭御当所住居相続仕難有仕合奉存候、然ル処、時節悪敷渡世向不勝手二付、為助成晴天二日之間、於泉水寺□川崎相撲興行仕度、乍恐此段奉^願上候、猶又日限之義者追而奉願申上候、何卒御憐愍ヲ以右願之通御聞済被為成下候ハ、渡世取続之基二相成、冥加至極難有仕合奉存候、以上、

願主

六月

藤吉○

頭取

万左衛門○

町代

五兵衛○

御聞届、大御目付へ案内致ス、

六日 午後雨 徳右衛門

七日 晴 卯三郎

一、当村糶屋七兵衛跡屋敷建物共、去酉年十二月村方江取立置候処、此度松平大和守様御領分野洲郡杉江村伊兵衛忝伊平次与申者買得仕度段談合仕候二付、譲り申度奉存候二付、乍恐此段御願奉申上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

売主代

組頭

庄吉○

組頭

初田三郎兵衛○

肝煎

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

承届

一、私忝伊平次与申者、御当所糶屋七兵衛跡家鋪譲り請申度、談合仕候付御願奉申上候、御聞濟被成下候ハ、御当地江引越人別二御加被下度奉願上候、何卒右願之通被為 仰付被下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

松平大和守殿領分

野洲郡杉江村

願主

戌六月

伊兵衛○

庄屋

良蔵○

承届、

八日 晴、夕雨 藤助

九日 曇 右野右衛門

一、糶屋七兵衛跡屋敷買得之儀、願之通御聞濟被成下難有奉存段、然ル処、御割印之活券状虫付二相成御座候二付、新活券状御願奉申上候、何卒右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

伊平次○

肝煎

孫次郎○

同

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

承届、十日判形渡、

十日 雨 代卯三郎

十一日 晴 元次

一、私儀相撲興行之義奉願上候処、御聞濟被成下難有仕合奉存候、然ル処、日限之義来ル十五日、十六日兩日興行仕度此段奉願上候、右願之通被 仰付被下候ハ、難有仕合奉仕合奉存候、以上、

願主

藤吉○

町代

五兵衛○

御中老ヲ以申上候処、思召無之、大目付へ案内、

表札

小札

百式拾四文

八拾文

棧敷

敷座

六百元

貳百元

十二日 晴

徳右衛門

一、右相撲十四日夕太入之形いたし、十三日夕町筋太鼓打廻り候段申届、

十三日 晴

元次

一、左之通願書郡奉行に被相廻請取、

乍恐御訴訟奉申上候口上書

一、元金貳拾両也

相手

御当所中庄村

万屋和兵衛

同 宮町村

米屋平助

同 烏井川村

松葉屋五郎左衛門

右別紙証札通貸附置候処、日限二相成候間段々引合仕候処、今以埒

明不致呉誠ニ迷惑仕居候、御時節柄右様之義奉掛御苦勞候義、何共

恐多御義ニ奉存候得共、私義昨年之御拝借金等も御座候之間、右金

子ハ不申及、外ニ御領分中百姓衆江口々売附、并仕送り仕置候肥

代銀等、何分時節悪ニ而掛先甚以不寄ニ御座候、乍恐此姿ニ而ハ

拝借金上納も無覺束と時々心痛仕居候義ニ御座候、且又私義先月

罷登居節、最早余程日数も相立候義ニ而、一兩日之内口々埒明ニ相

成候得者、右ヲ以御上納為相済帰村仕度心組ニ御座候間、何卒前願

之次第御堅察被成下、右相手方早々被召出、片時も早ク皆済致呉候

歟、又ハ質物ニ而も約定通り相渡呉候□、右両様之内ニ而急度埒明

致呉候様、御利解被仰付被下候様幾重ニも御願奉申上候、右願之通

御容許被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

高嶋郡知内村

江戸屋市郎右衛門

嘉永三年

戌六月

借用申金子之事

一、金貳拾両也

右ハ此度要用ニ付借用申処実正也、返済之儀者来ル戌年三月晦日切

ニ無相違、急度返済可申候、万一相違有之候得者、左之質物売払加

判之者に取計返金可致候、為後日一札仍如件、

家屋敷壹ヶ所并土蔵附

借主

膳所中庄村

萬屋和兵衛印

請人宮町

米屋平助印

同 烏井川村

松葉屋五郎左衛門印

江戸屋市郎右衛門殿

一、和兵衛、平助町役付添呼出し利解□□、

一、来ル十七日、十八日例年之通り田端神祭執行仕度、尤十八日御湯献

備申度候間、乍恐此段以書附御届奉申上候、以上、

神主

六月

堀池主馬○

御聞済、大目付へ案内、

一、麴屋七兵衛所持之酒造株道具一式、去西十二月村方江取立置候処、

此度双方得心之上伊平次江相譲り申度、尤伊平次方も請負酒造稼仕

度、此段御願奉申上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌六月

売主

膳所村組頭

庄兵衛○

買主

杉江屋伊平次○

酒造稼惣代

掛屋伊兵衛○

思召も無之候ハ、承届候段相伺候処、御存寄無之、聞届、申渡、

十五日 曇 徳右衛門

一、川那辺壯右衛門横手川筋此度附替二相成、阿閉助右衛門前高橋弥八横手同人前伊勢屋町、紺屋町へ水掛リ二相成候、両町へ申達ス、御触帳ニ委シ、

一、明十六日毎日常御登城二相成候事、

十六日 曇 元次

一、藤吉興行角力、昨今無別条相済、

一、江戸市出願二付、双方呼出し理解申聞ル、明日中猶予申付、早々埒方付候様申渡、

十七日 晴 藤助

一、船町釜屋重兵衛借家二借宅仕居候石田屋清七方へ、昨十五日昼八ツ半時比留守中を見掛、表口盗賊這入候義二御座候、所持之品相改申候処、左之通相失申候付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

一、六帖布蚊帳 壹ツ

一、女白紺立嶋單物 壹ツ

男 一、浅黄立嶋單物 壹ツ

小供 一、茶しま單物 壹ツ

女 一、紺越後帷子 壹ツ

女 一、きし嶋黒紬帶 壹ツ

男 一、黒小倉帶 壹ツ 一、茶しま中風ろしき 壹ツ
一、嶋ちりめん財布 壹ツ 中二錢三百文計

合九品

戌六月

願主

清七○

町代

五兵衛○

十八日 晴 右野右衛門

一、私義昨酉年鳥井川村二而家相求メ、右家代金貳拾兩返済方延引二相成、銀主高嶋郡江戸屋市郎右衛門を私共相手取御訴訟仕、御役所様御苦勞二相成候段奉恐入候、則以御利解當時金五兩差入、尚又当七月十四日二金五兩差入、殘金拾兩当十一月晦日限二相渡済切之治定仕候、其上若遲滞之儀御坐候ハ、鳥居川村二私所持仕候家屋敷無相違相渡可申候、全御蔭を以事済仕難有仕合二奉存候、依之双方得心之上連印済証文奉差上候、以上、

願主

高嶋郡知内村

江戸屋市郎右衛門

代八兵衛○

本人中庄村

万屋和兵衛○

加判人

宮町平助○

同鳥井川村

松葉屋五郎左衛門○

鳥井川村庄屋

治兵衛○

右義定通無相違返并可致旨申渡、八兵衛江金子受取度毎々届

出し候様申渡、

十九日 晴 徳右衛門

一、十七、十八田端神事二付、同心見廻り無別条無之、

一、殿様明廿日御帰城二付、御迎罷出候者共名前御席、御用所へ差出ス、

勢多口御門内

同心(カ)

山口礼右衛門

中山藤助

稲田右野右衛門

田中徳右衛門

中山元次

庄屋

堀池又三郎

小西藤吉

竹内新左衛門

中西又次郎

田中与次兵衛

御掛屋

柴屋庄兵衛

御米仲

掛屋伊兵衛

初田三郎兵衛

白木屋左十郎

八幡宮前二而

斎藤筑前

堀池主馬

初田和泉

真杉信濃

職方

山田次助

保井源助 痛所不参

田河友三郎

国友藤兵衛

町代

礪五郎

万左衛門

半兵衛

又八

小兵衛

文助

市兵衛

五郎兵衛

彦兵衛

仕立物屋

兵藏

御城附大工

宗兵衛

次兵衛

稻荷社前二而

斎藤石見代

斎藤主計

勢田中嶋二而

三ヶ浦船年寄

以上

廿日 晴、夕少雨 代元次

一、殿様御機嫌能御帰城被遊候付、当町神職支配寺々恐悦申出ル、

一、殿様明廿一日、三社金毘羅、両寺、遵義堂御参詣被遊候旨、御用所

に達有之、三社并御通候町筋触出候、

廿一日 雨、午後晴、夜雨 藤助

一、昨廿日船町町代申出候、同町権四郎与申者悴先年京都二出稼いた

し居、当町除帳二相成有之候処、右之者不仕合二付、昨冬内々親

元権四郎方へかゝり申「」居候、町内二も含居候趣、然ル処、右

之者山ノ者縄掛連行候趣届出、尤右権四郎困窮者二而暮兼、夫婦共

大津二罷在候悴共へかゝり二参居候而、当所留守二ハ壹人之末子住

居、其所へ右之兄参り居候由、

廿二日 晴 右野右衛門

一、御領内山田村是迄所持仕居候引綱并浦々とも他所江譲り渡由、私

承り候二付、所繁栄并町内、隣村之難渋者之渡世二も相成申候哉与

存、早速山田村清右衛門与申者相頼、綱主方へ段々頼込候義者同御

領内二御座候間、私方江譲り被呉候様度々相頼被呉候処、正金五拾

両二而譲り渡し申候様申居候二付、其節私少々直下ケ致呉候様右清

右衛門迄談合申候処、清右衛門申候二者、大鉢金四拾五両位二候ハ、

取扱致見候様被申呉候間、右之通直段二御坐候ハ、私方へ譲り受

申候間、右之段綱方引合被呉候様申含メ、猶又外方へ譲り請二参り

候ハ、私方江沙汰致呉候様、其上二而先方江談し合被下候様頼置、

引取居申候処、当月十四日大津尾花川町右之綱引受申度由、山田

清吉

茂兵衛

重兵衛

村九郎左衛門、与次兵衛兩人方へ頼二参り申候由聞受申、右清右衛門方迄参り大津尾花川町^ろ、譲り請二参候直段承り候処、矢張金四十五兩二譲り申度候様二承り候二付、右之直段二御坐候得者私方先願二御座候故、猶又同御領内之事二御座候、又者当所繁昌之事二も御坐候間、私方へ譲り受置被下候得者、其村方入用之節ハ何時二而も相渡し申候、猶又私譲り受申居候中ニ高水等相成候共、日雇之者江者急度相しめし御田畑等踏荒し不申候様可致取扱候、右他領者江譲り渡被成候而ハ御領内難渋之者渡世向ニも不相成、猶又御田畑等踏荒し候節者御上様江奉恐入候間、何卒私方江譲り呉候様相頼候処、則山田村九郎左衛門申居候義者、跡之事ハ如何ニ相成候共不苦候等申居、一向取合呉不申、余り歎ケ敷奉存候間、清右衛門元^ろセ話人之事故相頼申候処、網主方^ろ右セ話人ヲ以清右衛門私方江何程二譲り被請候哉、則尾花川町^ろ譲り請申度趣二候与申居候付、私共^ろ申遣候二ハ、前以金四十五兩二直段附置候故、其方何分売主之事故、直段之処此位二而譲り渡与取極呉候様、度々申候得共一切何程二譲り渡と不申呉、何分私共二直段之義附買二致候様二申居候得共、私方譲り請之事二御座候得者、少々二而も下直之方宜敷候得共、何分所繁昌ニも相成候与存、何卒引受度存寄ニ而他^ろ所^ろ直入致候上、金式両相増候間、私方へ何卒讓被呉候様相頼候処、右九郎左衛門、与次兵衛兩人申居候二ハ、此所ニ而式両計儀^義理立ニ而ハ膳所江者譲り渡不申候、金五拾兩ニ而尾花川町江相渡申候与計り申居、私方^ろ申候儀者一切取合呉不申候故、左様二候ハ、何程ニ而買取候者私方江讓被下候哉与承り候処、何程直上ケ被致候而も膳所方江者一切譲り渡し不申候様、只々申居候故、廿五、六日比も前日より頼置候義捨置、始メ而引受ニ罷出申候、尾花川町江譲り渡しニ相成申候而者、余り歎ケ敷致方与存候、右壳渡し申候古網之儀致方も無御座候、私共新

網仕立申度、浦々漁船之儀者 御城下江譲り請ニ相成申候様、何卒乍恐 御上様御憐愍ヲ以、右山田村網仲ケ間中被御召出被成下、御慈悲ヲ以御利解被 仰付下、右願之通御聞濟ニ相成申候ハ、私共親類一統難有仕合ニ奉存候、以上、

嘉永三年
戌六月

船町
願主
吉右衛門
町代
五兵衛

右之願書郡奉行手へ廻ス、

廿三日 曇、時々雨 元次
廿四日 代藤助

一、御席江御呼立御口達、近頃西ノ庄浦泉水寺辺浦、又戸田平十郎殿浦先ニ而、夜分小網ヲ引候者有之趣、御家中之内かはへ針いたし居候付、此処者引網いたし呉候而ハ迷惑之由申聞候処、何かあり不構候抔申候由、何方之者二候哉相尋候処、紀州之者之由返答申候由、紀州之者ニ而者他領江無作と参り網獵いたし候訳も無之事、御目付手ニ而調ニ相成候処、右盜殺生之義者尾花川^ろも附衛ヒ、石原御役所へも訴出候趣ニ相聞候、大津方ハ下濟ニ相成候由、当所へ他所者網ヲ引候義者当地ニ手引之者可有之哉ニ被存、段々御調有之候処、舟町石田屋吉右衛門弟大津二罷在、明真次郎と相撲取之義、此者小網ヲ持居候、右等之手引ニ依而当所ニ而網引候事哉之疑ニ而、吉右衛門吟味所へ呼出し相成御調之処、先月中比新堀浜先ニ而藻取船之櫓ヲはめ候処しれ不申、右弟所持之網ニ而引候ハ、櫓上り可申哉と一度相頼、櫓ヲ取んか為ニ網引いたし候得共、櫓ハ上り不申、夫^ろ外ニ盜殺生等いたし義決而無之旨申聞候由、乍併櫓ヲ落し候ヲ取んか為

二他領之者ヲ頼ミ勝手俣ニ網ヲ引候段、余り大業成仕方不束候ニ付、猶一応大目付中へ打合、得と当役手ニ而も取調、御返答申候様御沙汰有之、大目付中へ打合候処、同様之趣、即日吉右衛門、町代附添役所ニ而調させ候処、同様之義ニ而、十四才ニ相成候忤藻取ニ遣候処、借り置候櫓ヲはめ二、三日掛りさかし候得共相知レ不申、弟大津二網持居候義も不存候処、馬場村通り候処、右之小網引居候ヲ見掛、扱櫓ヲはめ困り居候趣ニ申、其網引呉候様相頼申候、夕方七ツ時分、右引呉申候得共、櫓ハ上り不申也、右之外盜殺生等之義一切存不申、右網引候義前以一応御断申上候^筈之処、其儀も心付不申、私了簡を以、他領之者相頼網ヲ引候段何共恐入候、右之外忍網等決而仕候義無御座候、又他方右忍網ニ参り候者見及候義も毛頭無御座候旨申候、

廿五日 晴 徳右衛門

一、前段之次第御中老ヲ以申上候処、全盜殺生網引候者外之者ニ而可有之、乍然吉右衛門頼ニ寄、引網いたし候事起り、忍引網ニ参り候事哉も難計、以来互之為吉右衛門叱之上五日計追込申付候而可然旨、御中老方御沙汰有之、大目付中江も右之趣案内申置、

廿六日 晴 代藤助

一、宮町宗吉、藤七故障一条ニ付藤七叱追込、裁許帳ニ委、
一、清徳院講中本山へ出訴之一条ニ付、本山へ御呼出し之処、昨日引取未事^①事済ニ相成不申候得共、御尋之始末大津花階寺と対決之一条荒々庄屋新左衛門申出、

廿七日 晴 元次

一、私先々代方晒商売仕候付、其砌方新堀浜御地面拝借、右干場ニ奉願上候処、御憐愍を以御聞濟被成下、從來相稼御蔭を以渡世相続仕難有仕合ニ奉存候、然ル処、甚以奉恐入候得共、此度勝手ニ付右御地面并建物諸道具等一色、八百屋半兵衛江熟談之上相讓申度、乍恐此

段奉願上候、右ニ付是迄乍聊差上來り候御運上銀之義ハ、以来同人方可奉差上候間、何卒格別之御憐愍を以、願之通御聞濟被為成下候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

嘉永三戌年

六月

願主

樽屋長兵衛○

親類

鮎屋徳兵衛○

町代

市兵衛○

一、当所樽屋長兵衛新堀浜御地面拝借仕晒商売仕居候処、此度勝手ニ付、干場并建物一色相讓り度被申候ニ付、熟談之上私讓り「一」、御地面之儀者是迄通り拝借仕度候、且又御運上之義者下地通り上納可仕候、乍恐此段奉御願申上候、何卒以御憐愍ヲ、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌六月

伊勢屋町

半兵衛○

町代

彦兵衛○

六月廿九日右両願相伺候処、思召無之、聞届、申渡

一、私家昨廿六日夜、表之方^①明有之候ニ付、家財吟味仕候処、左之通紛失仕候、全盜賊与相見へ候ニ付此段御届奉申上候、
一、銭式百文
一、花色沓反風呂敷 壹ツ
一、嶋女單物 壹
右之通相違無御座候、以上、

嘉永三年

戌六月廿七日

御届主

伊三郎○

肝煎

繁八○

廿八日 曇 徳右衛門

庄屋
田中与次兵衛○

一、鳥目八貫文

右御献上之鮎、格別骨折春鮎二而相納候付被下置候、

六月

廿九日 晴 代 右野右衛門

晦日 晴 代 藤助

一、私儀代々御城下二罷在、御蔭を以渡世相続仕難有仕合奉存候、然ル
処、此度御膳酒御用等被為 仰付、冥加至極難有仕合奉存候、右為
御冥加甚少分之儀二御座候得共、金子拾両差上申度奉存候、何卒御
聞届被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌六月

掛屋伊兵衛○
町代

磯五郎○

右ハ口上ヲ以御中老中へ相窺候処、寄特之儀勝手二差上候様
御沙汰有之、

七月中

朔日 雨 元次

二日 晴雨 徳右衛門

三日 晴 代 右野右衛門

一、牛頭天王普請料二御寄附被成下候金子之内、当年分何卒当盆前二頂
戴仕度奉存候付、此段御取扱被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

七月

堀池又三郎○
庄屋

右願書御勝手へ談候処、三ヶ年二被下之御達し、兼而有之候
事、必竟繰上丈之事二付、御^(談力)不申上、御勝手二而談済押切差出ス、

四日 雨 右野右衛門

五日 雨 元次

一、中庄村風呂屋平助、表側底取繕二付囲付候段届、大目付へ案内、

一、八百屋半兵衛被下三貫文切手請取、当番へ渡ス、

一、中庄宮末社八将神社、何レも破損二相成有之候付、此度本社普請残
木有之、序二建替致度旨先達而願書差出候得共、本社出来候上之事
可然旨申渡置候、然ル処、本社大体出来、最早屋根一段之処二相成候、
大工手も有之候事故、此節仕事之透二建替取懸り申度段申出候得共、
元来困窮村二而、本社破却二及候義無是非事捨置候義も不相成、無
抛再建致度、然ル処、全体困窮之村方聊之用意金も無之、不得止事
歎願申上候訳柄、夫故三拾両木材被下候次第、右古く損所有之候得共、
破却二而ハ無之、夫迄も建替手当工面出来候へハ、最初之申立之趣
意とハ相違いたし、思召二も相振不申、先御遷宮も相済本社再建之
一条ハ一仕切二致し、其後事可然段又三郎江理解申渡ス、

六日 晴 徳右衛門

七日 晴 藤助

一、御停止二付、今日御礼流之事、

八日 晴 右野右衛門

九日 晴 元次

先年来清徳院、大津花階寺繼目礼金之義二付故障二相成、右二付、
清徳院講中之者当役添翰ヲ以本山知恩院へ出願致、双方呼出し有之
候処対談落合不申、段々延引中絶二も相成有之候処、又候此節双方
呼出し二相成調有之候得共、兎角和談難相成旨、右二付花階寺ハ縁
心寺法弟二付捨置候義も不相成、同寺本山へ罷出、右故障一条当表

役場へ相願、如何様共下方二而和談可致二付、縁心寺へ御下并御書下御渡被下候様願有之候趣、右願通縁心寺へ御下ケニ相成候趣ヲ以大目付中江右本山之御書下相添願書差出有之候、右願面ハ長々書連有之候、大意大津花階寺ハ法弟之義清徳院ハ隣寺同派之義、双方共難默止寺柄二付、不得止事、右之次第第二及候、何卒御威光ヲ以御理解被仰渡、双方穩便二事済仕候様致度、且花階寺御呼出し之義拙僧へ被仰下候様致度、右願意二候得共、発端ノ余程之年数も相立、本山ニおゐて段々取調も有之、運ヒも追々ニ付来り有之趣余程年数も相立、事永キ故色々混雜入組之訳柄ニも可有之、此方之役場ニ而取調と申義も六ヶ敷、且先達而添翰被差出候返翰も不参候由、旁以縁心寺願書御取上難被成差戻しニ相成候、乍併縁心寺無抛出願之事ニ付、御下ケニ相成候得共、以後於本山清徳院講中之者余リ強情ニ不申程能和談事済いたし候様、理解為申聞可置旨御達有之、

右之趣大目付中へ打合候事、清徳院講中之内塩屋新左衛門、樽屋新九郎呼出し、御達し之趣申渡入、

十日 晴 徳右衛門

一、掛屋伊兵衛義為御冥加金子拾両献上仕度旨、申出相窺候処、勝手ニ差上候様御沙汰有之、当月朔日差上候様前日沙汰ニ及置候処、前夕御停止ニ相成、右献金暫く延し候様□□昨九日切御停止明ニ相成候付、都合能候ハ、今日差上候様及沙汰ニ候処、用意宜敷候由二付、四ツ時二ノ丸へ持参致候様達ス、同心当番罷出白木台東ねのし多葉粉入包、中封小判拾両献上封印、右我等御席へ持出御用番へ掛屋伊兵衛為御冥加献金仕度旨申上候処、御聞濟ニ相成、則今日差上申候段申上ル、申上候由御返答、

一、金百足宛

本屋彦兵衛

山形屋岩太郎

右大手勤之節為待合宿相勤候付被下置候、

七月

一、鳥目三百文

右同断

七月

浅井屋長七

一、中庄宮社普請料御寄附之内、当戌年分拾両受取、

一、分銅改、後藤四郎兵衛名之由、役場へ参候事、

口上之覚

一、此度分銅改之儀、去ル未歲於江戸表ニ蒙仰、諸国一統江御触流被成下、此節近江国中分銅有無取調相改申度分二付、御領分中之町在共分銅所持之者ども員数帳面雛形之通相認メ、大津枿屋町近江屋清助宛、分銅役所旅宿江差出候様仕度、尤吉町杓村毎二所役人ノ不洩様篤与取調、員数帳并分銅共持参仕候様仕度奉存候、此段御聞濟被成下御領分中江御触流被成下候様奉願上候、以上、

分銅役所

後藤四郎兵衛名代

岩本勝太郎○

嘉永三戌歳

七月

膳所

御役所

一、雛形帳面持参、表書ノ左二記、

表書

年号月

分銅員数帳

何町

中書

一、何百目下分銅壹面

何屋誰所持

但数何程

一、何百目下分銅壺面 何屋誰改名

誰所持

右者何年何月、何国何郡何村何誰方江元元茂慥成者故、入魂を以譲
り遣申候付、此段御断申上候、

一、何百目下分銅壺面 何屋誰所持

右者何年何月何町誰所持之者譲り受、私所持仕居候付、御改請申度
差出し申候、右者此度分銅御改二付、町内家別二不洩様篤与取調申
候処、右之外所持之者耆人も無御座候、以上、

月日

何町

年寄誰 印

後藤分銅

御役所

一、御証文写耆通見セ候付写置、

覚

一、馬耆疋

右者今度後藤四郎兵衛名代之もの分銅改として、山城、大和、河内、
和泉、摂津、伊勢、近江、丹波、播^磨广国相廻り候二付、右九ヶ国從
江戸往来幾度も書面之伝馬無滞可差出者也、
割印 未五月朔日 保右印 岩太印

退出

新助

備輔印

大和印

佐渡印

河内印

土佐印

山城、大和、河内

和泉、摂津、伊勢 国
近江、丹波、播^磨 广

御料
私領

寺社領

問屋

名主

年寄

一、雛形帳二冊持参、内耆冊表書

年号月

分銅員数帳

何郡何村

右之外ハ前々写記帳面同断也、是ハ郡奉行へ廻ス、

十一日 晴 藤助

十二日 晴 遣番卯三郎

手伝

市兵衛

一、鳥目式貫文

右御厩新規井戸堀、格別骨折候付被下置候、

七月

十三日 晴 右野右衛門

一、式貫文市兵衛、金耆歩ツ、彦兵衛、岩太郎、三百文長七被下受取渡

一、郡方へ打合、分銅掛り中庄村又三郎、魚屋町万左衛門江申付、町中
触入ス、

十四日 晴 元次

一、大工源兵衛病死いたし候段届出候付、御中老を以申上ル、

十五日 晴 徳右衛門

一、今日、明日二ノ丸休日之事、

一、今晚、明晩町中灯籠廻り之事、

十六日 晴 藤助

十七日 晴 卯三郎

十八日 晴 右野右衛門

一、近江屋武次郎宅江、昨十七日夜宮馬場^ヲ裏^ニ盗賊^{イリ}入込候二付御届申上候、紛失物左之通、

一、錫德利^壱組 但し大サ八寸計、金毘羅大権現と印御座候、

一、天明越後浅黄立横嶋女帷子 壱ツ

一、木綿相小弁慶嶋女单物 壱ツ

一、同茶千筋女引時 壱ツ

一、同生壁小弁慶嶋女引時 壱ツ

一、同花色八掛引時 壱ツ

一、晒布相通し小紋女前垂 壱ツ

一、雪駄 壱足 一、茶真田^壱重草履 壱足

ノ九品

一、池田屋龜吉宅江、昨十七日夜稻荷馬場より裏へ盗賊入込候二付御届申上候、紛失左之通、

一、花色織色はつち 壱足

一、紺^カ紵布男半天 壱ツ

一、鼠^カ筋雪駄 壱足

一、茶式筋雪駄 壱足

一、紫真田^壱筋女^壱重そ^うり 壱足

一、半茶本鳥 式足

ノ七品

右書附差上候通相違無御座候、以上、

嘉永三年

町代

半兵衛

戌七月十八日

十九日 晴 元次

一、昨十八日昼後、与兵衛義御奉公ニ罷出候留主ニ而左之点数紛失仕候、

一、小倉地袴 壱ツ 一、結城嶋男单物 壱ツ

一、白かすり女帷子 壱ツ 一、ふうつう女帶 壱筋

一、緋縮緬裾除 壱ツ

右五品紛失仕候間、乍恐此段奉御届申上候、以上、

届人

七月

与兵衛〇

町代

万左衛門〇

一、分銅改二付、右懸り又三郎、万左衛門、明廿日大津へ差出候段届、

四 日記(四冊目) 嘉永三年七月(二〇日) 一二月

(表紙)

嘉永三庚戌年

日記 (朱筆)

七月ヨリ 川那辺壯右衛門

(本文)

七月廿日ヨリ

廿日 晴 徳右衛門

廿一日 晴 藤助

一、伊勢屋町於掛所、来ル八月七日夜五夜之間法座執行仕度、乍恐此段奉御願申上候、何卒右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

嘉永三年

戌七月

大津

永順寺○

伊七屋町

町代

彦兵衛○

但自坊聞届、申渡、
地藏会ヶ所

宮町 中庄村

惣吉宅 和吉宅

// 広小路 中浜田

大津町 魚屋町

太助宅 与兵衛宅

伊勢屋町

手伝喜助宅

中大手

御宮境内

木下町

常五郎宅

下浜田町

養蔵院

大須賀町

清次郎宅

木下村

御宮境内

網町

傳八宅

船町

善兵衛宅

右何レも盛物計

一、分銅改、昨日大津へ持参、今日請取参候、先年差出有之候内、家名断絶之向ハ無是非、其外家名有之候分、何レ譲り候哉、調断申聞候様申之候由、

御聞届、大目付へ案内、

廿二日 昨夕今朝二至迄風雨 卯三郎

一、清徳院本寺大津花階寺江住職繼目礼金之儀二付、去巳年清徳院講中之者ゝ添翰相願、本山知恩院江出訴いたし度旨、則伺之上添翰相渡候、其後本山二而双方呼出し二相成、調取掛り二相成候得共、埒片付不申、延々二相成来り、此比双方呼出し二相成、花階寺へ段々利害申聞有之候得共一向不相用、強情ニ申募り本山ニおゐても首尾悪敷、清徳院講中之方ハ、最初歎願之次第一応聞糺有之候切ニ而何理解も無之由、然ル処、先月末御停止、且盆中本山法用も有之候付、廿日迄右出入故障日延二相成、廿日二双方罷出候様被申渡由、然ル処、当地縁心寺挨拶人二入り、右故障下濟二可致二付、縁心寺江御任セ、并御書下ケ頂戴いたし度旨歎願有之候処聞届二相成、則大目付手へ本山書下ケ二願書相添被差出候、右願意、花階寺儀ハ法弟之儀、清徳院ハ隔壁双方同派と申無拠寺柄故、捨置候儀も難相成、(貼紙)「何卒」双方穩二事済候様致度、本山江も申立候付、当表於御役場而、御威光ヲ以理解被仰渡、納得事済いたし候様仕度、花階寺御尋之義ハ、拙僧御呼立被下候様と申願面、右ハ大目付中二而内見致し、大目付中二も右故障ハ花階寺、清徳院との出入、且花階寺義他領之寺故、当役場二而双方聞糺之儀も難相成、依之、本山へ出願二相成候次第、右他領との出入故障、縁心寺ゝ出願有之候訳も無之、何レ最初之手継も有之候、当役手へ相廻候由、理解申渡候哉相談有之候得共、最初

添翰差出有無之返答も無之、又講中之者江縁心寺願二付任セ候間、下濟可致と申達候も無之、縁心寺此表へ願有之候、迎理解申渡候筋二も相当不申候哉二相心得候段返答二及候、大目付中江縁心寺願書差出有之候付、御席江ハ差出候得共、御取上二可相成筋二ハ有間敷段申上有之談二而被差出候、

一、役前御席江御呼立二而、右故障一条二付、縁心寺ハ出願有之候得共、他領との故障、且先達而本山へ添翰被差出候得共、何等之返答も無之趣、先達而於本山二取調も有之、段々運ヒも付有之候様子、年数重り色々入組候故障、此方役場二而相調候義も六ヶ敷可有之候、旁以右縁心寺願ハ御取上無之、差戻し二相成候、乍去右縁心寺出願致候程之事故、清徳院講中之者、余り強情申張不申、程能事済二相成候得と理解可申聞旨御達有之、

右清徳院講中之者江ハ早速申渡入、

十八日

一、右於本山、縁心寺歎願之次第二着^(付)而ハ、何角事混雜二相成、於本山二難相分候哉二も相聞候、為念添手紙差出呉候様大目付中被申聞、廿日本山江罷出候講中之者江渡入

一筆致啓上候、残暑之節御座候処、弥御安全被成御勤役珍重奉存候、然者当地清徳院住職繼目礼金之儀二付、去ル巳年壇中共差出し添手紙ヲ以御頼得御意候処、願書御請取二相成、其後追々御取調二相成候処、先月下旬御穩便中、且盆供御法用之折柄二付、双方出入御浮置二相成、当月廿日双方罷出候様被仰渡候段致承知候、然ル処、当地縁心寺ハ歎願も有之、御聞届二相成候趣ヲ以、右御書下二願書相添差出有之候得共、元来花階寺清徳院之出入故障、且花階寺儀者他領之寺院故、当於役場双方聞糺之義も難出来候付、重役共へ申達候上、御本山御裁判御頼得御意候儀二御座候付、縁心寺当表二而差出候願

書ハ取上無之、差戻し二相成申候付、兼而御達し被置候御浮置日限相立候付、且中共罷出可申御繁用中乍御面倒早々御取調事済致候様致度、猶又為念右之段、御頼可得御意如斯御座候、恐惶謹言、

本多隠岐守内

七月十九日

川那辺壯右衛門

知恩院

御役者中様

廿三日 晴 右野右衛門

一、此節白米壹升二付百四拾六文之直段二付、七日送り之者共実二難渋仕候付、米仲共申談極難渋之者計百三拾式文ツ、二売遣度、尤無程新米も出来候ハ、少々直下り可申候、余り長キ事ハ逆も続キ不申米式百俵計用意有之候付、夫丈ヲ以右直段二売遣申候、且町々役人江引合、極難之向計壺軒前二一日壺升五合高ヲ限り、夕七ツ時ハ初夜迄売申度旨申出候、御席へ申上候処、思召無之段御返答、米仲一統と申二而も無之、柴屋庄兵衛、柴屋利兵衛、升屋礖五郎、掛屋伊兵衛、塩屋新左衛門、只今之処右五人申合、其外米仲共追々二相談いたし、加入致度者ハ同様二取計候由申聞、此段も御中老中へ申上ル、

一、地藏会二付、今晚明晚灯笼廻り之事、

廿四日 晴 元次

廿五日 晴 徳右衛門

一、丸屋弥三郎跡家御取次所之地面ト御家中江門番居宅境之壁、此間之風雨二而倒レ候段、膳所村ハ届出、右ハ門番入候為二出来之高壁囲故、御徒目付手へ申参り候様申付、猶相談可致旨申聞候、御徒目付ハ談有之、門番にしても御取次所二而も何レ二而も御上ハ出来候囲家申立呉候様申聞有之、右二付同心当番見分遣候事、

右見分差遣候塀二而、三間半計倒レ候由、右ハ門番無之前ハ御取

次所之地尻、西京院迄通り有之、其節御用地之地尻、西京院之堀倒レ候趣右御取次所続之家二居候者、当役場江届出可申哉、其替り之心得二而此度ハ役前、申立候得共、元来門番ヲ居候^{ヲキ}二付、堀围出来候事故、門番之方二付而も可然哉二候得共、御徒目付、申立呉候様談も有之候付申立候、乍併此度倒レ候処ハ、御用地之地尻、替り二候得共、門番裏手北之方堀、丸屋家境は倒レ候共、御徒目付手へ振候積り、

廿六日 暮 藤助

廿七日 晴 卯三郎

廿八日 晴 右野右衛門

廿九日 曇 元次

八月中

朔日 晴 徳右衛門

二日 晴 藤助

一、丸屋弥三郎跡屋敷地尻西北之处、先達而山元寛平江被下候、右地面江戸留守中二付、未渡相済不申、其俣引取ヲ待呉候様寛平親類、被申聞、寛平此節請取度旨申聞二付、今朝同心藤助、町代文助立会相渡候、尤両彦方ト先達而杭打繩張いたし減地面見セ承知二候得共、盆前序も有之、両彦手代由兵衛ハ近々右地面請取度由二付相渡可申、其節今一応参り候様申候得共、^(最カ)□早先達而見置承知致居候付、態々参り候二不及、町役江委細頼置候間、可然御取計被下候様申聞候付、此度呼二遣不申渡相済、右之段御中老中へ御届申上ル、寛平も支配頭江届有之、

三日 晴 卯三郎

一、分銅改之義、柏屋喜助、糺屋七兵衛、丸屋弥兵衛、米屋新蔵、枡屋

宗兵衛、右五人当時天秤無之段掛り役又三郎、万左衛門、断書差出候へ共断難立、本人町役付添差出申渡呉候様申出、町役江申達候処、今日右断申出候段届ル、

四日 晴 右野右衛門

五日 雨 元次

六日 曇 徳右衛門

七日 曇 藤助

八日 雨 喜六

一、高嶋郡知内村江戸屋市郎右衛門^(当カ)役場江出願二付御添翰来ル、一筆致啓上候、秋冷之節御座候処、弥御堅固被成御勤役珍重奉存候、然者其御城下大須賀町丸屋弥三郎江、同所町代藤屋文助奥書印形之証文を以、当領分高嶋郡知内村江戸屋市郎右衛門、去ル末年二月種代銀貸付置候処、返済相滞り候間、段々及催促候得共不致返済難渋二付、其御役場江出願仕度段願出候^(貼紙)「間□」相糺候処、右願意之趣無相違相聞候二付、願人中川市郎右衛門差出申候間、委細之儀同人、御聞糺之上宜御取計可被下候、右御頼可得御意如此御座候、恐惶謹言、

八月五日

松平時之助内

河合作左衛門

岡田良兵衛

那須□平

本多隠岐守様御内

川那辺壮右衛門様

乍恐奉願上口上書

一、御当所大須賀町丸屋弥三郎江、町代引請藤屋文助殿役印ヲ以、去ル未十二月銀貳貫七百貳拾三匁四分壹厘貸付申候処、元利相滞数度罷越精々及掛合候処、町代始組頭衆中色々申立、猶予致呉候様二被

相頼甚迷惑仕候得共相待居候、然ル処、追々利足相嵩甚以及難渋候間、埒方致呉候様遠路罷出及引合候得共、彼是と申入、当時致方無之趣被申聞候間、最早等閑二難差置、当月五日出立二而当地罷越、今一応町代始組頭衆中迄も及掛合候得共、迎も致方も無之様被申立、数日逗留仕掛合候得共、同様訳之儀を被申立、示談調儀不仕何共迷惑難渋仕候二付、乍恐不得止事御歎願奉申上候、右体町役印を以貸附申候金子、則引当乍請取彼是と申立候而者、義筋相立不申候段、御賢察被為成下、御憐愍を以大須賀町役人共急速被為召出、当時銀三貫七百五拾五匁七分式^(厘)り勘定致、早々返済仕候様被為 仰付被成下候様仕度、別紙証札并算用書相添此段奉願上候、以上、

松平時之助殿領分

高嶋郡知内村

嘉永三年庚戌年

八月

膳所町

御奉行所

借用申一札之事

一、銀式貫七百式拾三匁四分壹厘 利足月壹割定

右者種代銀髓二借用申処実正也、然ル上返済之儀者、来ル申年二月限り聊無相違元利皆済可申候、尤引当之義町役方江相預置候間、万一遲滞等有之候得者、町役人方々相立可申候、為後日之一札仍而如件、

膳所大須賀町

弘化四年

未十二月

高嶋郡知内村

江戸屋市郎右衛門殿

前書之通聊相違無御座候、万々一本人及遲滞候得者、預り置候引当売払、当役方急度勘定可申候、為其奥印如此御座候、以上、

未十二月

覚

未十二月

一、銀式貫七百式拾三匁四分壹厘 但元銀也かし

利足 三百五拾四匁四厘

但未極月申ノ十二月迄
但十三ヶ月分、月壹割

利足 四百匁七厘

但西ノ正月ノ十二月迄
但共十三ヶ月分、右同断

利足 貳百七拾八匁貳厘

但戌正月ノ八月迄
但八ヶ月分、右同断

元利×銀三貫七百五拾五匁七分式厘也

右之通証文并元利勘定書之写奉入御高覧候、以上、

松平時之助領分

高嶋郡知内村

嘉永三庚戌年

八月

膳所町

御奉行所

九日 雨 右野右衛門

一、右願書差出候付、大須賀町町役、江戸屋市郎右衛門双方呼出し下対談いたし候様申渡ス、

一、同夕下宿二而対談いたし候得共、一向落合不申候付仲人相頼候段、大須賀町方届ル、

十日 雨 元次

一、昨九日夜、当村五郎四郎方裏ノ戸をこち明盜賊入込候様子二付、家内吟味仕候処、左之品相失申候、

乍恐此段御届奉申上候

一、木綿嶋古單物男物 貳ツ

一、右同断 女物 壹ツ

膳所大須賀町

町代

藤屋文助印

一、木綿嶋引とき裏共男物 壹ツ 一、右同断 引解裏共女物 壹ツ
一、古帷子半てん男物 壹ツ 一、古手拭 壹ツ
一、木綿小立古單物 壹ツ 七品
右之通相失申候、以上、

庄屋

戌八月十日

堀池又三郎○

十一日 雨 徳右衛門

十二日 藤助

- 一、来ル十五日、神事初放生会
- 一、九月十四日、神輿拜殿へ出し申候、
- 一、同十五日、神事祭礼
- 一、同十六日、別保村草木
- 一、同十九日、新羅大明神神事御湯
- 一、同廿一日、宮町草木

右例年之通執行仕候、尤境内へ諸商人立入申候、依之御届申上候、以上、

若宮八幡神主

嘉永三年

齋藤筑前○

戌八月

右御聞届、申渡、大目付へ案内致ス、

十三日 晴 喜六

十四日 晴 右野右衛門

- 一、来ル十五日夜、例年之通り信心之輩を千灯奉納仕度段申出候間、此段御届申上候、万雨天二候ハ、順延二仕度候、以上、

八月

齋藤筑前○

御聞済、申渡、大目付へ案内、

十五日 晴 代藤助

- 一、盆銅改之義二付、柏屋喜助、丸屋弥兵衛、米屋新蔵、枡屋宗兵衛

相譲り候処、譲り受方御両時退転及絶家候、行衛不相知申断申候
処、右ハ相済候様子ニ候得共、新銅買請候様被申聞、何レも追々衰
微ニ及ひ天秤入用ニ無之候付譲り候仕合、夫故新銅申請候共、不用物
右不用物申請候有余も無之段断申候得共、夫二而者趣意立不申候段
申聞候、此後京御役所へ御呼出しニ可相成哉も難計候得共、此節高
直之米買ニ追ハレ、中々不用之分銅申請不相成候段、申切候積りニ
御座候段、膳所村庄屋申出ル、
七、八日比ニ候得共付落申爰二記、

一、先達而米直段追々高直ニ相成、今日暮之者難渋之趣ニ付、米仲共
壹升ニ付百三拾式文ツ、ニ壳遣候段申出、思召も可有之哉と存申上
候処、其節何之思召も無之段、御返答其後追々ニ直段上り白米壹升
ニ付百五拾式文ツ、乍併米仲共難渋之者へ壳候直段ハ百三拾式文
と申上候得共、百三十文ニ而壳遣居申候処、夫二而も中々六ヶ敷大
儀ニ付、百廿文ツ、ニ壳遣申候段申出ル、其節之咄ニ最初ハ極難之
向計町役々へ当壳遣し候処、一日分五俵余壳場柴屋利兵衛、掛屋伊
兵衛両家ニ而右之米高ニ相成候得共、追々極難之部類相増、此節ニ
而ハ一日分七俵余り入候由、右等之趣申上、先年米高之節安直ニ御
払下ケニ相成候例も御座候、御救と思召、此度も御払下被下様、右
御聞届ニも相成候得者、何卒米仲共直下壳米俵数も限り有候事、右
之米壳切ニ不成、已前ニ御上る思召ヲ以御払イニ相成、其後未米直
段も不下候得者、米仲共残米ニ而払為切候半而ハ、御不都合ニも可
有之哉ニ存候、無左候てハ最初ハ米仲共壳米ハ式百俵計用意有之由
右壳候ニハ御上る直下ケ御払ニ相成候得者、毎迄ニ而も米直段下り
候迄御続ケ被遊候半而ハ、如何米仲共直下壳ハ是切ニ而米無之、明
日ハ世間並之米買候様と申候而も不苦、御上る御払下ニ相成米ハ、
右ハ難申哉ニも存候、御評義之上色々御談も有之候処、矢張米仲共

売米払切二相成候前二一応御沙汰申上候様、無程新米も出来候事、格別長丰事も有之間敷哉、精々候間も有之候事、仲共売米切仕舞候而ハ間々不合、今一兩日二而払切と申処二而御沙汰可申上様、何レ思召可有之由御中老方御沙汰有之、

十六日 晴 徳右衛門

一、京都中井岡次郎殿代替り二付、右御歛として当町大工職之者共方御祝差上可申、右持参田中半左衛門十八日上京可致由申聞候、尤大工共一統より金貳兩計之事之由、右二而も困窮之大工共故甚難渋仕候付、何卒先年故障一条後、大工手間五十人年々御上江差上来り候、右之内少々御減し被下候半而ハ、中井家之祝物出来難旨申之候、右ハ申立筋合も難相立訳、半左衛門右一条ハ引受之事、是非此度ハ献金致さでならぬ事二而可有哉、是迄右様之義も無之、只今手始二相成候事、然ル時ハ始終之例二も相成候「付、是非献」金致さねハならぬ事なれハ、成丈減少相成候様右野右衛門方半左衛門下宿へ申遣候処、半左衛門申聞候ハ成程御尤二存候、成丈減少いたし、則大工共へ談候趣二而大工共方減少書付役場へ持参ル、然ル処、猶又大工源兵衛参り、右先年之引合書付之内、若右等之祝物二も不及義、書留二無之候哉、一応御調被下候様申出取調候処、田中半左衛門江右一件掛り、鍵屋久兵衛江金五拾兩預ケ置、此金子久兵衛方中井家江又預二相成、年々利足ハ下り候趣、右下り利足ヲ以、年頭八朔万端取計、当所大工惣代半左衛門可相勤候、右代り二鍵屋久兵衛相勤候段証札有之、大源へ是ヲ見セ年頭八朔万端と有之候付、此旨を以今一応半左衛門江引合候様申付ル、

十七日 晴 藤助

十八日 晴 喜六

十九日 晴 右野右衛門

一、元当町丸屋弥三郎在宅中二、高嶋郡知内村江戸屋市郎右衛門方高嶋種六拾石、^老石二付百五拾匁かへ延銀之約定二而、此代銀九貫匁内老貫匁差引、差引残銀八貫匁段々差入、当時二而ハ貳貫七百匁余残銀二相成候処、何分弥三郎家出候儀も御座候間、延々二相成候段、何共不都合之次第二御座候、然ル処、引当等も御坐候二付、私印形仕請合置候得共、当時二而者左之引当間二合不申候段、私方勘定可致候義二も難相成候得者、市郎右衛門方より濟方致呉候様致催促候二付、大ニ当惑心痛仕罷居、元来私義困窮者二御座候処、近年殊之外必至難渋二落入罷居候二付、銀子才覚返済之義、中々以難出来、乍併加判仕置候事二御座候得者、追々及引合候得共、一向取敢不呉、甚以困り入申候、然ル処、此間右市郎右衛門義御添翰ヲ以御願被申上候二付、早々下対談仕候様被 仰付成下難有仕合二奉存候、則追々対談および候様ハ、何分出奔いたし、当人不罷居候義故、元残銀貳貫七百匁余之内江銀老貫匁二而為相濟呉候様及対談候得共、中々聞入不申、夫故又候余人ヲ以右銀老貫匁之上江大分之勘弁いたし候而、濟方相成候様段々相頼候得共、是迎も中々以聞入不申、是非共皆金返済致呉候様申之候二付、猶又談合「一」元銀高貳貫七百匁余之内江当時金拾兩差入、残銀之儀者無利足二而拾五ヶ年賦二致呉候様達而相頼候得共、是迄同様之儀二而少も取敢不申、最早此上者勘弁致方も無御座、誠二以難渋当惑仕居候付、不得止事御願奉申上候、何卒格別之以御憐愍、右市郎右衛門儀御召出之上納得仕候様、乍恐御利解被為仰付成下候様、幾重二も御願奉申上候、右願之通御聞濟被為成下候得者、広太之御慈悲与如何計冥加至極難有仕合二而奉存候、以上、

大須賀町

嘉永三庚戌年

藤屋文助〇

八月

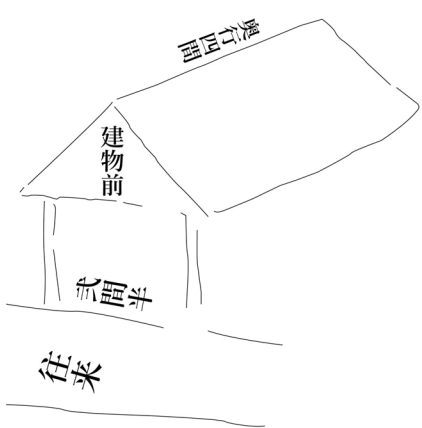
一、米仲共直下ケ二而極難渋之者共白米小売致候先例も有之候付、役前
方直下御売米之儀申上候処、何レ思召可有之、右米仲直安二而売候
米式百俵払切二相成候前二御沙汰申上候様御達有之、一日二七俵之
当り最早三十日二相成候間、大体売切時節と存候得共、内々柴屋利
兵衛江内々相当り候処、二百俵之内御蔵二少し残り有之、今日請取
申候此米ヲ以、廿三、四日迄ハ続可申積り之趣申聞候付、其段御中
老小栗九郎三郎殿江申上候、無程米直段今以高直二付、末之者難渋
之趣格別之思召を以、百俵直下御払被下候間、此段可申渡旨、右之
趣御元メ江も御達有之候間、引合請取候様との御沙汰有之、御元メ
江引合、米仲共売米壺升二付百五拾式文之処、百廿文ツ、二而売遣
居候、右之直段二而売レ候直合を以御払下ケ二相成候、御勝手へ右
御達し有之、

但御元メ阿閉権左衛門江引合候処、前御達之通委細承知之由、
然ル処、是迄米仲共二而直安二売遣候米ハ払切二相成、今日方
ハ御上方御憐愍ヲ以下直二御払下ケ二相成候段、并俵数も百
俵直安二御払下二相成と申儀も米売場方持寄無之候半而ハ、米
仲共之安売 御上方之安売と申儀難少分此境之立候、且百俵直
下ケ御払二相成候義不申候ハ、いつ迄二而も下直之米買へ候
様相心得可申哉、此等之義申付置候様被申聞候、柴屋利兵衛江
右之趣申達、米受取之儀者阿閉権左衛門へ引合候様申付ル、
一、伊勢屋町掛所本堂大破二相成候処、少檀家二而修覆難出来候二付、
御家中并郷中佗鉢御免之義御願申上度、右助力を以兎も角も取繕仕
度奉存候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合
奉存候、以上、

嘉永三年 大津 永順寺〇

戊八月 伊勢屋町町代 彦兵衛〇
御聞濟、大目付へ案内、但役所鑑札渡積、
廿日 晴 代藤助
一、私居宅東隣当時私持壺軒役之借家二御座候処、大破二相成候二付、
建替仕、是迄藁屋根二御座候得共、此度瓦屋根二仕度奉存候、右二
付御時節柄何共奉恐入候得共、御定之通瓦代被下置候様、乍恐奉願
上候、格別之御憐愍を以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉
存候、以上、

嘉永三年 願主 坂元屋
戊八月 町代 九右衛門〇
表間口五間地面之内、建物間口式間半、裏行四間、西東流レ高サ壺丈
坂元や本家と此建物之間
高塀式間半
市兵衛〇



廿二日 晴 藤助
此度直下御払米請取候段米仲真届出、

廿三日 晴 喜六

一、永順寺^(托)佐鉢御聞濟二付、郷中之処、郡奉行江談候処、触流し致可置由被申聞候、尤郷中^(托)佐鉢罷出候ハ、郡方^ル先例鑑札相渡候由、拵置候様被申聞、

廿四日 晴 右野右衛門

一、御用番柴田亘理殿^ル御呼立罷出候処、郷中之者近比名目銀拜借いたし候者多分有之趣相聞御取調之処、近比月賦貸附始り、右借用之者大分有之趣、名目銀借用之儀者兼而御制禁二候処、借用いたし不埒之義二候、右二付口入人可有之、当町之処も目付手二而相調候処、八軒町中松、浜田町小間物屋善七名前差出候得共、慥二相分不申候由猶一応当役二而相調弥其通り二候ハ、名目銀借セ話急度不相成候趣、差留他参留可申付置、其外直々借用之者も可有之哉二付、右等之儀も庄屋町役へ申付、誰々と申義并何程と申儀相調候様御沙汰有之、尤糺七、丸屋等之年賦借之分ハ先其尽、只今月賦借之分取調候様御沙汰有之、

一、坂元屋九右衛門持借家建替二付、御定之瓦代被下相願候処、前通片流可被下御定二候得共、此度者小間之方表江出候立前差当右様之例も無之、表間口之間数丈奥行二而被下候御定二相成候間、以来共右之通小間之方表へ出候節之例二留置候様御達し有之、

廿五日 晴 代藤助

廿六日 曇 徳右衛門

一、昨廿四日夜、当町内甚兵衛家表こち明有之候二付、家財吟味仕候処、左之通紛失有之候、全盗賊与相見候二付此段御届奉申上候、

一、男白嶋単物 壹ツ 一、男小倉帶 壹ツ

一、同小弁慶帶 壹ツ 一、男花色小風呂敷 壹ツ

一、まへたれ 壹ツ 一、合羽田はこ入 壹ツ

一、錢四百五十文 〆七品

右之通相違無御座候、以上、

嘉永三年

戌八月廿五日

廿七日 雨 藤助

一、来九月三日逮夜^ル四日目中迄、伊勢屋町於掛所、例年之通報恩講執行仕度、猶又四日初夜^ル七日初夜迄法座執行仕度奉存候、右法会中法談同宗之内相招相勤申度奉存候、此段御許容被成下候様御願奉申上候、右書付ヲ以御届奉申上候、以上、

嘉永三戌年

八月

客僧大津清源寺

御聞届、大目付へ案内致ス、

廿八日 晴 喜六

一、江戸屋市郎右衛門出願之二条二付、毎々役所へ催促罷出長々御当所二滞留二相成迷惑いたし候、聊も引候了簡も無之、年賦等之相談も不承知之趣、且最早引取不申候半而者、不相成用事も有之候、迺も藤屋文助^(ト)之相談不相成候付、願下ケ二致度段申之候付、猶又精々藤文へ理解申聞候^(ト)之処、則役所へ江戸市願下二参り居候故、文助直対談致度候処、迺も相談落合不申、夫故文助別々理解申聞候得共、当金廿五両差出、残金十五ヶ年賦、右外二勘弁出来不申、又見通し付不申義約定いたし、後日間違候而ハ如何二付、如何様勘弁いたし而も、右方出来不申段申聞、其趣市郎右衛門返答為致、役場方口

添致候得共中々承知不致、依之市郎右衛門を申聞候通願下遣添翰返書渡入、

御札致拝見候、仰之通秋冷之節御座候処、弥御堅固被成御勤珍重奉存候、然者当城下大須賀町丸屋弥三郎江、同所町代藤屋文助奥書印形之証札ヲ以、御領「分高嶋郡」知内村江戸屋市郎右衛門江、去ル未二月種代銀払残二相成、毎々催促有之候得共、濟方対談不相調及遲滞候付、当役場江出願致度旨御役場へ願出候付、則願人中川市郎右衛門御差出御紙面之趣委細致承知候、然ル処、丸屋弥三郎儀先年家出いたし、右二付町内二も色々入組候厄介も有之趣、乍併被仰越候一条精々理解申聞候処、当金貳拾五兩差入残金十五ヶ年賦二いたし呉候様市郎右衛門江相頼候得共、承知も難出来旨役場も同様申聞候得共、承知難相成由二而願下致度段申聞候、依之任其意願書下ヶ遣候、此段御承知可被下候、右御答旁可得御意如斯御座候、恐惶謹言、

本多隠岐守内

八月廿八日

川那边壯右衛門

松平時之助様御内

那須宗平様

岡田良兵衛様

河合作左衛門様

廿九日 晴 右野右衛門

一、私義先達而る持病御座候処、近比毎々差起り甚難義仕候二付、引退仕、跡相統之義第三次郎江相譲り、米屋藤次郎と名前相改メ相統為致度奉願上候、尤是迄通り乍恐年始御礼、且御参府御帰城之節、御見送り御出迎奉申上度、此段奉願上候、何卒格別之御憐愍を以、右両様願之通御聞濟被為成下候ハ、重々難有仕合二奉存候、以上、

願主

嘉永三年

米屋藤右衛門〇

戌八月

組頭

久五郎〇

同

嘉兵衛〇

町代

小兵衛〇

御聞届、

一、去ル廿一日御用番を御達、名目銀借用之儀口入人可有之、内々御徒目付手二而取調有之候処、八軒町中杉、浜田町亀屋善七名前御渡し、乍併慥二是と申儀二而も無之趣、猶当手二而得と相調候様御達二付、取調候処、中松儀ハ宮町勘兵衛と組合三拾兩計借居候、七分ハ兩人入用二遣、三分程之処八軒町久蔵、又左衛門江かし候由、善七儀者当町江四口計セ話いたし候趣、人数十四人計、内一人鳥居川村二有之、并名目銀直借之向も可有之、右も一応取調候様御沙汰二付、今廿九日当町庄屋、町代呼出申達候事、

一、名目銀借用之儀者兼々御制禁之事、一統承知之筈、右沢ハ名目銀借用いたし候へハ、取立方嚴敷無抛家財ヲ売払、或ハ家迄も売払候様之次第二成行候間、御セ話二思召而之御制禁二候、「然ル処、近比月賦貸附相立候趣、右名目」銀借用之者も可有之哉二相聞、不埒之義二ハ候へ共、町々二而右借高人別二相認差出可申、尤口入人何某と申儀も書加可申、且又郡方手二而も調有之趣、当町之処郡方へ差出候向ハ其訳書分、郡方江不出分ハ其訳書分、不洩相調早々差出候様申達入、

一、私儀御蔭を以郷宿渡世日増二繁栄相続仕来、御冥加之程難有仕合奉存候、然ル処、当時丸屋弥兵衛義商売休居、猶又山形屋長三郎義も御用之外精々手ヲ縮、同様之振合二御坐候而、渡世用日々遣ひ種有類不都合二而当惑仕候義時々御座候間、此度私南店之方江右遣ひ種

を兼、有類少々計商ひ仕度様奉存候間此段御願奉申上候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

紺屋町

願主

嘉永三年
戌八月

藤屋嘉七〇

町代

浜屋半兵衛〇

右口上二而申上ル、答無之、

晦日 晴 元次

一、永順寺托鉢御家中并当町鑑札、町代藤兵衛へ相渡、同人永順寺同道礼申出、

但し印札町代方二預り置、托鉢出度毎二受取候様申達ス、

九月中

朔日 晴 徳右衛門

中庄村

五郎四郎

喜四郎

一、鳥目 三百文宛

右先達而盜賊町番二而召捕候付被下置候、

九月

二日 曇 藤助

三日 昨夜の風雨 喜六

一、私儀御蔭を以家名相続仕来候処、年罷寄其上病氣二付引退仕、御米仲之義ハ是迄通悴新左衛門江被為 仰付被下度奉願上候、何卒右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合二奉存候、以上、

願主

塩屋新右衛門〇

九月

年番

右申上

同日

一、

右親新右衛門時之通仲二被 仰付候、

九月

四日 晴 右野右衛門

一、町内新兵衛後家さき并悴久吉難渋二付、渡世難出来候付、親類共相談之上、当九才二相成候悴久吉義者、親類竹屋久五郎方江預り、後家さき義者得心之上木下村弟文次郎方江引取離縁仕候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

木下町新兵衛親類惣代

嘉永三年
戌八月

竹屋久五郎〇

町代

小兵衛〇

聞届、申渡、

一、木下町新兵衛後家さき与申者、此度不縁二相成、当村弟文次郎方江引取、宗門之儀ハ差加江申候二付此段御届奉申上候、以上、

木下村

願主

嘉永三年
戌八月

文次郎〇

庄屋

中西又次郎〇

聞届、申渡、

一、当町内与惣吉宅、先年類焼仕、此度間口五間二奥行三間之壹軒役家、瓦屋根二家作仕候、右二付御時節柄奉恐入候得共、家作料被下置候様、并先達拝借被仰付候内御下ケ銀奉願上候、右願之通御聞濟被為成下

掛屋伊兵衛〇
御掛屋庄兵衛〇

塩屋新左衛門

候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌九月

宮町肝煎

繁八〇

庄屋

田中与次兵衛〇

一、網町坂本屋九右衛門東隣之借家立替願通承届候、今四日〆普請取掛り候付、囲付置候段、

届出、大目付へ案内致ス、

一、金三両式歩

宮町与惣吉

右一昨申年類焼之处、此度家作いたし候付、為家作料被下置候、

九月

五日 晴

元次

一、永順寺托鉢印札、郡方〆請取渡ス、

六日 晴

徳右衛門

七日 晴

藤助

八日 晴

喜六

一、江戸屋市郎右衛門、先達而添翰ヲ以出願いたし、藤屋文助へ段々理解申聞候处、当金廿五両差入、残金十五ヶ年相談いたし候得共、江戸屋一向承知不致、役場〆も同様江戸市へ理解申聞候得共、同様申張不承知之上願下致度申聞候付、任其意願書下遣候、然ル处、又候今日添翰ヲ以願書差出候付、先達而理解之趣不承知被申聞、其上願下いたし度旨、依之願下遣候、然ル上者当役手手放し二相成候事、其方二而文助へ対談可致、其模様ヲ以願出候ハ、取計も可致哉、今更文助呼出し理解可申謂無之、尤先達而ハ如様之談不承知之趣申候得共、此度加様勘弁いたし候と申儀ならてハ、文助相談二乗り申聞敷訳合二存候段申渡ス、

一、御報致拝見候、如仰秋冷之砌御座候处、弥御堅剛被成御勤珍奉存候、然者其御城下大須賀町丸屋弥三郎江、同所町代藤屋文助奥書証

札を以、高嶋郡知内村江戸屋市郎右衛門より種代銀滞之儀二付、再々及掛合候得共、埒明不申候付、其御役場江歎願仕度段申出候間、一通り相糺候处、無相違相聞候二付、不得止事差出候处、御役場二おゐても御聞糺之所、丸屋弥三郎義者先年家出致し、町内二も色々入組厄介も有之趣二候得共、前頭一条精々御談被下候处、金貳拾五両差入、残金之分十五ヶ年賦二いたし呉候様、相手方〆市郎右衛門へ談頼候得共、承知難出来由申聞候付、御役場二おゐても尚又段々御諭被成候得共、承知難相成趣二而願下ケ致度段申聞候二付、其意二御任願下ケ二相成候段、御猪表趣具二承知いたし候、右二付市郎右衛門〆一通り相尋候处、御申越之通申聞候上、此上者京都御番所江出願罷出度段申聞候得者、右様相手方江御利解之上、濟方之儀御談被下候得者、再応対談二もおよひ可申候所、無其意願下ケ等いたし候義者全心得違之段及察当、此上 公辺御苦勞二も可相成訳柄二而も無之二付、今一応示談之上事済二可致旨、種々理解為申聞、尚亦再願差出候間、近比乍御面倒相手方被召出、今一応御利解被成下候様致度、右御頼御答旁可得御意如斯御座候、恐惶謹言、

九月六日

松平時之助内

河合作左衛門

岡田良兵衛

那須宗平

本多

川那

乍恐以書付再御願奉申上候

一、御当所大須賀町丸屋弥三郎并町代引請藤屋文助殿役印を以、期月証文取之、去ル未十二月銀貳貫七百廿三匁四分壹厘貸遣し置候处、約

定及違変、期月過去候而も返済不仕候二付、是迄数度罷越及懸合候得共、町代始組頭衆中品能申延而已仕、猶予致呉候様相頼候付、乍迷惑相待罷在候処、追々利分相富難渋仕候間、引_レ及懸合候得共、当節二相成致方無之趣被申聞、最早等閑二難差置、無抛先月五日領主添簡を以国許へ出立二而御当地江罷越、尚又再_レ心懸合仕候得共、同様之儀被申聞、迎も下方二而示談相整不申難義仕候間、乍恐不得止事御歎訴奉申上候、一通り御調被成下置難有仕合二奉存候、相手方二而も御利解相弁候哉、夫々懸合二相成、既二元利銀_レ高之内當時半銀差入、残銀拾五ヶ年賦之懸合有之候得共、何分私心底二陥兼願書御下ヶ奉願上歸村之上、領主役場江其段相届、模様相替出願可仕哉之旨申上候処、被仰聞候二者、格迄懸合有之候上者、今一応当御役場江御頼書差遣し候間、罷出再願可申上旨被仰渡、依之不顧恐も再御歎願奉申上候、前書之始未被為_レ訊問召、何卒格別之御慈悲を以大須賀町役人共被為_レ召出、御利解之上別紙証文面之義筋相立、元利早々済方致候様被 仰付被成下置度奉願上候、以上、

松平時之助殿領分

高嶋郡知内村

嘉永三庚戌年九月

中川市郎右衛門〇

膳所町

御奉行所

右願書持参市郎右衛門罷出候、役所二預り置候、後刻右之趣_{承之}先参り候節掛合段々理解申付、当金廿五両、残銀十五ヶ年賦相談いたし候得共一向不承知、役場_も口添致し候得共、是以承知不致願下いたし候事、此度同様之事二而罷出候訳無之、模様相替り、先達而ハ格迄之応対二相成候得共、今少規模付加様是程ハ私勘弁可致と申願書差出候筈之処、同様之訳二而ハ被取上難キ儀、乍然地頭所之添簡も有之候事故、願書役場二預り置可申、精々下方対談之上、其

模様ヲ以願出候ハ、品_も取懸り可申、尤先掛合ハ不承知故、最早流レ二相成候、役場も手放レ二付今更大須賀町呼出可申筋無之段申渡ス

九日 晴 右野右衛門

一、九月十七日、八日、本山前住上人七回忌引続廿二日迄永代経執行仕度候間、此段御届奉申上候、以上、

嘉永三年 戊九月

専光寺〇

客僧大養寺隠居、承届、大目付へ案内、

一、私義不調法者二御座候処、御太切之御役儀以御蔭免も角も勤来り難有仕合奉存候、然ル処、私義兼々多病二而勤り兼甚以心配仕候二付、何卒退役被為 仰付被下候様奉願上候、格別之御慈悲を以、右願之通御聞届被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

乍町代

嘉永三年 戊九月

又左衛門〇

組頭

喜蔵〇

一、当町内柳屋喜兵衛後家いそ儀、去ル五月勝手二付、魚屋町江借宅仕、当町内持家之儀ハかしや二仕候而少し二而も借財向之助二相成候様と存居候得共、時節も悪敷かり主も出来不申、右二付当町内持家江歸り申度、親類共之セ話二相成候而、相続も仕度候様申之、此段御届奉申上候、右御聞済被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

大津町

嘉永三年 戊九月

柳屋いそ〇

親類

米屋金五郎〇

町代

儀五郎〇

一、川屋彦次持家此度辰蔵与申者買得仕度、尤何方之差構も無御坐候二

付、御割印之沽券相添、彦次も譲り申度右兩様奉願上候、何卒御憐愍ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

九月

売主

彦次〇

買主

辰蔵〇

五人組

長七〇

肝煎

七左衛門〇

庄屋

竹内新左衛門〇

一、先達而る米高直二付、直下ケ御救米御下ケ被成下、御蔭を以、末々之者取続仕難有仕合奉存候、然ル処、此節右御米払切二相成候得共、余り高直二御座候付、末々之者共必至難涉仕候付、御時節柄恐多奉存候得共、尚又御米直下ケ二而御下ケ被成下候様、乍恐奉願上候、何卒格別之以御憐愍右願之通御許容被成下候ハ、御蔭を以兎も角茂相続可仕与、莫太之御慈悲重々難有仕合可奉存候、以上、

九月

当町代惣代

万左衛門〇

半兵衛〇

庄屋惣代

小西藤吉〇

堀池又三郎〇

十日 雨 元次

一、江戸市役所江罷出、藤文江引合候様被仰下候付引合候得共、仰之通最初之応対者流レニ致し、新之嘶二而銀壱貫目差入可申由、迎も納得難相成願下ケ致度段申之、一、二遍位之応対二而ハ落合申間敷、精々引合候様申聞候処、右る少も増候義出来不申、左候ハ、御役所る御

呼出二而御理解有之共、相成間敷哉念推候処、右壱貫目之上少し計之増金ハ可致候得共、出来不申候趣何程増候哉相尋候処、包金位ハ差出し可申、夫二而ハ先被申候高二も不相成如何哉、其節者借呉候へと有之、心当有之候得共、最早破談二相成候而ハ、右之口も出来不申候趣申聞候、夫二而ハ迎も嘶合二相成不申願下致度、且今晚大津迄引取度荷物も最早差出し申候由、御返翰之義者宮町平助へ御渡被下候様申聞候、暫宿二扣候様申置、役場る平助呼二遣し、先対談ハ成程破談二ハ成候得共、一先右応対之口上も有之候事捻戻しならぬと申訳二も有之間敷、乍併先市郎右衛門手強申切引取候事故、役場る挨拶等之義ハ難出来、其方心得二而文助方へ引合可申、其模様ヲ以取扱も可相成旨理解申聞候願書共差戻ス、平助後刻罷出、藤文江掛合候得共、中々相談出来不申候趣申出、返翰平助へ明日相渡候積り、

十一日 晴 徳右衛門

一、御再書致拝見候、如仰秋冷相増候処、弥御堅固被成御勤役珍重奉存候、然者当城下大須賀町丸屋弥三郎江〔貼紙〕「以前」町代藤屋文助奥書証札ヲ以、高嶋郡知内村江戸屋市郎右衛門江種代銀払滞之儀二付、再々及掛合候得共埒片付不申、当役場へ歎願致度段申出候付、先達而御差出被成、則藤屋文助へ段々理解申聞候処、当時金貳拾五兩差入、残金之分十五ヶ年賦二いたし呉候様、文助る市郎右衛門江頼談候得共、承知難出来由於役場も市郎右衛門江理解申聞候得共、是以不納得之趣二而願下度申聞、不得止事任其意願書下ケ遣候処、引取之上其御役場江御届申、且京都 御番所江出願致度段申之候付御利解之上、猶又当役場へ被成御差出候条委敷致承知候、然ル処、先願之節藤屋文助へ段々理解申聞、漸当金廿五兩、残金十五ヶ年賦対談之運ひ二及候処、市郎右衛門申聞候ハ厘毛も引不申、年賦等之義相談一向取敢不申、手強申切願下いたし、其上当役江ハ二度不罷出候趣申

切引取候事故、前段之運ヒ破断流レニ相成、当役場も手切ニ相成候付、今更文助ヘ利解可申筋も無之、乍然又候御添翰も被差越候事故、市郎右衛門江先之手続ニ而ハ対談も相成間敷、此度ハ勘弁を加ヘ実意之「^(貼紙)応対」いたし、其模様ヲ以申聞候ハ、取計も可致、精々引合候様申聞候処、両度計掛合も有之趣ニ候得共、対談落合不申、又候願下致度段申聞候付、昨夜市郎右衛門代人江前段之破談ニ相成候次第故、一通りニ而ハ破談戻しも相成間敷、余人ヲ以実意之応対いたし候ハ、何とか模様も相附可申哉品付候ハ、取計も可致ニ付、今一応引合候様申含候処、引合も有之候得共迎も落合相談出来不申、弥願下呉候様申出候願書被遣候、此段御承知可被下候、右御答可得御意如此御座候、恐惶謹言、

九月十一日

松平時之助様御内

那須宗平様

岡田良兵衛様

河合作左衛門様

本

川那辺壮右衛門

一、昨日、当町庄屋、町代方為御救直下御米御払下之儀願書差出申上置候処、今日百俵直下御払下ニ相成候段、御中老九郎三郎殿方御達有之、庄屋、町代、米仲庄兵衛江申達ス、

十二日 晴 藤助

一、私義病氣ニ付、来ル十五日御祭礼難相勤、例格も有之、旁鞭崎八幡宮神主、大神河内頼申度候、此段御聞届奉願上候、以上、

八幡神主

嘉永三年

戌九月十二日

承届、申渡

斎藤筑前〇

一、宮町与惣吉家作料三両貳歩、中庄村五郎四郎、喜四郎江三百文ツ、六百文切手請取当番へ渡ス、

十三日 雨 喜六

十四日 晴 右野右衛門

一、八軒町町代又左衛門多病ニ付、町代退役願書差出候得共、内実極難渋ニ而難相勤、三ノ丸様へ内々雇ハれ出候様子ニ相聞候、右代り同町ニ頓与人物無之、弥右衛門内々申聞候ハ、縄手へ甘酒店出し来り商売ニいたし稼居候由、右止候而者外ニ何も商売無之、又宿ニ而売候分ニ而一向銭嵩も不揚、渡世ニも難相成由、左候得者、外ニ町代相勤候人物も無之事、宮町江相頼、相応之仁物出来候迄兼持之儀内意申聞候得共、宮町へ相頼候も残念ニ存候由、弥右衛門方へ内引取之祖母有之候由、此者先成丈縄手へ出し手支候節ハ、弥右衛門手代りニ縄手出候儀内々相含置候事、

一、右又左衛門極難渋ニ付、町代難相勤退役願出候、右代弥右衛門江申付度思召相伺候処御存寄無之、

八軒町弥右衛門

右町代役申付候、

九月

但し役所ニ而申渡ス、

一、宮町類焼与惣吉家作いたし候拝借之内、百四拾貳匁分五厘切手受取、当番江渡ス、

一、八幡神事ニ付、今晚、明日同心廻り之事、

十五日 雨 元次

一、此度御救として直下米御払ニ相成、先之通壹升ニ付百貳拾文ツ、売遣候、然ル処、大林村江も同様売遣候趣御勝手方江米仲共方書付差出候趣ニ付、御勝手方大林村願有之趣ハ承知不致、一通り町人とも

違候事故、大林之処ハ除キ売捌候様被申達候由、右二付大林村より御徒目付手へ願立候付、大目付る被申置候趣大林村へ願立と申儀も如何、矢張是迄之通入我入売遣候而可然、乍併大林村之内二而も兎角も暮し居候者も可有之、右之者ヲ除キ必至難渋之者計売遣し可申、且又大林村一体二下直之米手二入候ハ、「一」、夫二而差支候付、得と相調成丈人数少二相成候様、大目付方へも達置候間、此旨相心得可申達旨、御中老九郎三郎殿へ御達有之、柴屋利兵衛、庄屋又三郎江申達、夫へ通達有之候様、

一、御元々る前文御達有之候、然ル処、大林之寺坊主も右米買参候由、当町共寺院坊主之儀者御用相勤候者二而も無之、且中へ世話致候事故、凡而寺院ハ右直下米買候儀停止申渡呉候様、重根九郎右衛門へ被申聞候、右之趣米仲柴屋利兵衛、庄屋又三郎江達、

一、拙者心得二而、右両人之者江若無抛売遣候者、不時二出来候節、其方共含二而誰某江売候との義、書頭す取計候様申含置、

十六日 晴 徳右衛門

十七日 晴 喜六

一、稻荷社御屋ね之とゆ 竹

一、御百灯台 一、井戸屋形

一、居宅屋根所々 一、裏境之土塀

右五ヶ所及破損候間、何卒急々御見分之上、御修覆被成下候様奉願上候、以上、

嘉永三年

戌九月

稻荷社神主

斎藤石見○

代斎藤筑前○

一、当町名目銀借用之者共名前差出、扣役所二有之、略ス、

十八日 晴 右野右衛門

一、役所諸帳面虫干之事、

十九日 曇 元次

廿日 雨 喜六

廿一日 晴 右野右衛門

一、米屋柴屋先年之一件、兎角埒明不申候段、此間中人申出、右ハ米屋へ儀五郎引取迄猶予相願延引二相成候、本人へ何とか可申出筈二付其段申渡ス、

廿二日 晴 元次

廿三日 晴 喜六

廿四日 晴 右野右衛門

一、伊勢屋町掛所二而、来ル十月三月初夜へ七月初夜迄法座執行仕度、乍恐此段書附ヲ以御届奉申上候、以上、

戌九月

大津

永順寺○

伊勢屋町町代

彦兵衛○

聞届、

廿五日 晴 元次

廿六日 晴 喜六

一、此度米高直二付為御救米被下置、以御蔭村町難渋之者共取続仕難有仕合奉存候、然ル処、米高直二付取続も難出来者共多分御坐候付、何共恐多御願二御座候得共、是迄之御米直段二而被下置候様、此段奉御願申上候、乍恐右願之通御憐愍ヲ以、御聞濟被成下候ハ、広太之御慈悲難有仕合奉存候、以上、

願主

庄屋惣代

九月

堀池又三郎○

中西又次郎○

町代惣代

半兵衛○

彦兵衛○

廿七日

(野)
右の右衛門

一、右願書申上候処、最初米仲共売遣候時分ハ、壹升二付百五拾六文之
処ヲ百廿文ツ、二而売遣候得共、其後追々二上り候事故、今更御止
メニも難相成、然し毎迄も直下ケ御統と申義も難相成候付、今五十
俵とか百俵とか御払下ニ相成候得者、其跡者直段如何程ニ相成候者
不願と申事なれハ、然通り候得者、直段上り候上夫切二而頓与止メ
ニ相成候ハ、猶更難渋者困り可申二付、夫ハ長ク凌之出来候共
可然哉二付、米直段上り候割ヲ以、御払下米只今迄ハ上ケ候而、売
遣候様之勘弁いたし、尤極難渋之もの計売遣候筈之処、左程ニ無之
者も買候様之趣薄く相聞候付、是等之処、得ト調成丈買手渡し「」
可致旨御中老方御沙汰有之、「」ハ達ス、

一、十月十八日、十九日例年之通、報恩講執行仕度候間、此段御届申上
候、以上、

嘉永三年

戌九月

専光寺○

客僧大津常圓寺

一、報恩講例年之通左之日限執行仕度、此段御届奉申上候、以上、

十月八日、九日

山神光久寺

景澤寺

同十四日、十五日

唯泉寺

敬願寺

同十九日、廿日

右同断

唯泉寺

九月

惣代

敬願寺○

右御聞届、申渡、大目付へ案内済、

一、例年之通報恩講執行仕度、此段奉御届申上候、以上、

十月十日、十一日

京都見敬寺 光源寺

同十一日、十二日

自坊

同十五日、十六日

大養寺

同十五日、十六日

大津常圓寺

同廿日、廿一日

正法寺

同廿日、廿一日

馬場町光林寺

右之通御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

法傳寺

右之通御許容被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

法中惣代

嘉永三戌年

光源寺○

九月十九日

右御聞届、申渡、大目付案内済、

一、来十一月朔日ハ四日迄永代経執行仕度奉存候、此段御届申上候、以上、

嘉永三戌年

光源寺○

九月十九日

堀池又三郎○

右同断、

大養寺隠居

一、当月廿六日之夜メり相忘候処、盜賊入込盜取逃去候二付、乍恐此段

御届奉申上候、以上、

一、浅黄棒しま男物綿入

壹ツ

一、茶立しま女物綿入

壹ツ

一、茶浅黄立嶋 男物袷

壹ツ

一、茶立しま 女物裕 壺ッ

右何レも木綿花色うら

一、綿はかた男帯 一筋

一、浅黄立横木綿女帯 一筋

一、浜屋橋大形皮田葉粉入 金物武者形白焼付紐墨葦相付火明
きせる鉄はり象眼入緒鉄象眼入

一、銭四貫六百文計内四文銭百文有

メ八品

木下町

嘉永三年

米屋弥七〇

戌九月

町代

小兵衛〇

一、当寺会式例年之通、来十月十二日相勤申度、尤客僧者無御座候間、

乍恐此段以書付御届奉申上候、以上、

九月

庄屋

堀池又三郎〇

廿八日 雨 元次

廿九日 晴 喜六

十月中

朔日 雨 右野右衛門

一、当村市兵衛家屋敷勝手二付、此度村善八江相譲り申度段奉願上候、
善八方譲受申度段奉願上候、且又右善八家市兵衛江相譲り申度奉存
候付、右両様共願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合ニ可奉存候、以上、

九月

中庄村

市兵衛〇

善八〇

肝煎

右聞届、申渡

二日 晴 元次

一、此度当村善八江譲受候家屋敷沽券状虫附二相成候付、乍恐御仕替被
成下候様奉願上候、右願之通被成下候ハ、難有可奉存候、以上、

願主

戌十月

善八〇

庄屋

堀池又三郎〇

聞届、

三日 晴 喜六

四日 晴 右野右衛門

一、此節米高直二付、先達而直下米御払下二相成候処、先月廿五日切二
而払切二相成、同廿七日願書奉差上置候処、何之御沙汰も無之、兩
三度御催促申上候処、今月御達、先年米高直二付直下御払米被下候
節者、其日之相場方壹俵二付七匁下ケニ御払被成候得共、此度ハ倍
増二而拾四匁下二而、先五拾俵御払下二相成候、尤買手極難之向計
二省略いたし成丈買手減り候様可致との御沙汰二付、取調減方帳面
認差出候処、右ハ帳面通至極宜敷候由御沙汰、但大林村之処も大目
付中ノ頼談も有之候、精々減し候処貳拾人、右も一所ニ申上置、
差出候人数高

一、御救米是迄売来候分

一、五拾貳人 舟町

一、六拾壹人 網町

一、百六拾三人 西ノ庄村

一、七拾四人 木下村

一、三拾七人 木下町 一、拾八人 魚屋町
 一、三拾人 大津町 一、拾式人 大須賀町
 一、百拾三人 膳所村 一、四拾三人 伊勢屋町
 一、五人 紺屋町 一、八拾式人 中庄村
 一、八十三人 宮町 一、廿六人 八軒町
 一、八拾三人 別保村

×八百八拾式人

外二大林村

一、此度相改人数相減候分
 一、三拾式人 舟町 一、百六人 西ノ庄村
 一、四拾式人 網町 一、五拾九人 木下村
 一、三拾壹人 木下町 一、拾八人 魚屋町
 一、拾六人 大津町 一、拾人 大須賀町
 一、八拾式人 膳所村 一、式拾式人 伊勢屋町
 一、五人 紺屋町 一、七拾人 中庄村
 一、四拾式人 宮町 一、拾式人 八軒町
 一、五拾九人 別保村

×六百拾式人

差引式百七拾人減申候、
 右之外大林村式拾人有之、
 一、右是迄之処ハ、壹人前乳吞子迄四合当リニ売遣候得共、此度ハ三才迄之小兒ハ除キ、三才已上壹人前三合宛ヲ以、売遣し可申旨申出、其段申上ル、

五日 晴 元次
 七日 晴 喜六
 七日 晴 右野右衛門

八日 晴 元次

一、直下米極難之向買手^{人数}差出候付申上置候処、木下村、西ノ庄村、宮町ニ而調落ニ相成、都合十四人相増候断申出候、然ル処、右人数書帳面も差出候事故、売方柴屋利兵衛呼ニ遣、右増候分ハ其方ノ訳書御勝手差出候哉相尋候処、別ニ書付差出不申御沙汰も有之候ハ、御断可申上候、右難渋之者ニ候得者、当御役所ニ而御聞届置被下候様申聞承置候、乍併此後右之通追々ニ増候而ハ、人数書差出候トハ相違いたし、町役も不調不行届ニも相成候付、此度ハ承届候段申渡、

九日 晴 藤助

一、例年之通永代経来ル廿六日初夜ノ晦日迄修行仕度奉存候、法談之儀者自坊ニ而相勤申度候、此段御届奉申上候、以上、

嘉永三庚戌年

大養寺○

十月

一、小間物屋善七義、名目銀借入セ話致候付、先達而ハ他参留申付置候処、右願ニ罷在候親類病氣ニ付、面会いたし度旨申越候付、一宿掛ニ罷越度段願出承届、

十日 晴 喜六

十一日 雨 右野右衛門

一、小間物屋善七義、右願ニ罷在候親類者病氣差重リ候趣申越候付、毎々恐入候得共ニ宿掛罷越度旨願出承届、
 一、産神牛頭天王本社普請、御蔭を以出来仕難有仕合ニ奉存候、然ル処末社八将神社虫付大破ニ相成、其促難差置御坐候処、右本社残木伐端多分御座候付、右ヲ以修理仕度段奉願上候、何卒御憐愍ヲ以、右之段御許容被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

十月

神主
堀池主馬○

庄屋
堀池又三郎○

御聞届、申渡、

十二日 午後晴 元次

十三日 晴 藤助

十四日 晴 喜六

一、私義、去ル六月麴屋七兵衛跡家屋敷買得仕度段御願奉申上候処、御聞濟被為成下難有仕合奉存候、其後引越店出し仕候処、在所表無抛差支出来仕候二付、伊勢屋町八百屋半兵衛江相譲り申度、内談仕候付御願奉申上候、何卒御憐愍を以右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌十月

願主

杉江屋伊平次○

肝煎

孫次郎○

同

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

聞届、

一、膳所村杉江屋伊平次家屋敷、此度勝手二付相譲り度旨申聞候二付、熟談之上私譲り請申度乍恐此段奉願上候、何卒御憐愍を以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌十月

町代

八百屋半兵衛○

彦兵衛○

聞届、

十五日 晴 右野右衛門

十六日 晴 元次

十七日 晴 藤助

十八日 晴 喜六

十九日 晴 代藤助

廿日 雨 藤助

一、杉江屋伊平次義、糺屋七兵衛持来り候酒造稼株并酒道具一式譲り請、渡世可仕存心ニ御座候処、無抛差支出来仕、在所表江引取申候付、此度伊勢屋町八百屋半兵衛江相談仕候処、譲り呉候様申聞候付相譲り申度、半兵衛も譲り請申度、兩様乍恐奉願上候、右二付、辰年被為 仰付候御趣意之通急度相守可申候、尤浜田町伊平次持家江宅替仕、是迄通酒造稼仕度奉存候、何卒右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌十月

杉江屋伊平次○

八百屋半兵衛○

酒造稼物代

掛屋伊兵衛○

御聞届、申渡、郡奉行へ案内、

一、宮町庄屋田中与次兵衛不快二付退役相願候付、同町藤八代り二申立候段、昨日郡奉行方打合有之、

一、右庄屋南部藤八江被 仰付候段当人届来ル、

廿一日 晴 代元次

一、先達而方米高直二付、直下御救米御下ケ被成下、御蔭を以末々之者共取続仕難有仕合奉存候、然ル処、此節右御米払切ニ相成候得共、未高直ニ御座候付、未々之者必至難渋仕候付、御時節柄恐多奉存候得共、猶又御米直下ケニ而御下ニ被成下候様乍恐奉願上候、何卒格別之御憐愍を以、右願之通御払米被仰付被下置候ハ、以御蔭免も

角茂相續仕、莫太之御慈悲重々難有仕合可奉存候、以上、

十月

庄屋惣代

新左衛門○

同

又三郎○

町代惣代

半兵衛○

文助○

御聞届、廿八日二出ル、

廿二日 曇

喜六

廿三日 晴

右野右衛門

一、升屋礖五郎鯨一条歎願差出候得共、直様願下ニ参り候付、不記、

二、十一月五日〆九日晚迄、例年之通永代経執行仕度、乍恐此段奉願上

候、右願之通御聞済被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌十月

敬願寺○

庄屋

中西又次郎○

尾州清洲明泉寺

一、私義、此度彦次家買得之儀御願奉申上候処、御聞済被為 成下難有

仕合奉存候、然ル処、御割印沽券虫付二相成御座候付、新沽券二被

成下候様御願奉申上候、何卒御慈悲を以、右願之通被為 仰付被下

候ハ、重々難有仕合奉存候、以上、

九月

願主

辰蔵○

肝煎

孫次郎○

七左衛門○

庄屋

竹内新左衛門○

承届、

廿四日 晴

代 藤助

廿五日 晴

徳右衛門

一、大津花階寺、清徳院故障一条二付、京本山〆罷出候様申参り候付、

清徳院同道罷出候段、此間新左衛門届出、今廿五日、昨日引取候段

届出、本山二而申渡有之候書付持出ル、

申渡

膳所

清徳院檀那

惣代共

其方共菩提所清徳院住持、去弘化二巳年交代之節、継目礼金勘弁筋

之義、本寺花階寺江申立候〆事起り、彼是及混雜、年来奉懸御当山

江御苦勞、追々御憐愍之御内論も有之候処、兎角双方御利解不会得

之廉柄も有之、日数相重、際限をも不相弁、久々在京滞留罷在候段、

世上困窮各々仁慈専逸之年柄、御仁恵二も相戻り以之外二付、別段

之御慈悲を以、双方機熟相整候迄、清徳院進退御当山江御預り被成、

御宗制筋之義者、都て御沙汰二可相成候間、住持召連早々可令登山候、

尤是迄御内論之次第相弁、双方決心於申出者、尚 御憐愍御沙汰二

も可相成、且本末及和融候事候ハ、即刻在来通可被仰付、此段申

渡もの也、

惣本山役者

戌十月

廿六日 晴

代右野右衛門

廿七日 晴

喜六

一、産神牛頭天王普請向、御蔭を以出来仕難有奉存候、依之左之通執行

仕度奉存候、

一、来十一月廿日朝 上棟式

一、同日夜 正遷宮

一、同廿一日朝 御湯献備

右之通執行仕度奉存候間、乍恐此段御届奉申上候、以上、

神主

十月廿七日

堀池主馬○

庄屋

堀池又三郎○

十一月二認為替、八日申上候処、御聞届、

一、来月十一月廿日御遷宮二付、則廿一日囃子舞狂言宮町齋藤主計方奉納仕度段奉願上候、乍恐何卒右之段御聞濟被成下候ハ、難有仕合可奉存候、以上、

庄屋

十月

堀池又三郎○

十一月八日申上候処、御評義之上御沙汰可有由、

十一月十四日當時米直段も被達、且御救米も被下候御時節二付、囃子之義ハ差控、仕舞狂言計二いたし候様御沙汰有之、大目付へ案内、牛頭天王本社金物類之儀、時節柄入用も相掛り候事故、先見合候様先達而被 仰渡奉畏、右之心得二罷在候処、此度柴屋庄兵衛方寄附仕度申聞候付、乍恐右之段御伺奉申上候、以上、

庄屋

十月

堀池又三郎○

思召無之、承届、申渡、

廿八日 晴 右野右衛門

一、此節米高直二付直下御払米、庄屋、町代方之願書廿一日差上置候処御沙汰無之、兩三度御催促申上置候、且願面之外二口上米直段も少々ハ下り候へ共、矢張新米二而五拾三、四匁位、古米同上二而ハ、六

拾貳匁位、右等之直段二而ハ新米二而壹升二付百六拾八文位二壳候

趣、右二而ハ末々難渋者取続も出来兼候得共、中々壹俵二付四拾匁代二相成候様子も相見へ不申、御上様御厄介二相成候儀も際限無之、余り恐入候儀二付、今百俵御払下被成下候ハ、惣渡候時節二も相成、

〔又故〕

当年柄一統米不作とハ乍申、米仲共手二も銘々手二入候事、且直段是方上り候共、格別之儀も有之間敷哉二付、年内之所右百俵二而仕切、亦々春二も相成、弥直上り候ハ、其節御願可申上、余り際限もなく御厄介相願候義恐入候段申聞、其段申上置候処、申方至極尤二思召願通百俵御下二相成、且五拾俵ツ、兩度二御渡二可相成、別二願立二ハ不及、百俵ハ御下二相成候旨、御中老方御達、且又右百俵切二而先直下御払無之候間、右百俵売切二不相成、已前十日計も前廉より売手方二而買手江此度百俵切二而年内御払下無之、仍日限仕舞と申儀得と覚悟為致置可申、今日切二而最早仕舞と申候而ハ、猶更困窮之者共当惑可致二付、其心得可申渡置旨御沙汰有之、尤春二至り直上り候ハ、其節御取扱も可有之旨、

一、膳所大明神境内松木三本、大風之節近辺危迷惑之趣二付、切払申度段先達而届出、其節申上御聞届二相成候処、買手間違、段々延引二相成有之候処、此度売口出来候由、来月初旬切掛り度段届出先達而右ハ御聞届二相成有之候得共、大分延引二相成有之候事故、為念口上二而申上候処、御存寄無之承届候様御沙汰有之、申渡、

一、八幡宮十一月十五日七ツ時御火焼御湯

別保村

一、新羅大明神同十九日御火焼御湯

講中

一、天満宮同廿五日御火焼

神主

右例年之通執行、

神主

齋藤筑前代

戌十月

斎藤主計○

一、霜月八日七ツ時稻荷大明神火焼、

戌十月

一、例年之通来ル晦日御火焚、四時湯奉献、

木下宮

戌十月

馬杉信濃○

一、例年之通来ル晦日御火焼、九ツ時湯奉献、

西庄宮

戌十月

小西大和○

一、例年之通火焼神事左之通執行、

一、牛頭天王火焚、十一月朔日御湯献備、

一、田端山王火焼、十一月十八日、

神主

十月

堀池主馬○

一、来ル十一月朔日御火焚、御湯奉献、

神主

戌十月

初田和泉○

廿九日 晴 元次

一、当所産地神八幡宮御祭礼、別保村同様例年九月十五日御座候処、誠

二無抛儀二而、村町役人并年寄候者共心配難義之事共有之、且村町

共勝手二も相成候二付、甚以恐入たてまつり候得とも、何卒御慈悲

を以、宮町、八軒丁者別保村ト立別れ九月廿二日二被仰付被下候ハ、

安心仕難有仕合奉存候、此段偏二御聞濟之程奉願上候、以上、

八軒丁組頭

嘉永三年

喜兵衛○

戌九月

同町代

弥右衛門○

宮町肝煎

茂兵衛○

繁八○

庄屋

田中与次兵衛○

一、藤屋嘉七郷宿いたし候付、宿物近辺払底不自由二付、大津方取寄

候宿二而遣用溢候節ハ店二而売度段願書差出申上、御聞届二相成候

然ル処、切手売出置有無之節者、壹匁二壹分落二而錢二而相渡候趣

相聞、元来切手売之儀ハ願面二も無之、差留申付候、

一、別保村惣氏神若宮八幡宮祭礼之儀、今度宮町之者共祭り当日別

日二致度旨御願奉申上候趣二御座候得共、当村江一応之相談も不致、

如何之儀二御座候二付、口上之訳書乍恐差上奉り候、

一、右祭礼当日之儀者、前々仕来り通仕度奉存候、日柄別々二相成候

而者諸事二差支申候、勿論故障之種と相成可申哉二御座候、乍恐御

上様御武運長久、五穀為成就之祭礼与相心得申候得者、私事二而者

無御座不容易義二御座候、然ル処、新例を御願申上候儀者一統不承

知二御座候間、矢張在来通り被御立置被下度儀二御座候、

宮一条之訳左之通二御座候、

一、先年当社及大破候二付、修復之儀御願奉申上候而、御蔭を以普請

出来仕難有仕合奉存候、然ル処、右普請諸入用向多分相掛り候二付、

諸手ろ寄附等茂御座候得共、是以聊之儀二付、無抛御願奉申上候而

無尽講取結候処、何分時節悪敷主法通助成二も相成不申候二付、差

引残而銀六貫五百目柴屋庄兵衛方二借財二相成、右濟方之儀無抛村

方引請、今以年々相立居申候、

一、先年神輿大破二而神役等二難用無抛修復仕候処、入用高凡銀六貫目

余り相懸り申候、内銀貳百目余り諸手ろ寄進附御坐候、然ル処、差

引残而之借財、是も無抛村方へ引請、年々濟方仕居申候、

但し神輿之儀寄附之様ニ、外方ノ相心得申候仁も御座候趣ニ候得共、寄附者聊之事ニ而御坐候間、村方ニ而者全神具ニ而又々修復等相廻り候得者、何レ入用等相懸り候心得ニ御座候、

一、祭礼之節神輿昇之儀、前々ノ村方之者共相勤来り候処、中古猥ニ相成候ニ付、故障之儀出来仕村役人共も及迷惑ニ候義ニ付、文政七申年 御役所様ノ御定書頂戴仕候、右者諸家様御通行之御差支ニ不相成様、勿論町筋家居等江当り不申様被仰付候ニ付、御定書之趣相守り候ニ付、其後故障等一切無御坐候、

但し心願ニ付、神輿昇度者等御座候ハ、庄屋方江前日案内いたし候得者、右御定書之趣申聞セ候上、假余村之者ニ而も昇申候、乍併酒興之上理不尽ニ昇セ抔ト申者御坐候而も如何躰之故障等出来難計候ニ付、相断昇セ不申候義ニ御座候、乍恐右前文之通御座候、神礼之儀者氏子一躰之儀ニ御座候得者、何卒前々ノ仕来り通被為 仰付被下度奉存候、以上、

肝煎
弥右衛門○
戊十月

同
庄次郎○
庄屋

西村平八○

一、右両所願書先日差出候得共、付落し昨廿八日双方呼出し利解申渡ス、
一、大津花階寺、清徳院一条ニ付、清徳院江本山申渡書大目付中ノ被為見写置、

申渡

膳所
清徳院

其方儀、去ル弘化二巳年住職之刻、継目礼金本寺花階寺江檀那共勘

弁筋願出ルノ事起、一件差継久々御当山江奉懸御苦勞候次第御取調詰ニ至り候而者、初発端ノ其方不心得事柄ニ而も一寺住職之身分急度被仰付方も可被為在候得共、是迄出格之御慈悲を以深重之御利解御内諭之運ひ、旁以双方機熟相整候迄、其寺進退 御当山江被成御預り及和融候ハ、即刻在来通り可被 仰付候条、其旨相心得御宗制之儀者都而御当山江可相窺候、此段申達候、以上、

戊十月
晦日 晴雨 徳右衛門
惣本山役者

十一月中

朔日 晴 藤助

二日 晴 喜六

一、此度宿商仕候ニ付、切手売出し申候処、蒙御差^(察)当奉恐入候、右被仰出候通奉畏入、已来切手商之儀ハ決而不仕候、万一心得違等仕候得者、如何様之御咎ニも可被仰付候、為後日御請書奉差上候、以上、

嘉永三年
戊十一月
紺屋町
藤屋嘉七○
町代

浜屋半兵衛○

宿切手百五十三枚、代老刃五分ツ、右九月朔日ノ十月廿八日迄
売出し申候、

三日 晴 右野右衛門

四日 晴 元次 代藤助

五日 晴 徳右衛門

六日 晴 藤助

一、軍書講尺^(願)之義、二日夜ノ六日夜迄五夜之間御願ニ御座候処、来ル九日迄三夜之間日延之儀、乍恐奉御願上候、何卒御憐愍を以、右願之

通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

御聞届、申渡、大目付へ案内、

七日 晴 喜六

八日 晴 右野右衛門

一、当町内浅井屋清八之義、是迄以御蔭免も角も相続仕難有仕合奉存候、然ル処、御時節柄も六ヶ敷御座候故、壳体自然与衰微仕候而借財等も相嵩極難渋二付、精々心配仕候得共、若年者二御座候故、繰合等難相成、依之田中太右衛門江家屋敷建物共譲り渡申度、尤太右衛門方茂譲り請申度奉存候、本人清八義ハ他稼二罷越申候、右家屋敷二付聊故障等無御座候へ共、万一彼是と申者有之候ハ、親類共ハ不申及連印之者へ引受候而急速二埒明可申候間、右之段御賢察被成下候而、願之通御聞濟被為成下度奉願上候、何卒御仁恵ヲ以右願之通被為仰付被下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

浅井屋清八親類

嘉永三年

亀屋清次郎○

戌十一月

同大津

柴屋六兵衛○

譲り請主

田中太右衛門○

大津町組頭

佐兵衛○

町代

礧五郎○

一、当町内浅井屋清八所持被致候家屋敷建物共、先達而奉願上候而私江譲り請申候処、此度勝手二付、同町升屋礧五郎江譲御渡申度、尤礧五郎方も譲り請申度奉存候、右家屋敷二付、聊故障等無御座候得共、万一彼是と申出候者有之候ハ、連印之者引請候而急速二埒明可申候、乍恐右之段御賢察被成下候而、御聞濟可被下候様奉願上候、何

卒御慈悲を以右願之通被為仰付被下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

嘉永三年

戌十一月

譲り主

田中太右衛門○

親類

竹村弥左衛門○

譲り請

升屋礧五郎○

組頭

佐兵衛○

嘉助○

九日 晴 代藤助

十日 晴 徳右衛門

十一日 晴 藤助

十二日 晴 喜六

十三日 晴 右野右衛門

一、私共儀豆腐商仕、御蔭を以渡世仕難有仕合奉存候、然ル処、此節大豆元直段高直二相成、売上之直段卜引合不申甚以難渋仕候、右二付此度大豆元直段奉書上、左之通仕度奉願上候、

一、元漬豆壺石二付代銀百貳拾五匁

但し壺升二付百四拾八文替二御座候、

是迄十五文売

一、白豆腐壺丁 代拾七文売

是迄五文売

一、揚豆腐 代六文売

右申上候処、大津直段聞合候様御沙汰有之、廿日大津直段聞合候処、白豆腐壺丁二付十六文、揚豆腐六文、右申上候、此元も右直段同様売候様御沙汰有之、

十四日 晴 元次

一、膳所大明神境内松木三本買請、町筋ヲ北大手浜へ引出し度段米屋金五郎申届、其段御中老へ申上、大目付へも案内致ス、

十五日 晴 徳右衛門

一、右松木一本今日中ニ北大手浜へ出候趣申聞、其段申上候処、彼是手間取米善前二而日暮滞り有之、翌日北大手へ下口六ヶ敷往来留り候付、正法寺之辻方升屋之辻へ往来通し申度由申出、大目付中へ断申候、大目付中る御席へ申上有之、然ル処、御中老る大手へ下口二而一時半計も滞り、馬走疋、駕籠二挺御家中御通り候趣、此節御通行ハ少キ時分、且御大名方ハ御先触も可有之候得共、官家旁御用物等参り候節ハ御差支ニ相成候、右北大手曲り口手間取不申候様、人夫多く入早々引込候様可致、尤同心差出セ話為致候様御沙汰有之、

十六日 晴 藤助

一、今壹本明日引候段申出候、然ル処、明日 御仏参被遊候付、右相済不申候半而ハ難相成、右相済後二而ハ時刻も移り、又候途中ニ滞り候様二而ハ御差支ニ相成候付、前日ニ引拵致置、十八日早朝方引候方可然、乍然遅ク引初候共浜迄下り候都合なれハ不苦候得共、無覚束儀二候ハ、十八日二引可申段申聞候処、跡之一本ハ直成木且二度ハ引手功者も出来候付、浜迄参り候段申聞候、任其意候処、十七日又候日暮候得共、約束通引下候様同心共申付、四ツ時分迄掛り北大手町口土橋内へ引込、段々深更ニも相成候付、浜迄下不申駈合出候共格別邪^(魔)广ニも相成間敷、北大手御門西手ニ滞り有之、

十七日 晴 ^(貼紙)「喜六別」二書加

十八日 晴 代藤助

十九日 晴 元次

一、坂元九右衛門家作瓦見分、今日相済、

一、廿日、牛頭天王社上棟、同夜遷宮、翌日仕舞狂言奉納二付、同心兩

人ツ、出勤之事、

廿日 晴 徳右衛門

一、右上棟無別条相済、右野右衛門、喜六届、

廿一日 晴 藤助

一、昨夜牛頭天王遷宮無別条相済、同心届、

一、仕舞狂言無別条夕七ツ半時相済届、

廿二日 晴 喜六

一、銀六拾五匁八分七厘壹毛 坂本屋九右衛門

右家作いたし候付、為瓦代被下置候、

十一月

廿三日 晴 右野右衛門

一、家屋鋪壹ヶ所半軒役 東隣藤吉、西隣 庄右衛門

表間口六間壹尺五寸

裏幅 同断

裏行 拾式間四尺

右者当村与惣吉持屋敷二御座候処、此度勝手二付、同村利八弟常吉与申者へ相譲り申度、尤常吉義も買請申度、双方相談之治定仕候二付、此段御願奉申上候、何卒御仁恵を以、右願之通御聞済被為成下候得者難有仕合奉存候、以上、

十一月

売券代壹貫目

賣主

与惣吉〇

買主

常吉〇

肝煎

権六〇

庄屋

小西藤吉○

聞濟、申渡、

一、下浜田町庚申堂表軒下二、年齢五十才計之男非人行倒死居候二付、見改仕候処、惣身二疵等も無御座、全病死二相違無御座候付、取片付仕度此段御届申上候、以上、

十一月

養藏院○

肝煎

孫次郎○

庄屋

竹内新左衛門○

右夜九ツ時届出、承届、

廿四日 晴 元次

廿五日 晴 徳右衛門

一、当所酒造之者共儀、昨酉年三分二造り御座候処、酒売切申候二付、無扨此節買入仕候処、高直二御座候付甚以難涉仕候、何卒御憐愍ヲ以直上ケ被 仰付被下置候ハ、一統難有仕合奉存候、此段偏奉願上候、以上、

惣代

嘉永三戌年

掛屋伊兵衛○

十一月

酒直段 壹升二付貳百貳拾文 壹合二付貳拾三文

右願之通御聞濟被為成下候ハ、一統難有仕合奉存候、以上、

惣代

嘉永三庚戌年

掛屋伊兵衛○

十一月

十二月三日、大津直段聞合候処、壹升二付貳百拾八文、壹合

売廿二文売いたし候様御沙汰申渡ス、

一、当村紺屋平兵衛方へ一昨廿三日夜浜手之簀戸口を盜賊這入候躰二御

座候而、所持之品相改候処、居宅之掛出し二置候品、左之通相失申候二付、乍恐此段御届奉申上候、以上、

男物、盥二漬置申候

一、立しま給 壹

一、小俵二而塩

壹俵

一、皮踏 壹足

一、じゅわん

壹丁

×四品

願主

戌十一月廿五日

平兵衛○

肝煎

権六○

庄屋

小西藤吉○

廿六日 晴 藤助

廿七日 晴 喜六

一、八百屋半兵衛酒造稼商売、公边御届相濟候段御達有之、

廿八日 晴 右野右衛門

一、私義願御聞濟二而、先年古道具商売渡世二仕居候処、是迄毎月三日ツ、夜市奉願商ひ仕居候得共、夜分二而ハ諸事混雜ニも相成候へハ、此度相改昼市二仕度、毎月定日五日、廿日右両度二仕、尤私宅座敷ニ而神妙二売買成丈下直二売捌、代物取調之義ハ現銀ニ相定メ商ひ仕度、何卒以御憐愍、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、已上、

願主

大須賀町

嘉永三年

綿屋源次郎○

戌十一月

町代

文助○

聞届、申渡、

廿九日 晴 代右野右衛門

一、私親源兵衛義先達病死仕候付、名跡相続仕居候、御用向等親共同様
二被仰付被下置候様奉願上候、右願之通御聞濟被成下候ハ、難有仕
合奉存候、以上、

嘉永三年

戌十一月

大工源兵衛○

御城附大工年番

治兵衛○

紺屋町町代

半兵衛○

右願通御聞届、申渡、十二月三日、

十二月中

朔日 晴

徳右衛門

二日 晴

代 右野右衛門

三日 晴

喜六

一、直下御救米先々月百俵兩度二分御渡し可相成、且申立通此度百俵切
二而先休二相成候段御達有之、右百俵之米先月廿五、六日比二而扨
切二相成候段、役所江八届出候趣二候得共此方江不申聞、夫故今日
右御届申上ル、

四日 晴

藤助

五日 晴

元次

一、当暮定式被下書付ヲ以申之

一、御使者宿御扶持八月廿十二月迄、山形屋江被下申之、

六日 小雪

代 藤助

七日 朝雨、午後晴

代 徳右衛門

八日 時雨

喜六

一、私儀此度新右衛門与改名仕度、此段奉願上候、何卒右願之通御聞濟
被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

十二月

竹内新左衛門○

郡方へ同様願書差出候、同所へ存寄無之旨申入、

一、当村利兵衛表口溝端二、昨七日夜五ツ半時比、出生る百日計肥立申
候男子老入、立嶋綿入為致着用、老尺五寸廻り程之籠二入捨置申候
二付、乍恐右之段御届奉申上候、以上、

戌十二月

肝煎

与惣兵衛○

庄屋

小西藤吉○

右御届申上ル、

九日 晴

右野右衛門

一、同夜中庄村助四郎膳所村地先田地作り居候処、五俵計年貢御引合候
上、三俵米納残銀納約束之処銀納出来不申、中庄村庄屋江掛合之上
附立二致候段膳所村役人届出、

十日 晴

元次

一、大津問屋、本陣、百艘、当所歩役料三両式歩請取、并錢四貫文、銀
式匁七分受取、
一、銀六拾五匁八分七厘壹毛、坂本屋九右衛門瓦代右二口受取、当番へ
渡入、

十一日 曇

徳右衛門

十二日 曇

藤助

十三日 雪、晴

喜六

一、当町内笹屋与八儀、此度勝手二付大津大工町へ出稼二参り申度此段
奉願上候、何卒格別之御慈悲を以、右願之通御聞濟被成下候ハ、難
有仕合奉存候、以上、

肝煎

繁八○

嘉永三年

戌十二月

庄屋

南部藤八〇

聞届、申渡

分銅改二付差出候帳面

一、貳百目下分銅壹面

宮町

油屋藤八

伊勢屋町

一、五百目下分銅壹面

膳所村
柴田庄兵衛

一、三百目下同 壹面

同村
近江屋三郎兵衛

一、五百目下同 壹面

同村
田中屋平兵衛

一、三百目下同 壹面

同村
塩屋新右衛門

右者天保八酉年中庄村油屋与惣兵衛所持讓請、私所持仕居候付、御改請申度差出申候、

一、三百目下分銅壹面

中庄村

万屋七右衛門

同村

一、三百目下分銅壹面

小間物屋松右衛門

大津町

一、三百目下分銅壹面

杵屋礒五郎

八面

中庄村

一、三百目下分銅壹面

油屋与惣兵衛

右者天保八酉年、膳所村塩屋新右衛門方江身元慥成者故、入魂ヲ以讓り遣申候付此段御断申上候、

右者此度分銅御改二付、村町家別二不洩様篤と取調申候処、右之外所持之者壹人も無御座候、以上、

七月

後藤分銅御役所

一、三百目下分銅 壹面

膳所村

丸屋弥兵衛

同村

一、三百目下同 壹面

同村
米屋新蔵

一、三百目下同 壹面

同村
升屋宗兵衛

右先年御改後難渋付、親共何レへ売払候哉、親共相果候二付、吟味仕候得共相知レ不申候、

伊勢屋町

一、五百目下分銅 壹面

柏屋喜助

右私難渋二付御室八木兵庫方江相預ケ置候処焼失仕候、此段御断申上候、以上、

膳所惣代

年寄

十月

万左衛門

庄屋

又三郎

後藤分銅御役所

膳所村

麴屋七兵衛

紺屋町

麴屋五郎兵衛

宮町

塩屋平七

同

小間物屋太兵衛

大津町

米屋久右衛門

同町

徳屋与次兵衛

大須賀町

筒屋佐吉

此度分銅御改二付、右名前之者共先年御改後絶家仕跡方無御座候付、地頭表江も右之趣相届候処、分銅行衛吟味仕候様厳敷被 仰付候付、段々吟味仕候得とも、何分行方相知し不申候付、此段申出候処、其趣分銅御役所へも相届候様地頭表を被 達候二付、此段御断申上候、以上、

十月

膳所物代

年寄

万左衛門

庄屋

又三郎

後藤分銅

御役所

十四日 晴

右野右衛門

壯右衛門風邪二付、今日も引籠助御物頭戸沢才右衛門

一、私儀舍弟市兵衛ト申者、先年ゝ京都東洞院松原上ル所へ罷越表具職仕罷在候所、段々家職衰微いたし、心底も不実成仕方ニ而近比零落ニおよひ、右居所も退出仕暫高倉通魚棚下ル所ニ借宅仕、其砌ゝ種々難義ヲ申立、私方或者西庄村市右衛門方へ毎々迷惑成義申参り候二付、懇情不得止事致世話、又者私共打寄常々心得方不宜義得与申聞セ候得とも理非不相顧、矢張不実成心得ニ而無止事理不尽ニ難儀迷惑成義申参り、私方市右衛門両家甚及迷惑候処、此者當時在所

不定ニ而行衛相知不申無宿ニ相成候二付、後難之程も難計奉存候二付、親類共打寄り相談之上、親類一統一世之離縁与相定、此度義絶仕度奉存候二付此段御願奉申上候、何卒御賢慮ヲ以、右願之通御聴濟被成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

願主

戌十二月

石田屋藤吉○

親類惣代

石田屋市右衛門○

組頭

善兵衛○

町代

五兵衛○

一、先日御届奉申上候捨子之儀、早速貫請可申者も無御座候二付、村方之者江為致セ話置申候処、此度村方清蔵と申者貫請度段申出候付、差遣申度奉存候、右二付恐多御願奉存候得共、取片付料御下ケ被為被成下候様奉願上候、何卒御慈悲ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

肝煎

権六○

庄屋

小西藤吉○

戌十二月

一、当村御手廻り組久次義、昨十三日用向有之候、家内共罷出八ツ時比帰宅仕候処、表戸こし明盗這入候様子相見へ候、紛失之品左之通、
一、綿入胴着 壹ツ女物 一、古單物 壹ツ男物
一、白米貳升計 〆三品
乍恐右之通御届奉申上候、以上、

庄屋

中西文次郎○

嘉永三年

戌十二月

一、当町内平次郎悴己三郎与申者、此度西ノ庄村文蔵持屋敷間数沽券状
通二而買求申度、尤双方相談も治定仕候付此段奉願上候、何卒御慈
悲ヲ以、右願之通御聞濟被為成下候得者難有仕合奉存候、以上、

戊十二月

願主

己三郎○

町代

惣兵衛○

聞届、

一、当村文蔵持屋敷此度勝手二付、船町平次郎悴己三郎与申者へ相譲り
申度、尤双方相談も治定仕候付此段奉願上候、且又沽券状之義も御
裏印被為成下候様奉願上候、何卒御仁恵ヲ以、右願之通御聞濟被為
成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戊十二月

願主

文蔵○

肝煎

権六○

同

与惣兵衛○

庄屋

小西藤吉○

聞届、申渡、

十五日 晴 元次

一、鳥目拾貫文 西ノ庄村

右村方二捨子有之候付、取片付為入用被下置候、

十二月

一、此節兎角米高直二付、下方之者取続難渋仕候付、柴屋庄兵衛粥を焚、
先十日計施行遣し候段届、右場所柴屋利兵衛、柴屋七郎兵衛宅、右
助役ヲ以申上ル、

一、中浜田小間物屋善七義名目銀口入致候付、先達々他参留申付候様
御沙汰有之候、然ル処、永々二相成、右善七義旅職商稼居付甚難渋、
且追々月廻二も相成、掛取引合等罷越申度申出、先日相伺候処郡方
江手二も有之、同様二不相成候半而ハ、不都合二付一応郡方江も御
当り之上御沙汰可有之段御沙汰二候処、今日右他参留之義者差免、
乍併他行致度毎々役所江断召出口上承届候様、尤以来右口入之義決
而不相成候段申渡候様御達し有之、申渡、

十六日 曇 徳右衛門

十七日 雨 藤助

十八日 晴 喜六

十九日 晴 右野右衛門

廿日 晴 代藤助

一、金百足宛

一、鳥目三百文

右待合相勤候付被下置候、

一、鳥目三貫文

一、同五百文

右之通被下置候

水場

一、鳥目貳貫文

右当夏御蔵日覆并取片付骨折候付被下置候、

御蔵附四人

膳所村

一、鳥目壹貫文

右為筆墨料被下置候、

庄屋

柴屋

一、高嶋米三俵

庄兵衛

右御掛屋御用骨折相勤候付被下置候、

一、金貳百疋

右郷中御講御用骨折候付被下置候、

右同人

一、高嶋米貳俵

右御勝手方御用向格別骨折候付被下置候、

米屋

善兵衛

十二月

廿一日 晴 徳右衛門

一、新浜村嘉兵衛娘たミと申もの、此度樽屋新九郎媒人を以、私妻二貫申度此段奉願上候、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌十二月

柴屋庄兵衛○

町代

藤兵衛○

聞届、申渡、

一、私娘たミ与申者、此度膳所樽屋新九郎媒人を以、柴屋庄兵衛妻二遣申度、乍恐此段奉願上候、右願之通御聞濟被為成下候ハ、難有仕合奉存候、以上、

戌十二月

新浜村

嘉兵衛○

庄屋

小寺弥右衛門○

聞届、申渡、

廿二日 晴 代元次

廿三日 晴 喜六

坂本屋九右衛門

右近來御肴御用相勤候付上訴被仰付候、

十二月

廿四日 晴 右野右衛門

廿五日 晴 元次

一、膳所大明神境内松木切候跡道筋荒有之候、年始御社参も可有之、急々取片付候様申達、

廿六日 晴 徳右衛門

廿七日 晴 藤助

一、中ノ庄村行倒有之、山へ遣し候段届出、

廿八日 曇 喜六

一、昨廿七日御届奉申上候、当村行倒者、山之者二申付介抱為致候処、今朝相果候様申出候二付、村役人共与得与相改申候処、年比三拾歳計成男二而着用物者古繻^{（繻袴）}伴壹并古椀壹所持仕、其外所持之品等一切無御座、尤惣身疵等も無御座、全非人病死二紛無御座候、依之山ノ者二申付仮埋二為致度奉存候、乍恐此段御届申上候、以上、

肝煎

十二月廿八日

儀八○

庄屋

堀池又三郎○

廿九日 晴 右野右衛門

一、郡奉行後藤伴五郎左之手紙来ル、先達而郷中之者共名目銀借用品口入いたし候二付、夫々他参留申付置候処、此度急度叱之上、右他参留差免し候旨御家老中江御相談申上候処、別段御存知寄も無之旨御沙汰二付、今日差免し叱申渡候義御座候、右之段其御役前へも御案内申上候様御用番御達し御坐候間、此段御承知可被成候、右可得御意如斯二御座候、以上、

晦日 曇 元次

膳所町奉行川那辺壮右衛門「日記」の解読を終えて

私が古文書の勉強をはじめたのは、約一五年前に龍谷大学の社会人向け講座（通称REC）の古文書講座（初級）を受講したことに遡ります。その後、まもなくして天津市歴史博物館のれきはく講座で、樋爪修館長（当時）が古文書入門講座を担当され、それを受講したことを契機として博物館との関わりがはじまりました。

しばらくの間は講座で使われたテキストの写真コピーを頂き、作成した解読文を添削していただきました。その後、私が膳所に住んでいることもあって、「膳所藩の文書を読みたい」とお尋ねしたところ、紹介いただいたのがこの川那辺壮右衛門「日記」でした。

それから一年程の間、樋爪さんから特訓を受ける機会を頂きました。月に一回ほどのペースで、土日の朝一番に時間を取っていただいたのです。本資料は四冊で構成されていますが、初心者だったこともあって、読みやすい（虫損の少ない）嘉永二年六月～九月の分（第一冊目）から読みはじめました。ところが、壮右衛門の筆跡はかなりのくせ字であり、大いに苦勞し、指導していただいた一年間では、一冊も読み終えることができませんでした。

数年後、学芸員の高橋大樹さんから「日記」全体（四冊分）の写真を提供いただき、改めて解読をはじめました。それを大津古文書研究会のメンバー全員でチェックし、博物館の事業として、樋爪元館長、高橋さん、五十嵐さんの校訂を経て、今般世に出る運びとなりました。大津古文書研究会は、天津市歴史博物館のれきはく講座（古文書講座）を受講した有志で結成されたグループであり、少人数で博物館所蔵文書の解読をおこなっています。例会では原則週一回のペースで、膳所藩関係の古文書を中心に読んでいます。

今後、膳所藩や膳所藩士に関わる文書群についても、機会があれば解読文をまとめていきたいと考えています。

（大津古文書研究会 高野隆一）

大津古文書研究会

秋山恭伸 櫻井迪朗

高野隆一 谷口利正

大津市歴史博物館調査報告書2

膳所藩町奉行川那辺壮右衛門日記

編集・発行

大津市歴史博物館

〒五二〇〇〇三七

滋賀県大津市御陵町二番二号

電話 〇七七―五二二―二二〇〇

発行日

令和四年（二〇二二）三月二五日

印刷

有限会社竹田謄写堂